さいたま市内遺跡発掘調査報告書　第16集

# 丸ヶ崎館跡（第１次調査）
# 新曲輪遺跡（第２地点）
# 根切遺跡（第13次調査）
# 大北遺跡（第10～13次調査）
# 西原遺跡（第７地点）

２０１７

さいたま市教育委員会

# 丸ヶ崎館跡（第１次調査）
# 新曲輪遺跡（第２地点）
# 根 切 遺 跡（第13次調査）
# 大 北 遺 跡（第10～13次調査）
# 西 原 遺 跡（第７地点）

２０１７

さ い た ま 市 教 育 委 員 会

# 例　言

1　本書は、埼玉県さいたま市に所在する埋蔵文化財の発掘調査結果を報告する『さいたま市内遺跡発掘調査報告書』の第16集である。

2　収録した発掘調査は、５遺跡における８件である。これらは、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財記録保存を目的として、平成22～27年度にさいたま市教育委員会が実施したものの一部である。

3　発掘調査の実施及び出土品整理・調査報告書の作成にあたり、国庫補助金の交付を受けた。

4　収録した発掘調査は次のとおりである。

| 遺跡名 | 県遺跡番号 | 発掘調査期間 | 調査担当者 | 本書収録部 |
|---|---|---|---|---|
| 丸ヶ崎館跡（第１次調査） | 12-148 | 平成22年12月９日～12月17日 | 澤柳秀実・関根俊雄 | 第１部 |
| 新曲輪遺跡（第２地点） | 77-062 | 平成22年５月26日～６月30日 | 中村誠二・関根俊雄 | 第２部 |
| 根切遺跡（第13次調査） | 12-348 | 平成22年８月31日～９月30日 | 澤柳秀実・関根俊雄 | 第３部 |
| 大北遺跡（第10次調査） | 01-037 | 平成23年２月18日～３月11日 | 青木文彦・関根俊雄 | 第４部 |
| 大北遺跡（第11次調査） | 01-037 | 平成23年４月14日～４月21日 | 澤柳秀実・関根俊雄 | 第４部 |
| 大北遺跡（第12次調査） | 01-037 | 平成23年４月21日～４月28日 | 澤柳秀実・関根俊雄 | 第４部 |
| 大北遺跡（第13次調査） | 01-037 | 平成24年４月18日～４月27日 | 澤柳秀実・小峰智仁 | 第４部 |
| 西原遺跡（第７地点） | 77-073 | 平成28年２月４日～２月24日 | 関根俊雄・橋本玲未・内田裕也 | 第５部 |

5　収録した発掘調査に係る届出・通知等の法的手続きの概要は次の通りである。なお、②及び③の通知の通知者は、いずれもさいたま市教育委員会教育長である。

(1) 丸ヶ崎館跡（第１次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
　届出年月日：平成22年11月２日　　受理年月日・番号：平成22年11月２日付教生文第2622号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成22年12月３日付教生文第2899号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
　　通知年月日・番号：平成22年12月８日付教生文第3009号

(2) 新曲輪遺跡（第２地点）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
　届出年月日：平成22年４月15日　　受理年月日・番号：平成22年４月15日付教生文第169号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成22年５月14日付教生文第399号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
　　通知年月日・番号：平成22年５月24日付教生文第597号

(3) 根切遺跡（第13次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
　届出年月日：平成22年７月９日　　受理年月日・番号：平成22年７月９日付教生文第1374号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成22年８月26日付教生文第1743号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
　　通知年月日・番号：平成22年８月30日付教生文第1779号

(4) 大北遺跡（第10次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日：平成23年１月25日　　受理年月日・番号：平成23年１月25日付教生文第3537号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成23年２月15日付教生文第3763号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
通知年月日・番号：平成23年２月17日付教生文第3801号

(5) 大北遺跡（第11次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
届出年月日：平成23年４月１日　　受理年月日・番号：平成23年４月１日付教生文第97号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成23年４月11日付教生文第98号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
通知年月日・番号：平成23年４月13日付教生文第143号

(6) 大北遺跡（第12次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
届出年月日：平成23年１月24日　　受理年月日・番号：平成23年１月24日付教生文第3524号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成23年４月15日付教生文第159号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
通知年月日・番号：平成23年４月19日付教生文第160号

(7) 大北遺跡（第13次調査）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
届出年月日：平成24年３月２日　　受理年月日・番号：平成24年３月２日付教生文第3763号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成24年４月６日付教生文第18号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
通知年月日・番号：平成24年４月13日付教生文第80号

(8) 西原遺跡（第７地点）
①文化財保護法第93条第１項に基づく埋蔵文化財の発掘届
届出年月日：平成27年11月10日　　受理年月日・番号：平成27年11月10日付教生文第2747号
②上記届出に対する指示通知　　通知年月日・番号：平成28年１月25日付教生文第3492号
③文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知
通知年月日・番号：平成28年１月29日付教生文第3565号

6　この調査による遺物および遺構図、写真等の資料はさいたま市教育委員会が保管している。

7　本書の執筆は、次のとおりに分担した。

第１部：青木文彦（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課　課長補佐兼埋蔵文化財係長）

第２部：関根俊雄（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係　主査）

第３部：橋本玲未（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係　主任）

第４部・第５部：鈴木久雄（さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課埋蔵文化財係　主査）

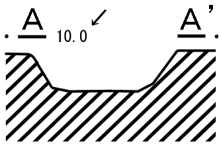
8　第２部　新曲輪遺跡の弥生土器については、笹森紀己子氏より御教示を賜った。また、弥生土器の実測図は笹森氏に作成して頂いた。記して御礼申し上げる。

## 凡　　例

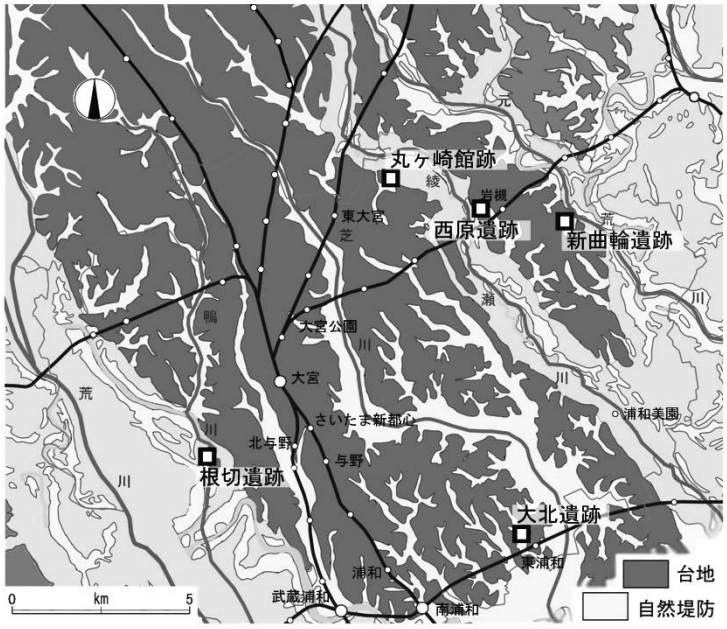
1　遺構断面図における水準は、右図例（矢印部分）のように示した。数値はすべて標高を示し、単位はｍである。

2　遺構図における方位は磁北を表している。

3　各部「発掘調査の位置」図中の遺跡範囲は、平成29年３月末日現在のものである。



標高の表示例




第１図　掲載遺跡の位置

# 目　　次


例言　(1)
凡例　(2)
目次　(3)

## 第１部　丸ヶ崎館跡（第１次調査）

第Ⅰ章　調査の契機と経過　……　1
　第１節　調査の契機　……　1
　第２節　調査の方法と経過　……　1
第Ⅱ章　遺跡の概要　……　1
　第１節　丸ヶ崎館跡の位置と周辺の遺跡　…　1
　第２節　調査区の概要　……　4
第Ⅲ章　遺構と遺物　……　4
　第１節　層　序　……　4
　第２節　遺構と遺物　……　5
　　１　井　戸　……　5
　　２　堀　……　6
　第３節　まとめ　……　7

## 第２部　新曲輪遺跡（第２地点）

第Ⅰ章　調査の契機と経過　……　8
　第１節　調査の契機　……　8
　第２節　調査の方法と経過　……　9
　　１　方　法　……　9
　　２　経　過　……　9
第Ⅱ章　遺跡の概要　……　12
　第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡　……　12
　第２節　調査区の概要　……　13
第Ⅲ章　遺構と遺物　……　13
　第１節　縄文時代の遺構と遺物　……　13
　　１　第２号住居跡　……　14
　　２　第２号住居跡出土遺物　……　14
　　３　土　坑　……　14
　　４　土坑出土遺物　……　16
　　５　ピット　……　16
　　６　ピット出土遺物　……　16
　　７　包含層出土遺物　……　16
　第２節　弥生時代以降の遺構と遺物　…　18
　　１　第１号住居跡　……　18
　　２　第１号住居跡出土遺物　……　18
　　３　土　坑　……　25
　　４　溝　……　25
　　５　第１号溝出土遺物　……　26
　　６　ピット　……　26

## 第３部　根切遺跡（第13次調査）

第Ⅰ章　調査の契機と経過　……　27
　第１節　調査の契機　……　27
　第２節　調査の方法と経過　……　27
第Ⅱ章　遺跡の概要　……　27
　第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡　……　27
　第２節　調査区の概要　……　30
第Ⅲ章　遺構と遺物　……　32
　第１節　住居跡　……　32
　第２節　その他の遺構　……　40
　　１　土　坑　……　40
　　２　溝　……　41

３　ピット群 …… 45

第４部　大北遺跡（第10次～13次調査）
第Ⅰ章　調査の契機と経過 …… 47
第１節　調査の契機 …… 47
第２節　調査の方法と経過 …… 48
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 49
第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 49
第２節　調査区の概要 …… 52
第Ⅲ章　第10次調査の遺構と遺物 …… 53
第１節　遺　構 …… 53
１　土　坑 …… 53
２　ピット …… 55
第２節　遺　物 …… 55
１　土坑出土遺物 …… 55
２　ピット出土遺物 …… 55
３　包含層出土遺物 …… 56
４　遺構外出土遺物 …… 56
第Ⅳ章　第11次調査の遺構と遺物 …… 58
第１節　遺　構 …… 58
１　住居跡 …… 58
２　土　坑 …… 59
３　ピット …… 60
第２節　遺　物 …… 60
１　住居跡出土遺物 …… 60
２　土坑出土遺物 …… 61
３　ピット出土遺物 …… 61
４　包含層出土遺物 …… 61
５　遺構外遺物 …… 63
第Ⅴ章　第12次調査の遺構と遺物 …… 64
第１節　遺　構 …… 64
１　土　坑 …… 64
２　ピット …… 65
第２節　遺　物 …… 65
１　土坑出土遺物 …… 65
２　ピット出土遺物 …… 65
３　包含層出土遺物 …… 66
４　遺構外出土遺物 …… 66
第Ⅵ章　第13次調査の遺構と遺物 …… 67
第１節　遺　構 …… 67
１　土　坑 …… 67
第２節　遺　物 …… 68
１　土坑出土遺物 …… 68
２　包含層出土遺物 …… 68
３　遺構外出土遺物 …… 68

第５部　西原遺跡（第７地点）
第Ⅰ章　調査の契機と経過 …… 69
第１節　調査の契機 …… 69
第２節　調査の方法と経過 …… 70
１　方　法 …… 70
２　経　過 …… 70
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 71
第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡 … 71
第２節　調査区の概要 …… 72
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 73
第１節　遺　構 …… 74
１　土　坑 …… 74
２　溝 …… 75
３　ピット …… 76
第２節　遺　物 …… 76
１　土坑出土遺物 …… 76
２　第１号溝出土遺物 …… 76
３　包含層出土遺物 …… 77
４　遺構外出土遺物 …… 78
５　中世出土遺物 …… 79

写真図版
報告書抄録

# 挿図目次

第１図　掲載遺跡の位置 …… (3)
**丸ヶ崎館跡**
第２図　遺跡の位置 …… 2
第３図　丸ヶ崎館跡の地形と調査地点 …… 3
第４図　調査区の位置 …… 4
第５図　検出遺構 …… 5
第６図　出土遺物 …… 6
**新曲輪遺跡**
第７図　遺跡の位置 …… 8
第８図　発掘調査の位置 …… 9
第９図　調査区の位置 …… 10
第10図　全測図及び全土層図 …… 11
第11図　縄文時代の遺構 …… 13
第12図　第２号住居跡 …… 14
第13図　第２号住居跡出土遺物 …… 15
第14図　土　坑 …… 15
第15図　土坑・ピット・包含層出土遺物 …… 17
第16図　弥生時代以降の遺構 …… 18
第17図　第１号住居跡 …… 19
第18図　第１号住居跡出土遺物（１） …… 21
第19図　第１号住居跡出土遺物（２） …… 22
第20図　第１号住居跡出土遺物（３） …… 23

第21図　第１号住居跡出土遺物（４）　…… 24
第22図　土　坑　…… 25
第23図　第１号溝　…… 25
第24図　第１号溝出土遺物　…… 26
**根切遺跡**
第25図　遺跡の位置　…… 28
第26図　発掘調査の位置　…… 29
第27図　全測図及び全土層図　…… 30
第28図　第96・97号住居跡　…… 31
第29図　第96・97号住居跡遺物出土位置　…… 32
第30図　第96号住居跡出土遺物　…… 33
第31図　第97号住居跡出土遺物（１）　…… 35
第32図　第97号住居跡出土遺物（２）　…… 36
第33図　第97号住居跡出土遺物（３）　…… 37
第34図　第97号住居跡出土遺物（４）　…… 38
第35図　第25・26号土坑　…… 39
第36図　第25・26号溝　…… 40
第37図　第25号溝出土遺物（１）　…… 42
第38図　第25号溝出土遺物（２）　…… 43
第39図　第25号溝出土遺物（３）　…… 44
第40図　ピット群　…… 46
**大北遺跡**
第41図　遺跡の位置　…… 47
第42図　発掘調査の位置　…… 51
第43図　調査区の位置　…… 52
・第10次調査
第44図　全測図及び全土層図　…… 53
第45図　土　坑　…… 54
第46図　土坑出土遺物　…… 55
第47図　ピット出土遺物　…… 56
第48図　包含層出土遺物　…… 56
第49図　遺構外出土遺物　…… 57
・第11次調査
第50図　全測図及び全土層図　…… 58
第51図　第１号住居跡　…… 59
第52図　土　坑　…… 60
第53図　住居跡出土遺物　…… 61
第54図　土坑出土遺物　…… 61
第55図　ピット出土遺物　…… 61
第56図　包含層出土遺物　…… 62
第57図　遺構外出土遺物　…… 63
・第12次調査
第58図　全測図及び全土層図　…… 64
第59図　土　坑　…… 65
第60図　土坑・ピット出土遺物　…… 65
第61図　包含層出土遺物　…… 66
第62図　遺構外出土遺物　…… 66
・第13次調査
第63図　全測図及び全土層図　…… 67
第64図　土坑出土遺物　…… 68
第65図　包含層出土遺物　…… 68
第66図　遺構外出土遺物　…… 68
**西原遺跡**
第67図　遺跡の位置　…… 69
第68図　発掘調査の位置　…… 72
第69図　調査区の位置　…… 73
第70図　全測図及び全土層図　…… 74
第71図　土　坑　…… 75
第72図　第１号溝　…… 75
第73図　土坑出土遺物　…… 76
第74図　第１号溝出土遺物　…… 77
第75図　包含層出土遺物　…… 78
第76図　遺構外出土遺物　…… 79
第77図　中世出土遺物　…… 79

# 表 目 次

**丸ヶ崎館跡**
第１表　丸ヶ崎館跡の範囲における発掘調査　…… 4
**新曲輪遺跡**
第２表　ピット観察表　…… 16
第３表　ピット計測表　…… 26
**根切遺跡**
第４表　住居跡内ピット計測表　…… 32
第５表　遺物対照表　…… 33
第６表　ピット計測表　…… 46
**大北遺跡**
・第10次調査
第７表　ピット計測表　…… 55
・第11次調査
第８表　第１号住居跡ピット計測表　…… 59
第９表　ピット計測表　…… 60
・第12次調査
第10表　ピット計測表　…… 65
**西原遺跡**
第11表　ピット計測表　…… 76

# 図版目次

図版１　**丸ヶ崎館跡**

（１）重機による表土除去　（２）調査状況　（３）調査区土層　（４）調査区全景　（５）第１号井戸

図版２　**丸ヶ崎館跡**

（１）第１号堀　（２）出土遺物（第５図１～６）

図版３　**新曲輪遺跡**

（１）１区完掘状況　（２）２区完掘状況　（３）第２号住居跡　（４）第７・８号土坑

図版４　**新曲輪遺跡**

（１）第１号住居跡　（２）第１号住居跡遺物出土状態　（３）第１号住居跡遺物出土状態　（４）第１号住居跡遺物・炭化材出土状態　（５）第１号住居炉跡　（６）第１・３号土坑　（７）第１号溝　（８）第１号溝焼土検出状態

図版５　**新曲輪遺跡**

（１）第２号住居跡出土遺物（第13図１～11）　（２）土坑・ピット出土遺物（第15図１～５）　（３）包含層出土遺物（第15図６～15）

図版６　**新曲輪遺跡**

（１）第１号住居跡出土遺物（第18図１～７・第19図８）

図版７　**新曲輪遺跡**

（１）第１号住居跡出土遺物（第19図９～15・第20図16～25）

図版８　**新曲輪遺跡**

（１）第１号住居跡出土遺物（第21図26～46）　（２）第１号溝出土遺物（第24図１～３）

図版９　**根切遺跡**

（１）調査区全景（東側）　（２）調査区全景（西側）

図版10　**根切遺跡**

（１）第96号住居跡（西側）　（２）第97号住居跡（東側）　（３）第97号住居跡内ピット（北東側）　（４）第27号溝（北側）　（５）遺物出土状況（第29図No.１・２）　（６）遺物出土状況（第29図No.４・５）　（７）遺物出土状況（第29図No.６～９）　（８）遺物出土状況（第29図No.10～14）

図版11　**根切遺跡**

（１）第96号住居跡出土遺物（第30図１・２）　（２）第96号住居跡出土遺物（第30図３）　（３）第97号住居跡出土遺物（第31図５・13・19）　（４）第97号住居跡出土遺物（第31図１～４）　（５）第97号住居跡出土遺物（第31図５）　（６）第97号住居跡出土遺物（第31図６～８）　（７）第97号住居跡出土遺物（第31図９～12）

図版12　**根切遺跡**

（１）第97号住居跡出土遺物（第31図13）　（２）第97号住居跡出土遺物（第31図14～18）　（３）第97号住居跡出土遺物（第31図19）　（４）第97号住居跡出土遺物（第31図20・21）　（５）第97号住居跡出土遺物（第31図22・23）　（６）第97号住居跡出土遺物（第32図１）　（７）第97号住居跡出土遺物（第32図４）　（８）第97号住居跡出土遺物（第32図２）　（９）第97号住居跡出土遺物（第32図３）　(10)第97号住居跡出土遺物（第32図５）

図版13　**根切遺跡**

（１）第97号住居跡出土遺物（第33図１）　（２）第97号住居跡出土遺物（第33図２）　（３）第97号住居跡出土遺物（第34図１）　（４）第97号住居跡出土遺物（第34図２）　（５）第97号住居跡出土遺物（第34図３）

図版14　**根切遺跡**

（１）第25号溝出土遺物（第37図１・２）　（２）第25号溝出土遺物（第37図３～６）　（３）第25号溝出土遺物（第37図７～10）　（４）第25号溝出土遺物（第37図11～15）　（５）第25号溝出土遺物（第37図16～18）　（６）第25号溝出土遺物（第37図19・20）

図版15　**根切遺跡**

（１）第25号溝出土遺物（第38図１）　（２）第25号溝出土遺物（第38図２）　（３）第25号溝出土遺物（第38図３～６）　（４）第25号溝出土遺物（第38図７・８）　（５）第25号溝出土遺物（第39図１）　（６）第25号溝出土遺物（第39図２・３）

図版16　**大北遺跡（第10次）**

（１）調査区１区全景　（２）調査区２区全景　（３）第４号土坑

図版17　**大北遺跡（第10次）**

（４）土坑出土遺物(表)（第46図１～２）　（５）ピット出土遺物(表)（第47図３～６）　（６）土坑出土遺物(裏)(第46図１～２）　（７）ピット出土遺物(裏)（第47図５）　（８）包含層出土遺物(表)（第48図７～14）　（９）包含層出土遺物(裏)（第48図７～14）　(10)包含層出土遺物(表)（第48図15～22）　(11)包含層出土遺物(裏)（第48図15～19）　(12)遺構外出土遺物(表)（第49図23～30）　(13)遺構外出土遺物(裏)（第49図23～24）

図版18　**大北遺跡（第11次）**

（１）調査区全景　（２）第1号住居跡　（３）第１号土坑、第２号土坑　（４）作業風景　（５）第１号住居跡出土遺物(表)（第53図１～８）　（６）第１号住居跡出土遺物(裏)（第53図１～６）　（７）土坑出土遺物(表)（第54図９～15）　（８）土坑出土遺物(裏)（第54図９～15）

図版19　**大北遺跡（第11次）**

（９）ピット出土遺物(表)（第55図16～17）　(10)ピット出土遺物(裏)（第55図16～17）　(11)包含層出土遺物(表)（第56図18～31）　(12)包含層出土遺物(裏)（第56図18～31）　(13)包含層出土遺物(表)（第56図31～43）　(14)包含層出土遺物(裏)（第56図31）　(15)遺構外出土遺物(表)（第57図44～50）　(16)遺構外出土遺物(裏)（第57図44～50）　(17)遺構外出土遺物(表)（第57図51～54）

図版20　**大北遺跡（第12次）**

（１）調査区全景　（２）第３号土坑及びピット群　（３）黒曜石製の石鏃出土状況

図版21　**大北遺跡（第12次）**

（４）土坑出土遺物(表)（第60図１）　（５）土坑出土遺物(裏)（第60図１）　（６）ピット出土遺物（第60図２）　（７）包含層出土遺物(表)（第61図３～14）　（８）含層出土遺物(裏)（第61図３～14）　（９）包含層出土遺物(表)（第61図15～17）　(10)包含層出土遺物(裏)（第61図15）　（７）遺構外出土遺物(表)（第62図18～25）　（８）遺構外出土遺物(裏)（第62図18～25）

図版22　**大北遺跡（第13次）**

（１）調査区全景　（２）調査区東側　（３）第１号土坑　（４）作業風景　（５）土坑出土遺物(表)（第64図１～２）　（６）土坑出土遺物(裏)（第64図１～２）　（７）包含層出土遺物（第65図３）　（８）遺構外出土遺物(表)（第66図４～７）　（９）その他出土遺物(裏)（第66図４）

図版23　**西原遺跡**

（１）１区全景　（２）２区全景　（３）調査風景

図版24　**西原遺跡**

（４）土坑出土遺物（第７図）　（５）第１号溝出土遺物（第８図）　（６）第１号溝出土遺物（第８図）　（７）遺物包含層出土遺物（第９図12～19）　（８）遺物包含層出土遺物（第９図20～26）　（９）遺物包含層出土遺物（第９図27～31）　(10)遺物包含層出土遺物（第９図32～37）　(11)遺物包含層出土遺物（第10図44～46）　(12)遺物包含層出土遺物（第10図38～43）　(13)中世の出土遺物（第11図47～48）

# 第１部
# 丸ヶ崎館跡（第１次調査）

## 第Ⅰ章　調査の契機と経過

### 第１節　調査の契機

今回の発掘調査は、さいたま市見沼区大字丸ヶ崎字本村890－7地内の丸ヶ崎館跡（埼玉県遺跡番号12－148）における個人専用住宅建設に伴い、記録保存を目的として実施した。

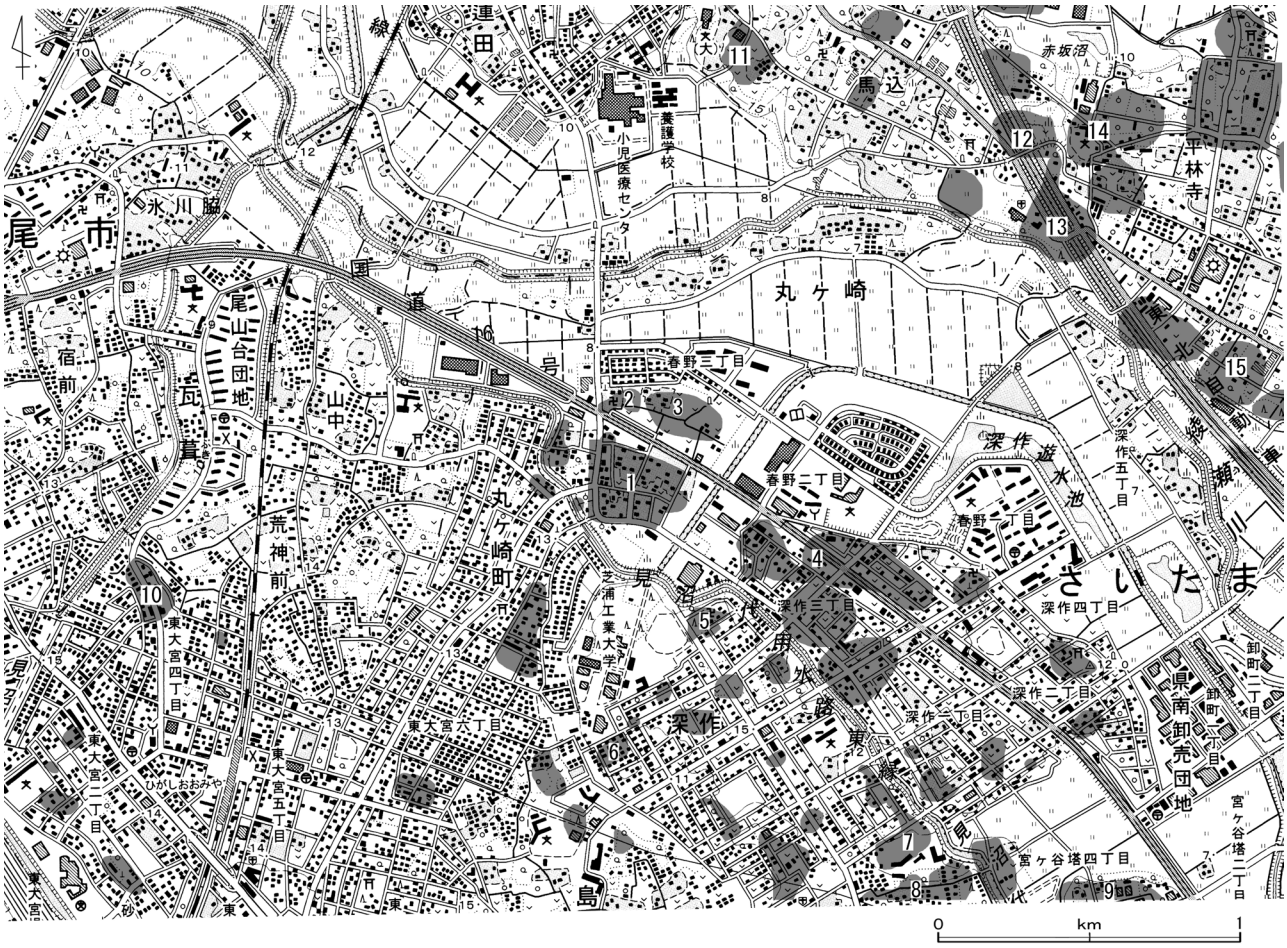
平成22年（2010）11月２日、上記の土地における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長に宛てて、埋蔵文化財発掘届が提出された。これを承け、さいたま市教育委員会が同年11月25日に確認調査を実施したところ、開発区域の北側で堀状の遺構などの遺構・遺物の所在が確認された。今回の工事計画では確認された遺構に影響が及ぶことが確実であったことから、さいたま市教育委員会は遺跡の保存について工事主体者と協議を行った。その結果、工事計画の変更による遺跡の現状保存は困難との結論に至った。このため、さいたま市教育委員会は、現状保存が不可能な範囲については工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じられたい旨の指示を平成22年12月３日付けで通知した。工事主体者は、さいたま市教育委員会に発掘調査の実施を依頼することとし、さいたま市教育委員会は依頼に基づき、平成22年12月９日から12月17日の間、現地における発掘調査作業を実施した。

### 第２節　調査の方法と経過

発掘調査は、平成22年12月９日から12月17日の間、実施した。12月９日に調査区を設定した後、重機を用いて表土除去を行い、遺構検出作業を実施した。検出した遺構は、確認調査時に所在を確認した堀１基であった。この堀は調査区北端を東西に伸びており、これを第１号堀とした。その南側では攪乱が著しく、遺構の所在は確認されなかった。12月10日より第１号堀の覆土除去作業を行った。覆土除去を進める過程で、第１号堀に切られる井戸を東端部で、ピット２基を南壁で検出した。遺構の覆土除去作業と並行して遺構平面図・土層図の作成等の記録作業を行った。なお、平面図作成は平板測量により実施した。その終了後の12月17日に調査区の埋め戻しを行い、現地における調査の全工程を完了した。

## 第Ⅱ章　遺跡の概要

### 第１節　丸ヶ崎館跡の位置と周辺の遺跡




**1：丸ヶ崎館跡**・丸ヶ崎遺跡・A-149号遺跡・A-150号遺跡、2：A-146号遺跡、3：合ノ谷遺跡、4：貝崎貝塚、5：深作原遺跡、6：稲荷原遺跡、7：深作稲荷台遺跡、8：A-230号遺跡、9：宮ヶ谷塔貝塚、10：東北原遺跡、11：馬込五番遺跡、12：馬込遺跡、13：平林寺遺跡、14：平林寺西遺跡、15：西原三遺跡

第２図　遺跡の位置

丸ヶ崎館跡はさいたま市の北部、見沼区大字丸ヶ崎地内に所在する。付近はＪＲ宇都宮線東大宮駅の北東2.3㎞ほどに当る。遺跡の北側を横断する国道16号（東大宮バイパス）沿いに各種の店舗・事業所、その南側では土地区画整理事業の施行により宅地化が進んでいる。

遺跡は綾瀬川の右岸、大宮台地片柳大和田支台の北東縁に位置している。遺跡の東側には、綾瀬川の流れる沖積地から南方へと伸びる開析谷が台地内に深く入り込んでおり、縄文時代前期の貝塚として古くから知られる貝崎貝塚（深作貝塚）のある深作地区との間を隔てている。遺跡は、この谷に向って東へと短く突出した台地の突端部上に占地している。この突端部には現在の国道16号バイパスの位置に上記の谷から西へと小さな支谷が入り込んでおり、台地上はこの谷によって南北に分断されている。丸ヶ崎館跡は、南北に分断された台地突端部の南側台地のほぼ全域に占地している。遺跡内の地表面は西から東へと緩やかに傾斜しており、西側での標高は12m台、東側では10m台である。南北及び東側の谷内の標高は７～８ｍである。

本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世の各時代の遺跡が分布している（第２図）。縄文時代早期撚糸文系土器の稲荷原式の標式遺跡である稲荷原遺跡（6）、大正年間から発掘調査が繰り返し行われてきた前述の貝崎貝塚（深作貝塚）（4）、埼玉県有形文化財（考古資料）亀形土製品などの縄文時代晩期の資料が出土した東北原遺跡（10）、弥生時代中期等の集落跡である馬込遺跡（12）・平林寺遺跡（1

第３図　丸ケ崎館跡の地形と調査地点

3）などがある。本遺跡の北側に位置する合ノ谷遺跡（3）では古代の石帯（巡方）が出土している。

本遺跡の範囲は東西300m、南北270mほどの範囲であり、中世から近世の館跡として周知されている。これは土地区画整理事業に伴う発掘調査によって堀の可能性のある溝をはじめとする中近世の遺構・遺物群の所在が把握されたことによる。また、丸ヶ崎館跡の範囲には重複して３つの埋蔵文化財包蔵地が所在している。このため、丸ヶ崎館跡としての発掘調査は今回の調査が第１次に当るが、遺跡範囲内では８次９地点において発掘調査が実施されている（第３図）。遺跡範囲内での調査では、中近世の遺構・遺物は偏在している。他に縄文時代早期前葉撚糸文系土器、早期後半条痕文系土器と炉穴群、縄文時代後期前葉の称名寺式から堀之内１式期の住居跡、フラスコ状土坑、弥生時代後期の住居跡等が検出さ

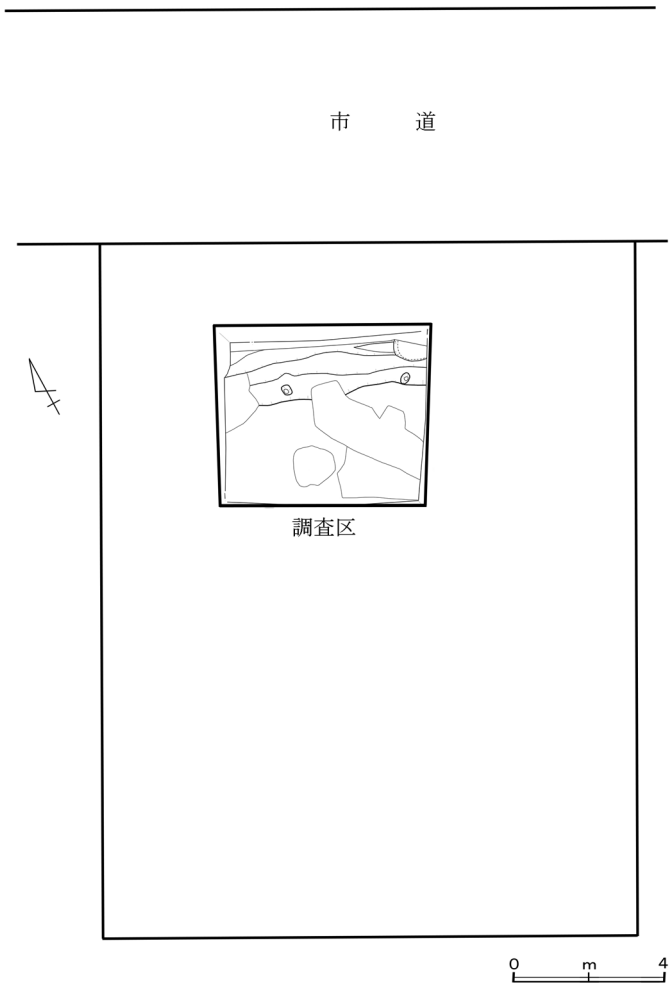
れている（第１表）。

第１表　丸ヶ崎館跡の範囲における発掘調査　　※「№」は第３図の地点番号

| № | 地点名 | 主要な遺構 | 報告書 |
|---|---|---|---|
| 1 | 丸ヶ崎遺跡第１トレンチ（学術調査） | 縄文時代：早期～後期遺物包含層？ | 大宮考古学研究会　1976 『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告』　大宮市文化財調査報告第10集抜刷 |
| 2 | 丸ヶ崎遺跡第２・第３トレンチ（学術調査） | 縄文時代：後期住居跡、土坑<br>時期不明：並行する溝 | 大宮考古学研究会　1976 『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告』　大宮市文化財調査報告第10集抜刷 |
| 3 | 丸ヶ崎遺跡　第１次 | 縄文時代：早期炉穴、中期末住居跡・土坑、近世：溝、ピット群 | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 4 | 丸ヶ崎遺跡　第２次 | 中世～近世：地下式坑、竪穴状遺構、井戸、土坑、土塁、溝（堀） | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 5 | 丸ヶ崎遺跡　第３次 | 縄文時代：後期土坑、中世～近世：土坑、溝（堀） | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 6 | Ａ－１５０号遺跡　第１次 | 中世～近世：台地縁部、溝 | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 7 | Ａ－１４９号遺跡　第１次 | 近世：溝状遺構 | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 8 | Ａ－１４９号遺跡　第２次 | 弥生時代：後期住居跡、近世：土坑、溝 | 大宮市遺蹟調査会　1995　『丸ヶ崎遺跡群Ⅰ』大宮市遺跡調査会報告書第50集 |
| 9 | 丸ヶ崎館跡第１次 | 中・近世：堀、井戸 | 本書 |

### 第２節　調査区の概要

今回の調査は住宅建設により埋蔵文化財の保存に影響が及ぶ範囲約25㎡を対象として調査を実施した。全体に攪乱が及んでおり、遺物包含層や盛土整地層は検出されなかった。調査区の北辺で中世の堀１条と井戸１基を検出した。遺物は、中世から近世の土器・陶磁器等が少量出土した。出土総量は、18リットル入り遺物収納箱１箱であった。



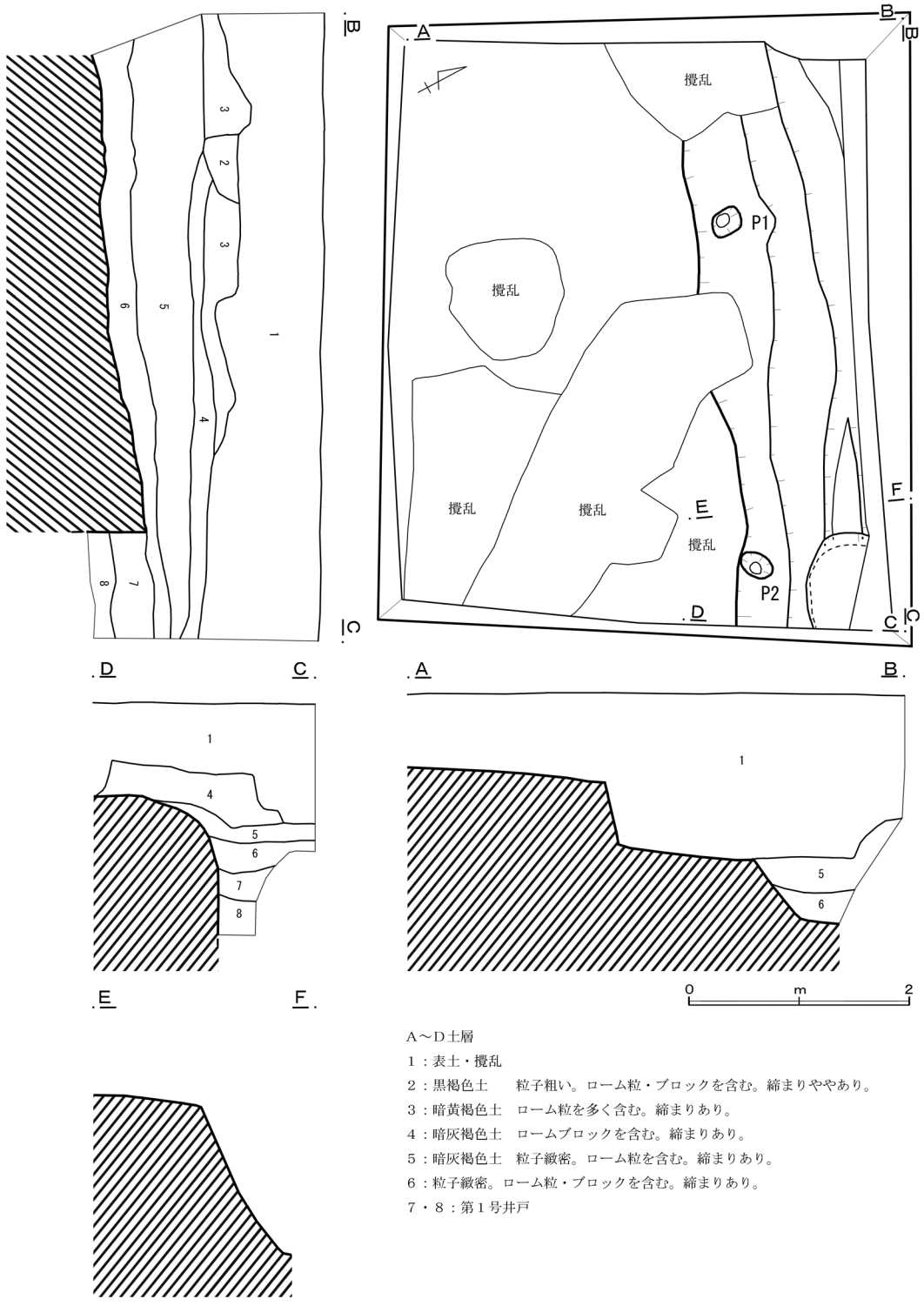

第４図　調査区の位置

## 第Ⅲ章　遺構と遺物

### 第１節　層　序

**調査区土層**（第５図）

調査区内は攪乱が全域に及び、遺物包含層や盛土整地層は残存していなかった。１層は表土層及び攪乱で、２層は第１号堀の埋没後の掘り込みに関わる層である。３～８層は遺構の覆土である。




A～D土層
1：表土・攪乱
2：黒褐色土　　粒子粗い。ローム粒・ブロックを含む。締まりややあり。
3：暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。締まりあり。
4：暗灰褐色土　ロームブロックを含む。締まりあり。
5：暗灰褐色土　粒子緻密。ローム粒を含む。締まりあり。
6：粒子緻密。ローム粒・ブロックを含む。締まりあり。
7・8：第１号井戸

第５図　検出遺構

## 第２節　遺構と遺物

### １　井戸

**第１号井戸**（第５図）

調査区北西隅で検出した。上位を第１号堀に掘削される。調査範囲では円筒状を呈し、最大径は95㎝を測る。調査は確認面から１m50㎝までに留めた。ピンポールの刺突による感触では更に90㎝下でも底

面には至らなかった。遺物は出土しなかった。

## ２　堀

**第１号堀**（第５図）

調査区北辺で検出した。検出長は５ｍ40㎝、調査範囲での最大上幅は１ｍ70㎝で、伸展方位はＮ－73.5°－Ｗである。調査範囲の大部分が南壁であり、底面は調査区西端で一部を検出した。断面形は逆台形を呈するものと思われる。確認面からの深さは１ｍ45㎝である。覆土は下層で緻密、上層で粗いことから、埋没が進んだ後、埋め戻されたと考えられる。壁面上位でピット２基を検出した。また東半部の壁面中位（確認面から90㎝前後下位の水準）に傾斜を緩める部分がある。遺物は主に上層から中世後期の遺物が少量出土した。第１号井戸よりも新しい。

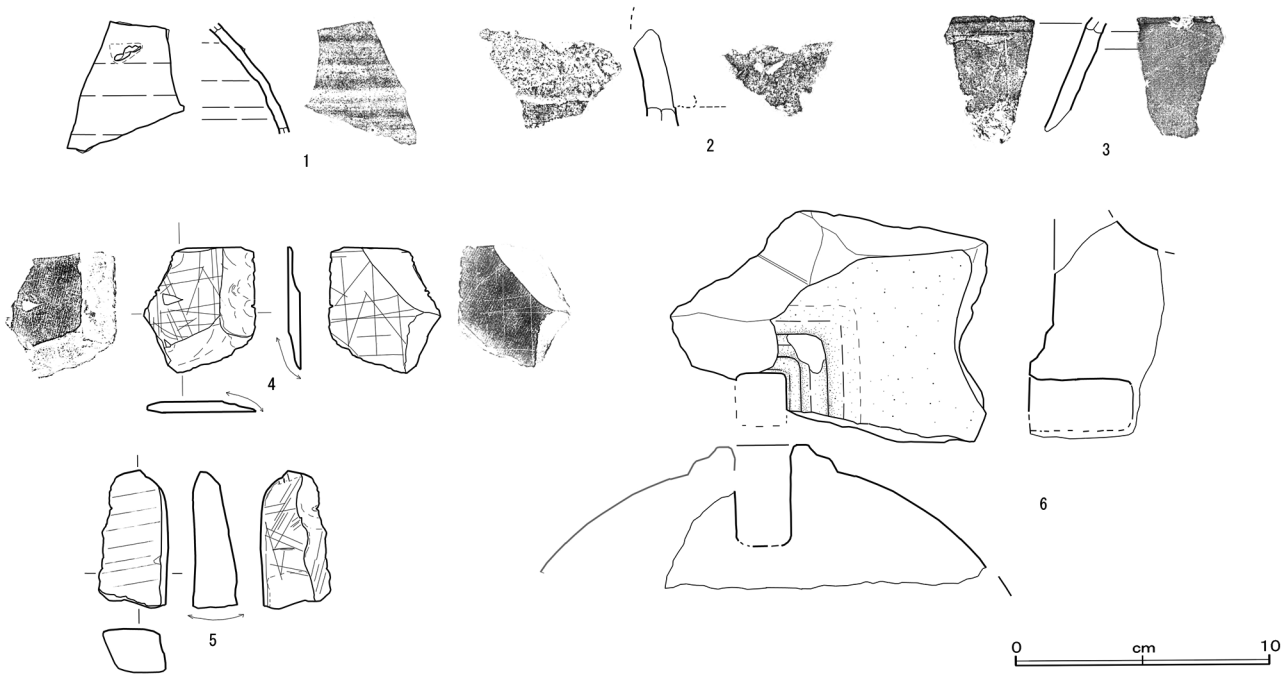
**壁面検出ピット**　　上端直下の壁面でピット２基を検出した。西側のＰ１は確認面からの深さ53㎝、東側のＰ２は確認面からの深さ63㎝である。両者の間の距離は芯々間で３ｍ18㎝を測る。

**第１号堀出土遺物**（第６図）

**陶器**（第６図１・２）　　１は瀬戸・美濃焼の壺の肩部破片である。外面に鉄釉が施され、内面は露胎である。第１号堀上層出土。２は常滑焼の甕口縁部附近の破片である。折り返され密着していた縁帯は剥落し、残存する頸部外面の剥落部分から 5㎜ほど下位に降灰が少量見られる。常滑11型式頃、16世紀前半頃に位置付けられよう。第１号堀上層出土。

**土器**（第６図３）　　３は瓦質土器の擂鉢である。体部上方の破片である。内面は使用により平滑となる。残存する範囲では摺目は見られない。外面の上方に狭い横ナデが施される。胎土は淡褐色を呈し、褐色粒、長石、光沢鉱物をそれぞれ微量含む。15～16世紀前半頃。第１号堀上層出土。

**石製品**（第６図４～６）　　４は硯の陸部破片である。破断後も研磨具として使用されており、表裏両面に縦横の条線が付き、破断面も研磨される。粘板岩製。第１号堀上層出土。５は砥石である。角柱状の器形の一端を欠損する。左半破断後も使用している。被熱する。凝灰岩製。第１号堀上層出土。６は茶臼である。上臼の破片である。推定直径23㎝。 2.2㎝角に復元される挽手孔が残り、二重の方格の段




第６図　出土遺物

がその周囲を装飾する。安山岩製。第１号堀中層出土。

## 第３節　まとめ

今回の調査で検出した第１号堀は、僅少ながらも主に覆土上層から出土した遺物の様相から、中世末から近世の間に埋没が進んだ遺構と考えられる。これと同時期に埋没が進んだとみられる遺構が、今回の調査地点の西側およそ50ｍに位置する丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査で検出された第２号溝である。丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査第２号溝（以下、「第２号溝」と表記する。）を東側に延長すると、今回調査の第１号堀の位置に概ね重なる。ここから、両遺構の間には、共時性とともに、一定の関連性も想定されるところである。以下では、今後の検討に備え、この点について若干の論点を整理しておく。

丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査第２号溝はわずかなクランク部分を伴いつつ南東方向に伸びる堀である。全長約49ｍが検出され、上幅は4.5～5.8ｍ、深さ２ｍと報告されている（大宮市遺跡調査会　1995）。南側に土塁を伴い、クランク部分からは南方へと伸びる第３号溝が分岐している。こうした配置状態から、第２号溝は土塁側を内側として囲繞もしくは区画していると考えられる。

第２号溝では、覆土中位から上位にかけて大量の遺物が出土し、その年代は15世紀末から18世紀に亘る。各時期とも完形品や大型破片が多いこと、その内例えばホウロクは16世紀から18世紀までの型式変化を辿れることなど、出土遺物の多くは流入・混入ではなく、埋没が進む過程で繰り返された一括廃棄品であることが推測される。中世末から近世へと連続した生活域が想定される。また、第２号溝とこれに伴う土塁が区画する内側は、第２号溝の外側よりも２ｍ近く低くなっている。そこでは平坦面が削平・造出され、そこに土坑・井戸・溝等の遺構群が集中して検出された。

丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査地点の立地は、台地の南半部に当り、その南縁部に沿って埼玉県道322号東門前蓮田線が位置しているが、この附近でのこの道路は江戸時代から続く道と考えられる（大宮市史編さん委員会　1973）。また、附近は区画整理事業の進展によって旧来の景観や土地区画が大きく変容しているものの、区画整理施行以前の航空写真等（例えば、第１表所掲　大宮市遺跡調査会　1995　図版１など）と対照すると、本遺跡が立地する舌状台地上の集落は、台地南側に並ぶ屋敷群と台地北縁に並ぶ屋敷群とから構成されていたこと、そして前者の屋敷群は現在の埼玉県道322号東門前蓮田線に対して間口を開き、後者の屋敷群は市道11806号線に対して間口を開く屋敷構えを基本としていたことが、それぞれ読み取れる。近世に遡る可能性の高いこうした集落形態を踏まえると、丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査は、前者の屋敷群の内部の様相を垣間見せていることになる。即ち、台地縁辺部を段切造成し、台地を背に低地に面して間口を開いた屋敷のあり方を窺わせるのである。

こうしてみると、丸ヶ崎遺跡第２次・第３次調査の第２号溝は、こうした屋敷地の台地側の区画施設と考えることができる。先に述べた様に、今回の調査で検出した第１号堀は第２号溝と一定の関連性が想定される。第１号堀についても、現在、台地上に想定されている館跡の縄張と直結して理解する以前に、台地縁辺部において低地側に間口を開いた屋敷群の区画施設である可能性を考慮する必要がある。

参考文献（第１表所掲以外）

大宮市史編さん委員会　1973　『大宮市史』第三巻下　大宮市役所

# 第２部
# 新曲輪遺跡（第２地点）

## 第Ⅰ章　調査の契機と経過

### 第１節　調査の契機

平成22年４月、さいたま市岩槻区城町１丁目における個人専用住宅の建設にあたり埋蔵文化財の所在について、工事主体者よりさいたま市教育委員会に照会があった。建設予定地は新曲輪遺跡の範囲内にあたるため埋蔵文化財発掘の届出がさいたま市教育委員会教育長宛に提出された。これを受け、平成22年５月６日に確認調査を行ったところ、縄文時代の包含層、縄文土器などの遺構・遺物を検出した。現状での保存について協議を行ったが、予定される工事では、発見された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため、さいたま市教育委員会が工事に先立って、記録保存のための発掘調査を、平成22年５月26日から７月２日まで行った。

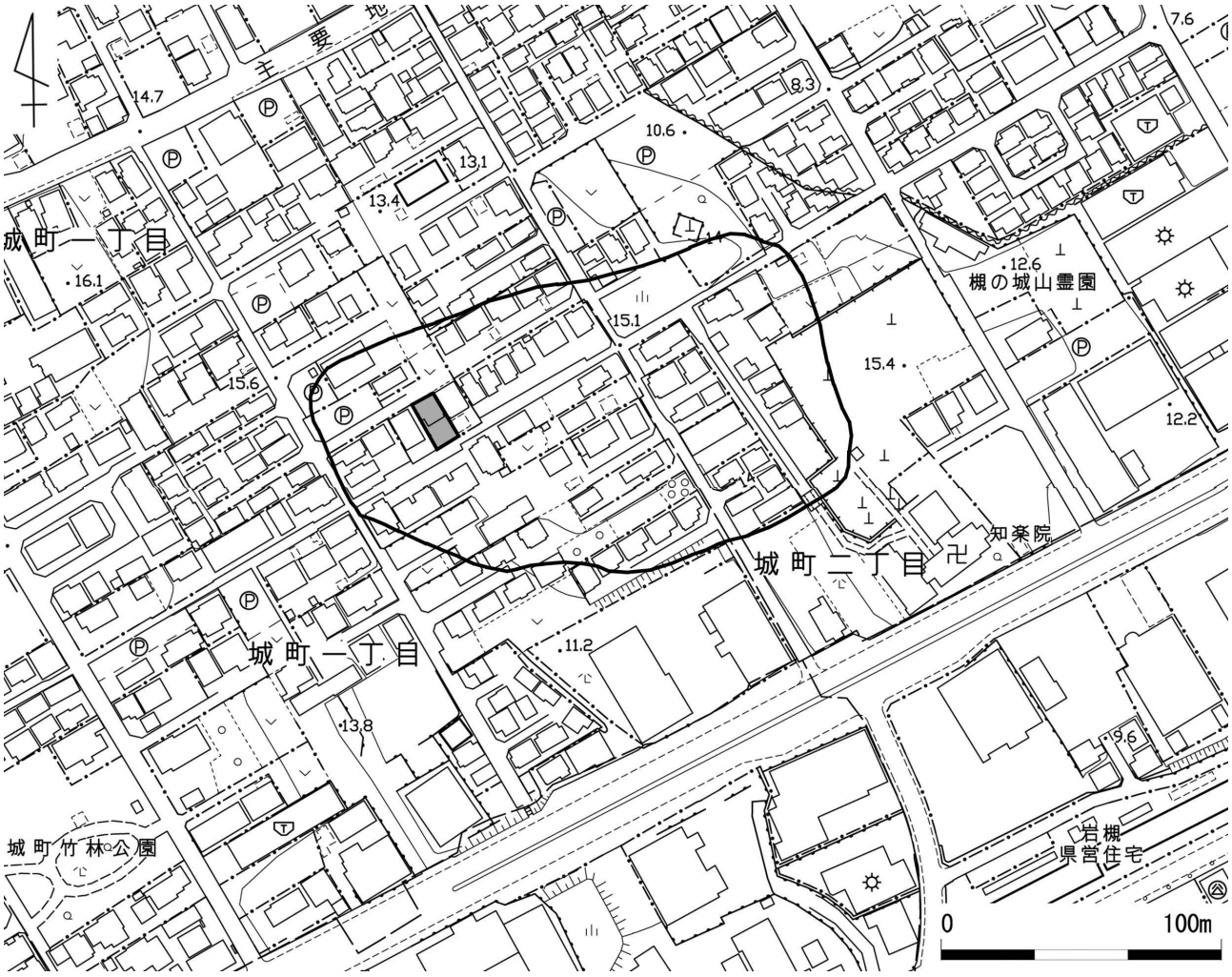
**1:新曲輪遺跡**　2:岩槻城跡　3:岩槻城跡（新曲輪・鍛冶曲輪跡）　4:真福寺貝塚　5:柏崎貝塚　6:木曽良貝塚
7:府内三丁目南遺跡　8:府内三丁目遺跡　9:加倉中島遺跡　10:加倉洞雲寺境内遺跡　11:加倉遺跡

第７図　遺跡の位置

## 第２節　調査の方法と経過

### １　方法

今回の調査は個人専用住宅建築に伴うもので、住宅建設部分を対象として発掘調査を実施した。排土処理の都合上、調査区を南北に２分し、北側を１区、南側を２区とした。１区より調査を開始し、１区調査終了後重機により反転作業を行い、２区の調査を実施した。調査は縄文時代の遺物包含層上面で遺構確認を行った後、遺構調査を実施した。その後縄文時代の遺物包含層を掘削し、ローム層上面を遺構確認面として調査を実施した。

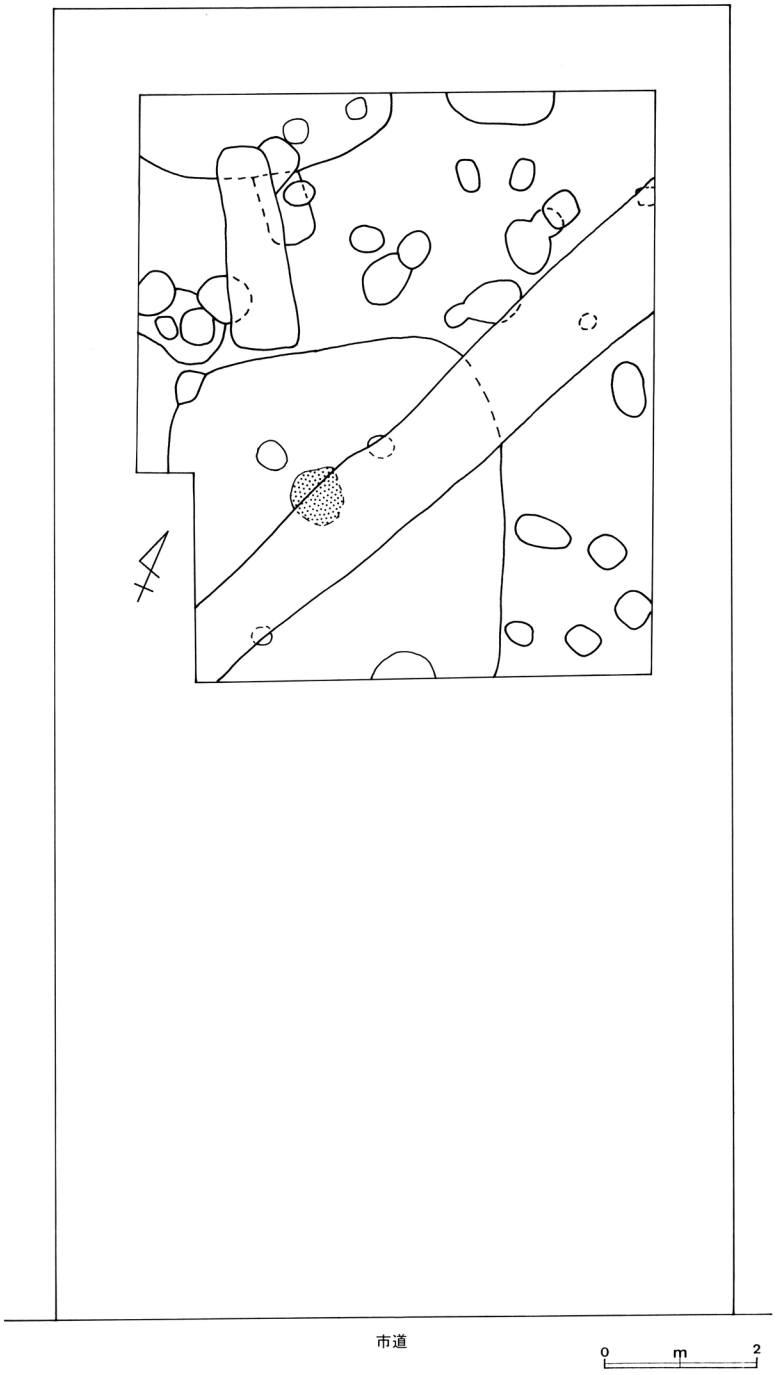



第８図　発掘調査の位置

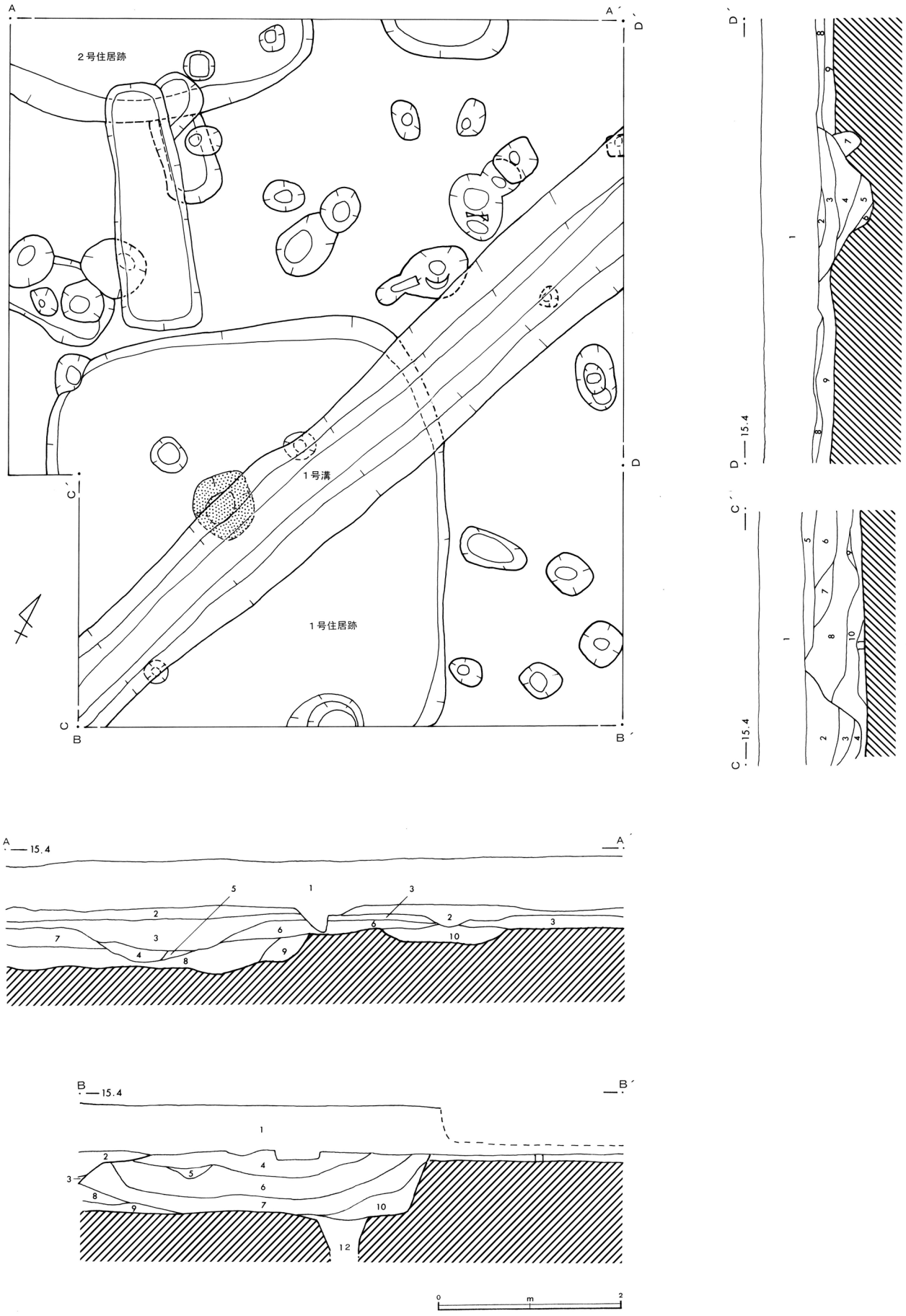
### ２　経過

発掘調査は平成22年５月26日から平成22年７月２日まで実施した。５月26日、１区とした北半部で重機により表土除去を実施した。５月27日、縄文時代の遺物包含層上面で遺構精査を行い１区調査区の中央西で土坑、東半で溝状の遺構を検出し、引き続き覆土の掘削を開始した。５月31日、溝・土坑の調査を継続した。溝は覆土上層で焼土の集中箇所が確認された。６月１日、溝・土坑の調査を継続した。１区の南半で検出された第１号住居跡の調査を開始した。第１号住居跡は南北の土層観察用のベルトを設定し、ベルトの西側の区画より覆土の掘削を行った。６月２日、住居跡・溝・土坑の調査を継続した。溝は覆土中で検出された焼土範囲の記録作業を行った。６月３日、溝は土層観察用のベルトを残し完掘

した。住居跡は西半の覆土掘削を継続した。出土遺物は縄文時代中期の土器破片が主体であった。６月４日、溝はベルトで土層観察を行った後土層図作成、写真撮影を行い、ベルトの掘削を行った。住居跡は引き続き西半の覆土掘削を行った。６月７日、溝を完掘する。溝の底面付近で台付甕の器台が出土したが、これは溝に切られた第１号住居跡の遺物と判断された。溝は完掘し記録作業を行った後、住居跡東半の覆土の除去を開始した。住居跡西半は、ほぼ床面付近まで掘削した。床面付近では覆土上層では出土しなかった弥生土器破片が出土した。６月８日、第１号住居跡の調査を継続した。主に東半の覆土の掘削を行った。６月９日、第１号住居跡全体がほぼ床面付近まで掘り下がる。床面付近で炭化材がまとまって出土した。住居内で南北方向の土層図作成、写真撮影を行った。６月10日、床面上で出土した炭化材・遺物の写真撮影を行った。並行して調査区北側より縄文時代の遺物包含層の掘削を開始した。６月11日、第１号住居跡出土の炭化材・遺物の図化・写真撮影、遺物の取り上げ作業を行った。並行して包含層の掘削を行った。６月15日、包含層の掘削を継続し、調査区北半でローム層上面を検出した。ローム層上面で遺構精査を行ったところ、住居跡、土坑状のプランが確認された。６月16日、包含層の掘削と、調査区北側で検出された第２号住居跡の覆土の掘削を行った。６月17日、第２号住居跡、土坑・ピットの調査を継続した。６月18日、第２号住居跡の土層図を作成し、ベルトを外し完掘した。並行して土坑・ピットの調査を行った。６月21日、ローム層上面で検出された遺構の調査を終了する。遺構の平板測量、調査区の土層図、写真撮影を行い１区の調査を終了した。６月22日、重機により１区の埋め戻し、２区の表土剥ぎを行った後、遺構精査を行った。第１号住居跡と第１号溝の延長部分を確認した。６月24日、第１号溝の調査を行い、１区で検出された焼土が覆土上層で同様に確認




第９図　調査区の位置




第10図　全測図及び全土層図

A－A´
1　表土
2　黒色土　焼土粒含む。締りあり。
3　暗茶褐色土　焼土粒含む。締りあり。
4　暗茶褐色土　焼土粒・焼土粒子多く含む。締り強い。
5　暗茶褐色土　４と似る。４より焼土粒子少ない。締り強い。
6　暗茶褐色土　３と似る。３より明るい。締り強い。
7　暗茶褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒子少し含む。締り強い。
8　暗茶褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒少し含む。締り強い。
9　暗黄褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒少し含む。締り強い。
10　暗茶褐色土　焼土粒子少し含む。締り強い。

B－B´
1　表土
2　黒色土　焼土粒、焼土粒子少し含む。締りあり。
3　黒色土　焼土粒、焼土粒子多く含む。締りあり。
4　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。
5　暗茶褐色土　ローム粒多い。焼土粒子混入。締り強い。
6　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締り強い。
7　暗茶褐色土　焼土粒、焼土粒子含む。締り強い。
8　暗茶褐色土　焼土粒、焼土粒子多く含む。締り強い。
9　暗黄褐色土　焼土粒多く含む。締り強い。
10　暗茶褐色土　やや粗い粒子。焼土粒多く含む。締りややあり。
11　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。

C－C´
1　表土
2　黒色土　焼土粒、焼土粒子少し含む。締りあり。
3　黒色土　焼土粒、焼土粒子多く含む。締りあり。
4　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。
5　黒色土　焼土粒子少し含む。締りあり。
6　暗茶褐色土　焼土粒・焼土粒子少し含む。締り強い。
7　暗茶褐色土　焼土粒多い。カーボン粒少し含む。締り強い。
8　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締り強い。
9　暗黄褐色土　カーボン主体。締りあり。
10　暗茶褐色土　９と似る。９より暗い。締り強い。

D－D´
1　表土
2　黒色土　焼土粒・ローム粒含む。締りややあり。
3　黒色土　１と似る。１より焼土粒少ない。締りややあり。
4　黒褐色土　ローム粒少し含む。締りややあり。
5　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多く含む。締りややあり。
6　黒色土　ローム粒多く含む。締りややあり。
7　黒褐色土　焼土粒・ローム粒含む。締りあり。
8　黒色土　焼土粒含む。締りあり。
9　暗茶褐色土　焼土粒含む。締りあり。

された。６月25日、第１号溝を完掘し記録作業を行った。６月28日、第１号住居跡の調査を開始した。南北方向に土層観察用のベルトを設定し覆土の除去を行った。６月29日、第１号住居跡の調査を継続する。住居跡西壁際でほぼ完形の壺、台付甕が並んだ状態で出土した。６月30日、第１号住居跡で床面を確認した。遺物の測量、写真撮影を行った後、取り上げた。７月１日、第１号住居跡床面上で検出されたピットの調査を行った。その後、包含層の掘り下げを行い、ローム層上面を検出した。７月２日、ローム層上面で検出された、土坑・ピットを完掘した。記録作業後、重機による埋め戻しを行い現地での作業を終了した。

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

新曲輪遺跡はさいたま市の東部、東武野田線岩槻駅から東約1.5㎞の岩槻区城町一丁目地内に所在する。現在周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約190ｍ、南北約120ｍである。

遺跡は大宮台地の東縁部にあたる岩槻支台上に占地している。岩槻支台は南流する綾瀬川により、大宮台地主台との間を区切られ、北西から東側を流れる元荒川によって慈恩寺支台との間を区切られている。台地上は概ね西から東への緩やかな傾斜を帯び、さらに沖積地から伸びる開析谷が樹枝状に発達している。遺跡はこの台地のほぼ中央部東側に位置し、北側及び南側には支谷が入り込み、舌状台地となっている。遺跡の占地部分は東側へは全体的に緩やかに傾斜し、北側と南側の小支谷に対しては急傾斜している。

本遺跡では、昭和38年８月に土取り工事に伴う記録保存のため、県立浦和第一女子高等学校郷土研究部を主体とした発掘調査が実施されている。縄文時代中期加曽利Ｅ式期の住居跡２軒が調査され、そのうちの１軒の炉跡は地床炉と埋甕炉が併設されていた。縄文時代中期中葉の勝坂式から後葉の加曽利Ｅ

式期の深鉢形土器、浅鉢形土器、打製石斧、石匙などが出土している。

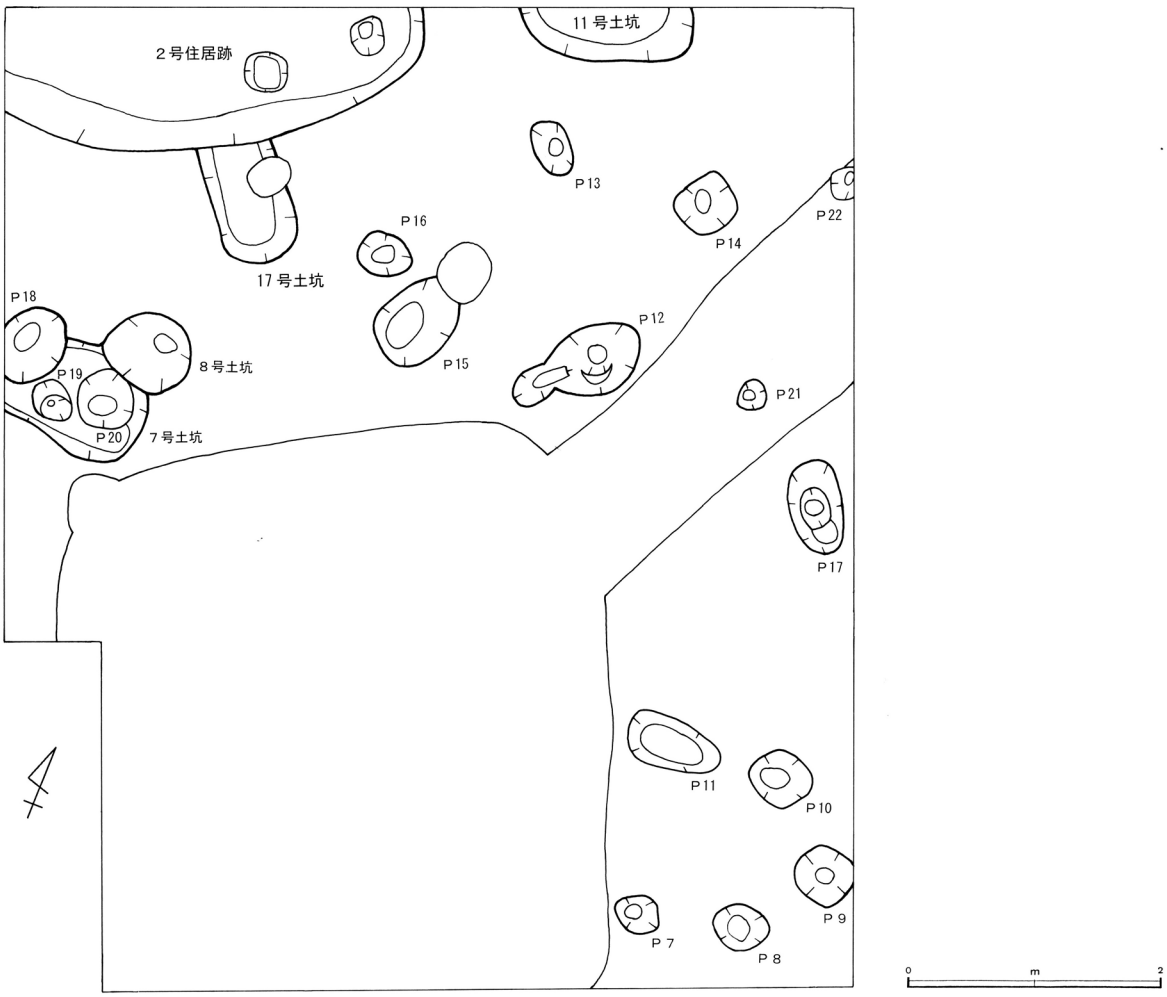
## 第２節　調査区の概要

今回の調査範囲は、住宅建設範囲の約70㎡である。縄文時代の遺物包含層上面を確認面として、弥生時代から中世の遺構調査を実施した後、包含層を掘り下げ包含層下で確認されたローム層上面で縄文時代の遺構調査を行った。包含層上面では中世の溝・土坑、弥生時代終末期の住居跡が検出された。ローム層上面では縄文時代の住居跡、土坑、ピットが検出された。

遺物は縄文時代中期を主体とした縄文土器、弥生時代終末期の完形の壺・台付甕などの土器が180入り平箱11箱分出土した。

# 第Ⅲ章　遺構と遺物

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

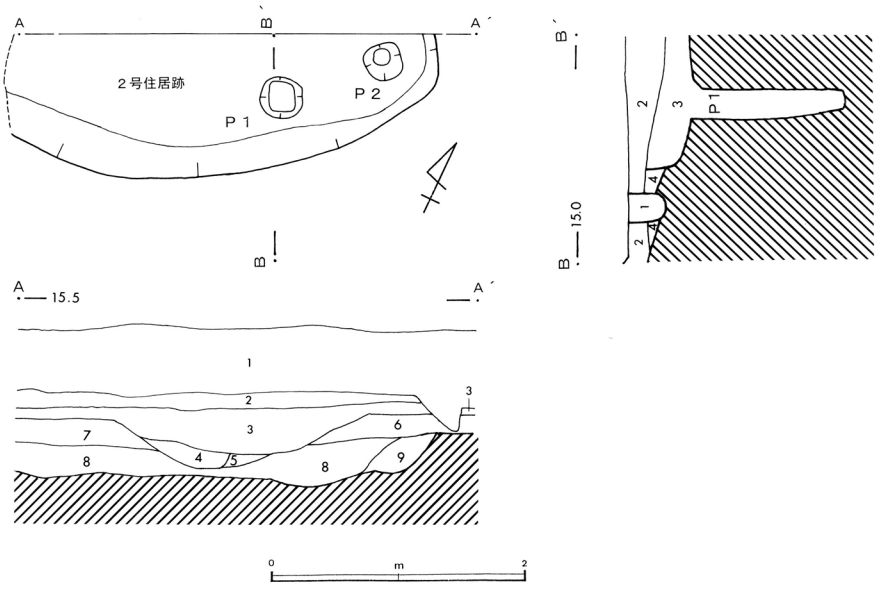



第11図　縄文時代の遺構

新曲輪遺跡

### １　第２号住居跡（第12図）

調査区北西隅で検出された。北側と西側は調査区外に延びる。平面形は隅丸方形もしくは楕円形を呈するものと思われる。検出範囲での長軸は3m31cm、短軸は66cmである。確認面から床面の深さは23cmである。壁は緩やかに立ち上がる。床面の硬化は確認されなかった。今回の調査範囲では炉跡は検出されなかった。




A－A´
１　表土
２　黒色土　焼土粒含む。締りあり。
３　暗茶褐色土　焼土粒含む。締りあり。
４　暗茶褐色土　焼土粒・焼土粒子多く含む。締り強い。
５　暗茶褐色土　４と似る。４より焼土粒子少ない。締り強い。
６　暗茶褐色土　３と似る。３より明るい。締り強い。
７　暗茶褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒子少し含む。締り強い。
８　暗茶褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒少し含む。締り強い。
９　暗黄褐色土　緻密・均質な粒子。焼土粒少し含む。締り強い。
B－B´
１　黒褐色土　焼土粒・ローム粒子少し含む。締りあり。
２　暗茶褐色土　焼土粒子・ローム粒子含む。締りあり。
３　暗茶褐色土　焼土粒・カーボン粒多く含む。締り強い。
４　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。

第12図　第２号住居跡

### ２　第２号住居跡出土遺物（第13図）

１は深鉢形土器の胴部破片である。口縁部は隆帯で区画され無文、胴部は楕円形の隆帯で区画され、横方向に押引文と波状文が描かれる。胎土に雲母を含む。２～７は深鉢形土器の口縁部破片である。２は口縁部に隆帯で渦巻き状の文様を描く。３は無文である。４は無文の口縁部に隆起線が巡り、胴部は沈線で文様を描く。５は口縁部に２本の沈線が巡り、胴部は縄文が施文される。６は楕円形の区画内に縦方向の沈線が引かれる。７は無文である。８は把手の破片で刻みが見られる。９は浅鉢形土器の胴部破片で内面に赤彩痕が残る。10は土器片錘である。両端に糸かけのための刻み目が付く。11は黒曜石の尖頭器の一部と思われる。最大長34㎜、幅18㎜、厚６㎜、重量4.2ｇ。１は阿玉台式、２～８は加曽利Ｅ式と思われる。

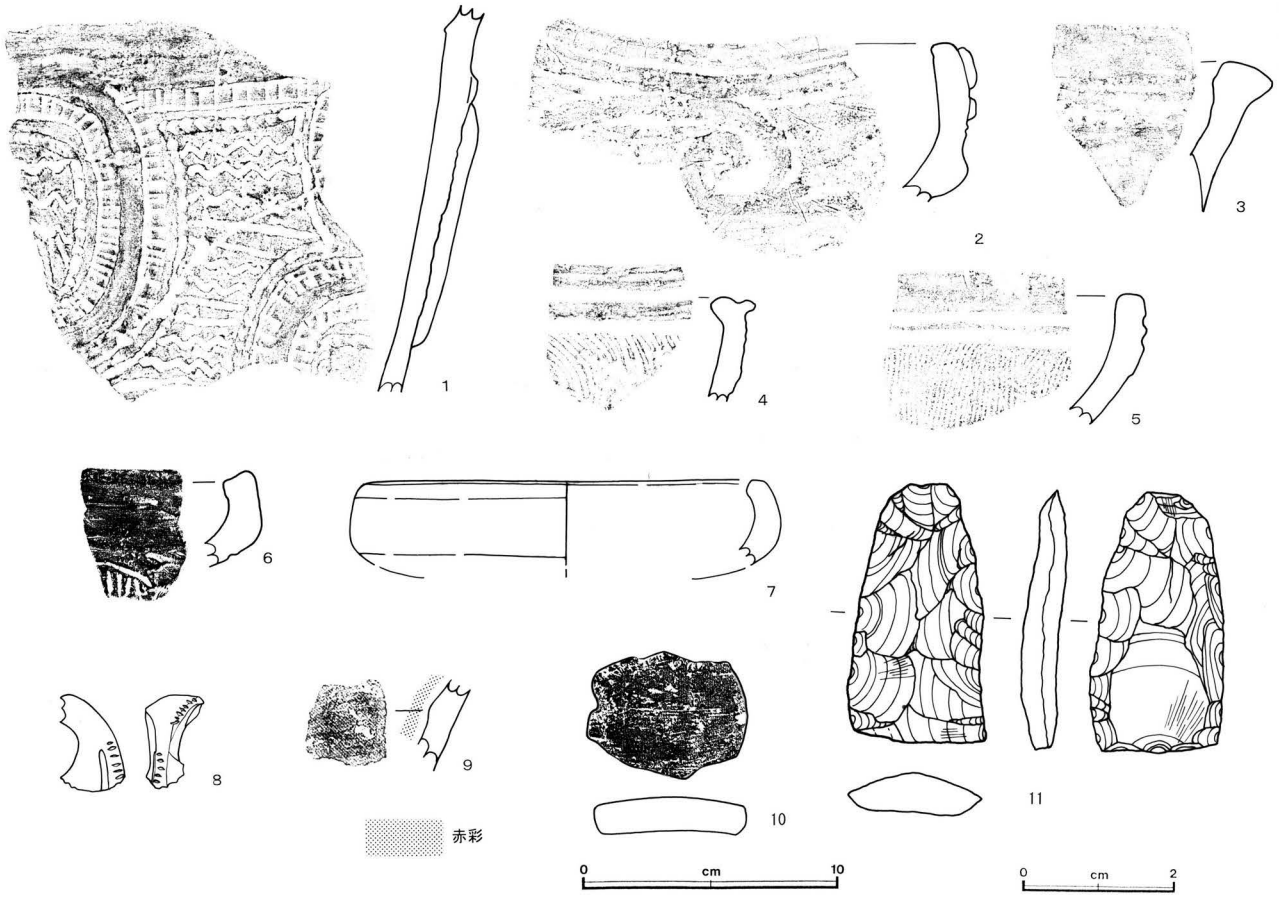
### ３　土坑（第14図）

#### 第７号土坑

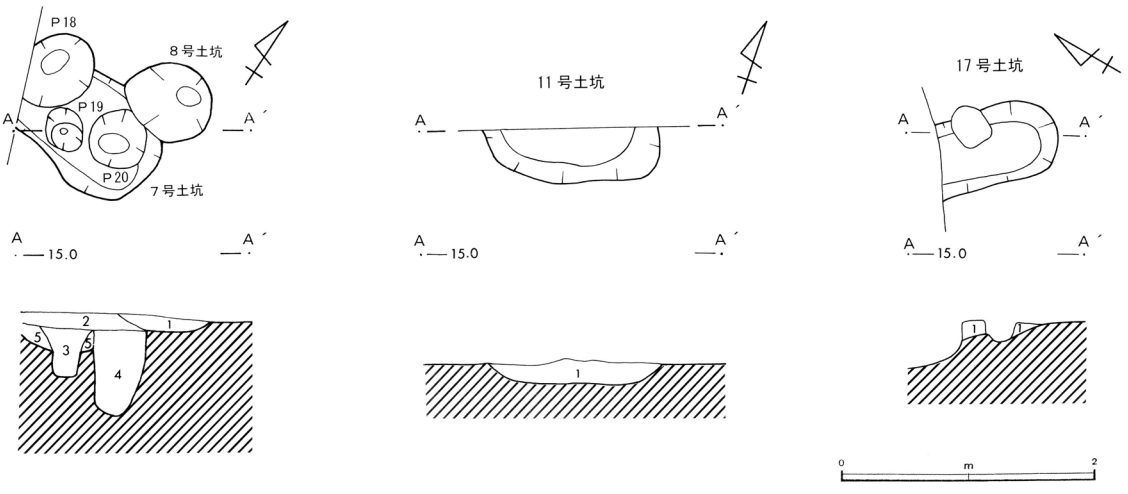
調査区中央西寄りで検出された。平面形は長方形を呈する。西側は調査区外に延びる。検出範囲での長軸は1m23cm、短軸は82cmである。確認面からの深さは14cmである。第８号土坑に切られる。３本のピットと重複する。ピットが土坑に伴うものかは不明である。

#### 第８号土坑

第７号土坑の東側で重複し検出された。第７号土坑を切る。平面形は楕円形である。長径71cm、短径62cmである。確認面からの深さは11cmである。




第13図　第２号住居跡出土遺物




7・8号土坑
A－A´
1　暗茶褐色土　焼土粒含む。締りあり。（土坑８）
2　暗茶褐色土　焼土粒子・ローム粒子含む。締りあり。
3　暗茶褐色土　緻密な粒子。焼土粒子多く含む。締りあり。
4　暗茶褐色土　緻密な粒子。焼土粒子含む。締りあり。
5　暗茶褐色土　２と似る。２より明るい。

11号土坑
A－A´
1　暗茶褐色土　焼土粒子少し含む。締り強い。

17号土坑
A－A´
1　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。

第14図　土坑

新曲輪遺跡

**第11号土坑**

調査区北端で検出された。平面形は隅丸方形を呈する。北半は調査区外に残る。検出範囲での長軸は1m39cm、短軸は45cmである。確認面からの深さは19cmである。

**第17号土坑**

調査区の北西で検出された。第２号住居跡に切られる。平面形は楕円形を呈する。現状での長径は99cm、短径は51cmである。確認面からの深さは13cmである。

## ４　土坑出土遺物（第15図）

第15図１～３は第７号土坑出土遺物である。１は深鉢形土器口縁部破片である。口縁部は良く磨かれ無文である。胴部は斜位に刻みのある隆帯が付き、縦方向の押引文の間に円形の文様が見られる。２・３は黒曜石の石鏃である。２は最大長20mm、最大幅15mm、最大厚４mm、重量0.８ｇ。３は最大長22mm、最大幅16mm、厚さ４mm、重量1.１ｇ。第15図４は第８号土坑出土の深鉢形土器口縁部破片である。口縁部は「く」の字に屈曲し無文、胴部に太い沈線で文様が描かれる。

## ５　ピット（第11図）

ピットはローム層上面で16基が検出された。ピット列、建物跡の復元には至らなかった。

第２表　ピット観察表　　単位　cm　() 内は現状での数値　深さは確認面よりの深さ

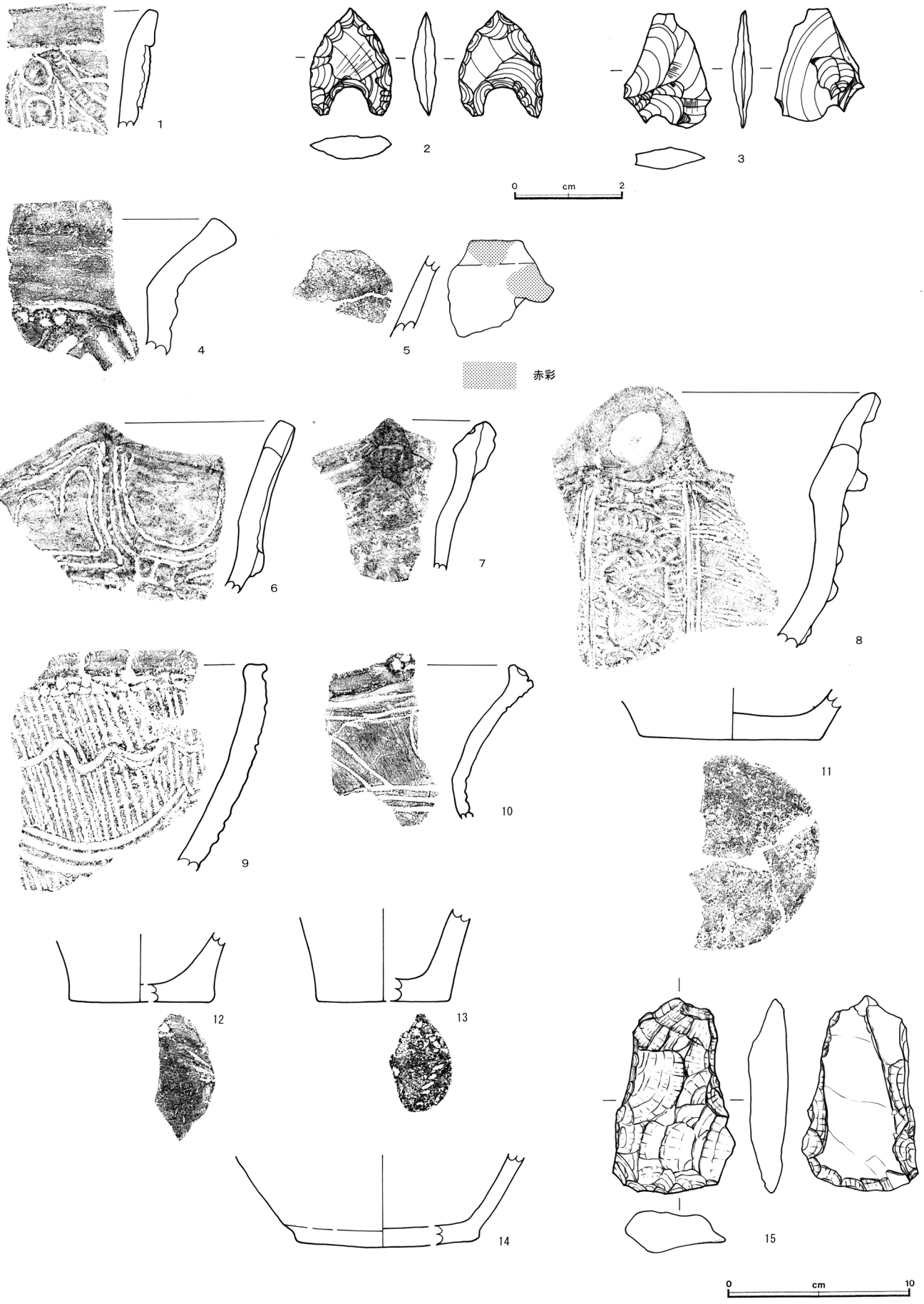
| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 32 | 31 | 25.0 | 13 | 45 | 28 | 25.5 | 19 | 33 | 29 | 30.9 |
| 8 | 38 | 34 | 23.1 | 14 | 46 | 44 | 20.0 | 20 | 47 | 43 | 78.5 |
| 9 | 49 | (47) | 38.6 | 15 | 69 | 53 | 15.1 | 21 | 23 | 21 | 39.6 |
| 10 | 48 | 43 | 25.5 | 16 | 43 | 34 | 105.2 | 22 | 25 | (17) | 35.1 |
| 11 | 77 | 41 | 17.6 | 17 | 73 | 42 | 30.0 | | | | |
| 12 | 109 | 54 | 53.4 | 18 | 66 | 51 | 98.5 | | | | |

## ６　ピット出土遺物（第15図）

第15図５は第16号ピット出土の浅鉢形土器の胴部破片である。内面の一部に赤彩痕が残る。

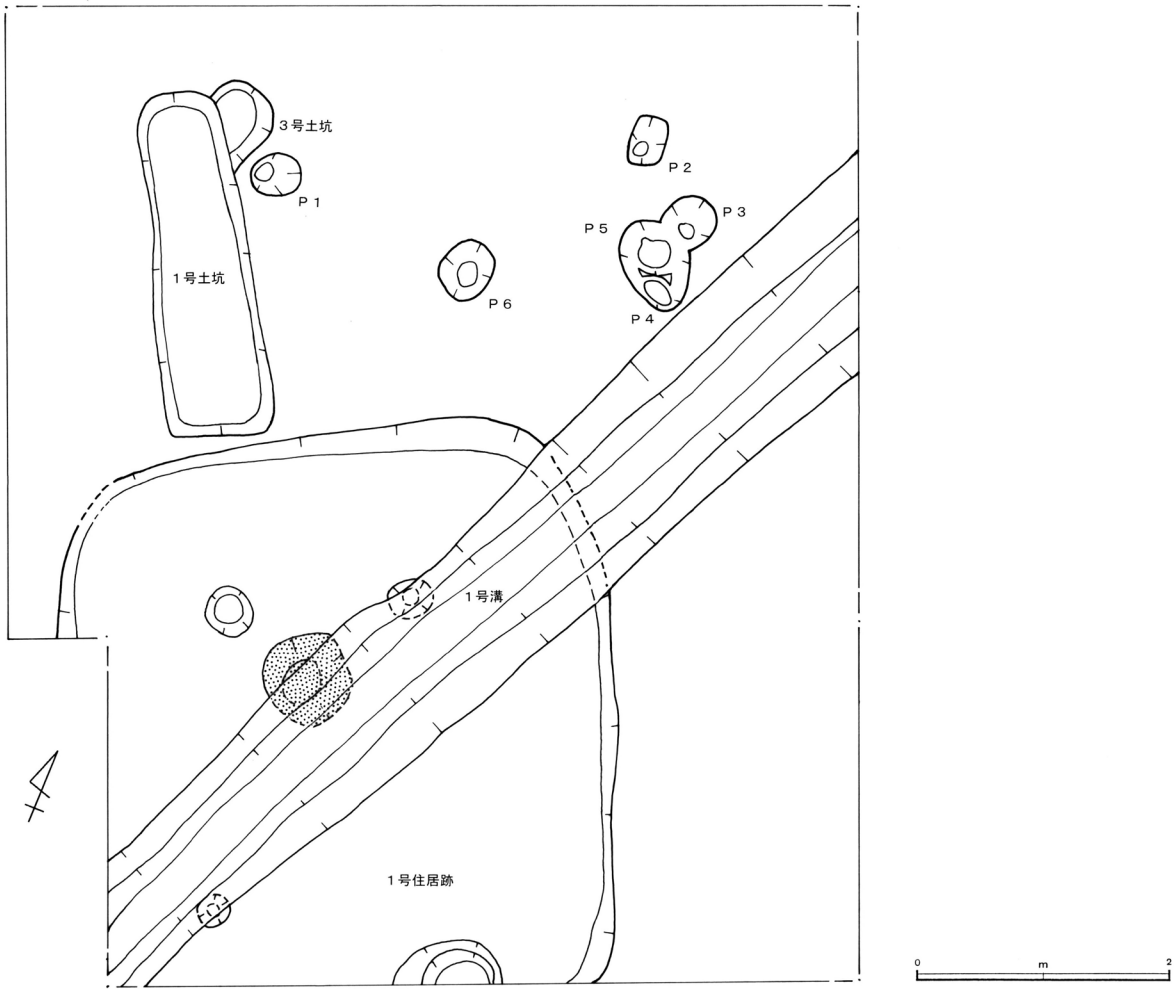
## ７　包含層出土遺物（第15図）

第15図６～15は包含層出土遺物である。６～10は深鉢形土器の口縁部破片である。６は波状口縁で、横走する隆帯が口縁部と胴部を区画し、さらに波頂部から隆帯が垂下する。７は波状口縁で波頂部外面に突起が付く。無文である。６・７ともに胎土に雲母を含む。８は口縁部に隆帯による円形の区画が見られ、刻みのある縦方向の隆帯で区画し、区画内に隆帯で文様を描く。９は無文の口縁を平行沈線によって胴部と区画する。沈線上には細竹管による刺突が施される。胴部には縄文を施文した後、波状の沈線と連弧文が描かれる。10は口唇部に刺突、口縁と胴部中位に横方向の沈線が巡り、横位の沈線間に斜位の沈線が引かれる。11～14は深鉢形土器の底部破片である。15は打製石斧である。６・７は阿玉台式、８は勝坂式、９は加曽利Ｅ式、10は堀之内式と思われる。




第15図　土坑・ピット・包含層出土遺物

## 第２節　弥生時代以降の遺構と遺物



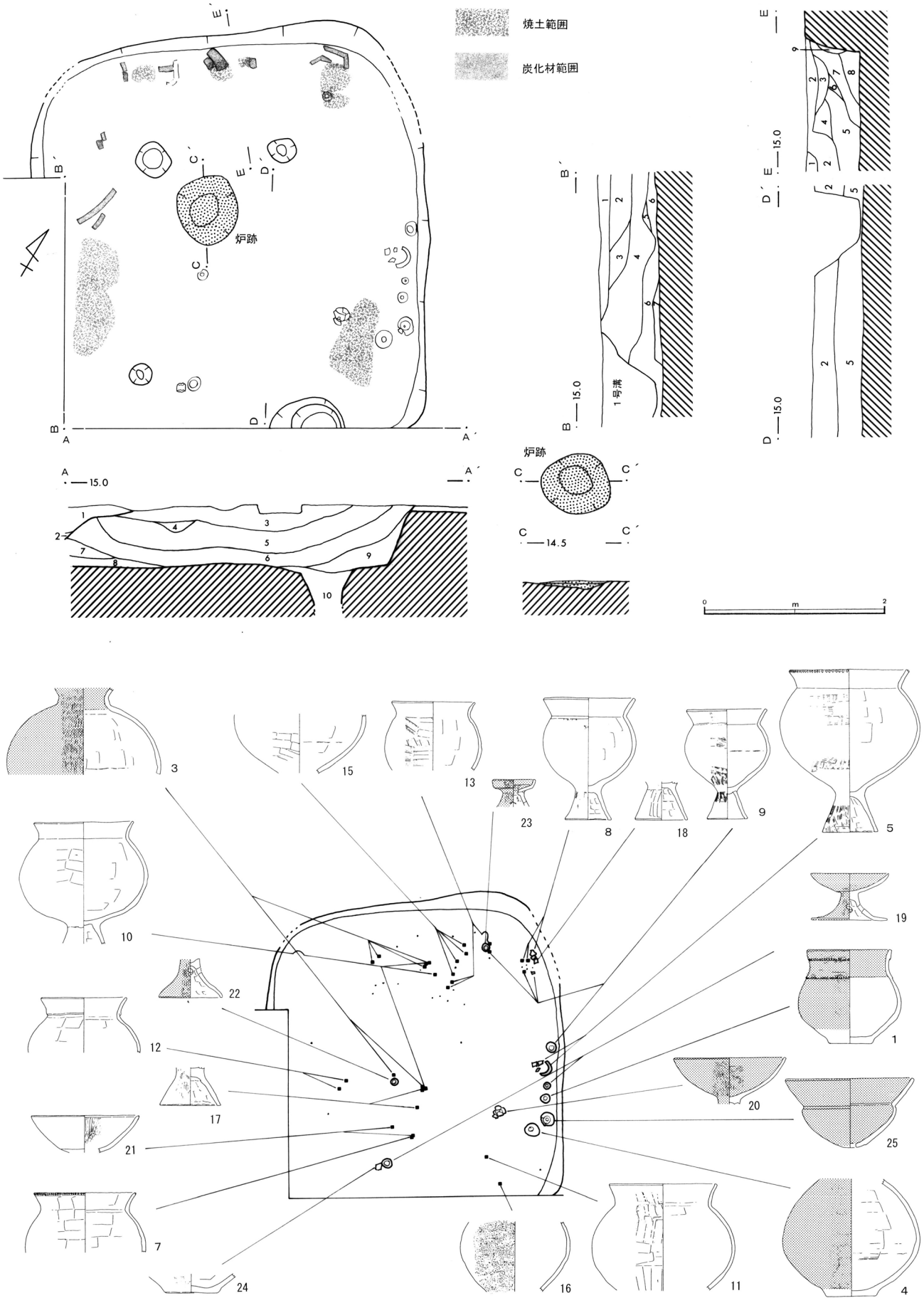

第16図　弥生時代以降の遺構

### １　第１号住居跡（第17図）

調査区南半、縄文時代の遺物包含層上面で検出された。南側と西側で壁際の一部が調査区外に残る。平面形は隅丸方形である。検出範囲での長軸は4m53cm、短軸は4m39cm、確認面からの深さは67cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。床面は土間状に良く締まる。炉跡は住居跡中央のやや北寄りで検出された。床面からの深さは10cmほどで、覆土中には焼土ブロックが多く混入し、壁面は良く焼けていた。南東の壁際で貯蔵穴と思われる土坑が検出された。南側は調査区外に残る。ピットは３本検出された。主柱穴と考えられるが、住居南東ではピットが検出されなかった。床面直上の壁に近い位置で炭化材と厚い焼土の堆積が確認された。また東側の壁際では甕・甑が並んで伏せられた状態で出土した。住居跡は焼失した後、廃棄された住居であると思われる。この住居跡は出土遺物より、弥生時代終末期の遺構であると思われる。

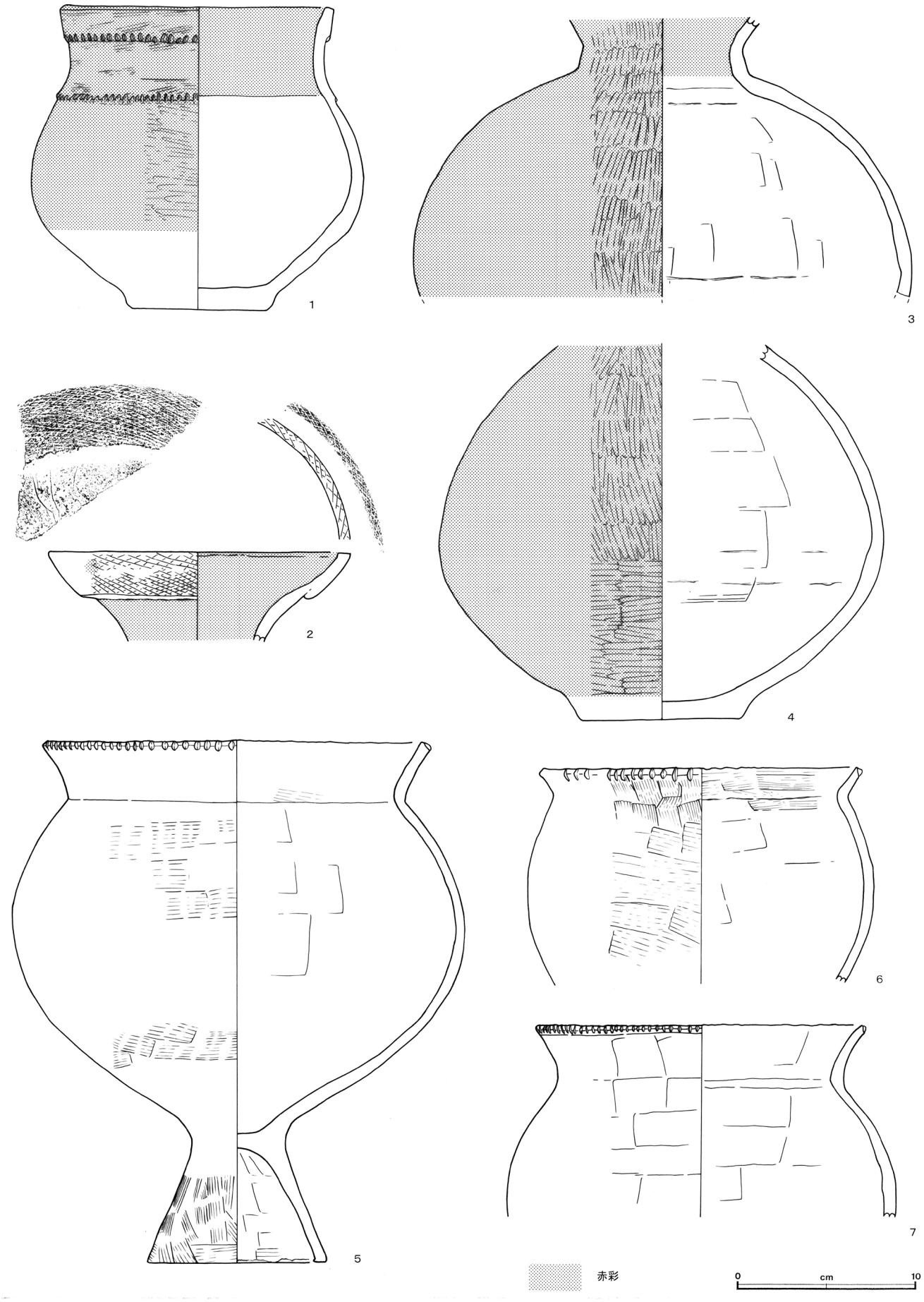
### ２　第１号住居跡出土遺物（第17図）

１～25は弥生時代終末期の土器である。１は完形の無頸壺である。口径14.7cm、底径８cm、高さ17cmである。外面上部2/3はハケの上を横ミガキで赤彩される。下部1/3はナデ整形される。口縁内面は横ミ

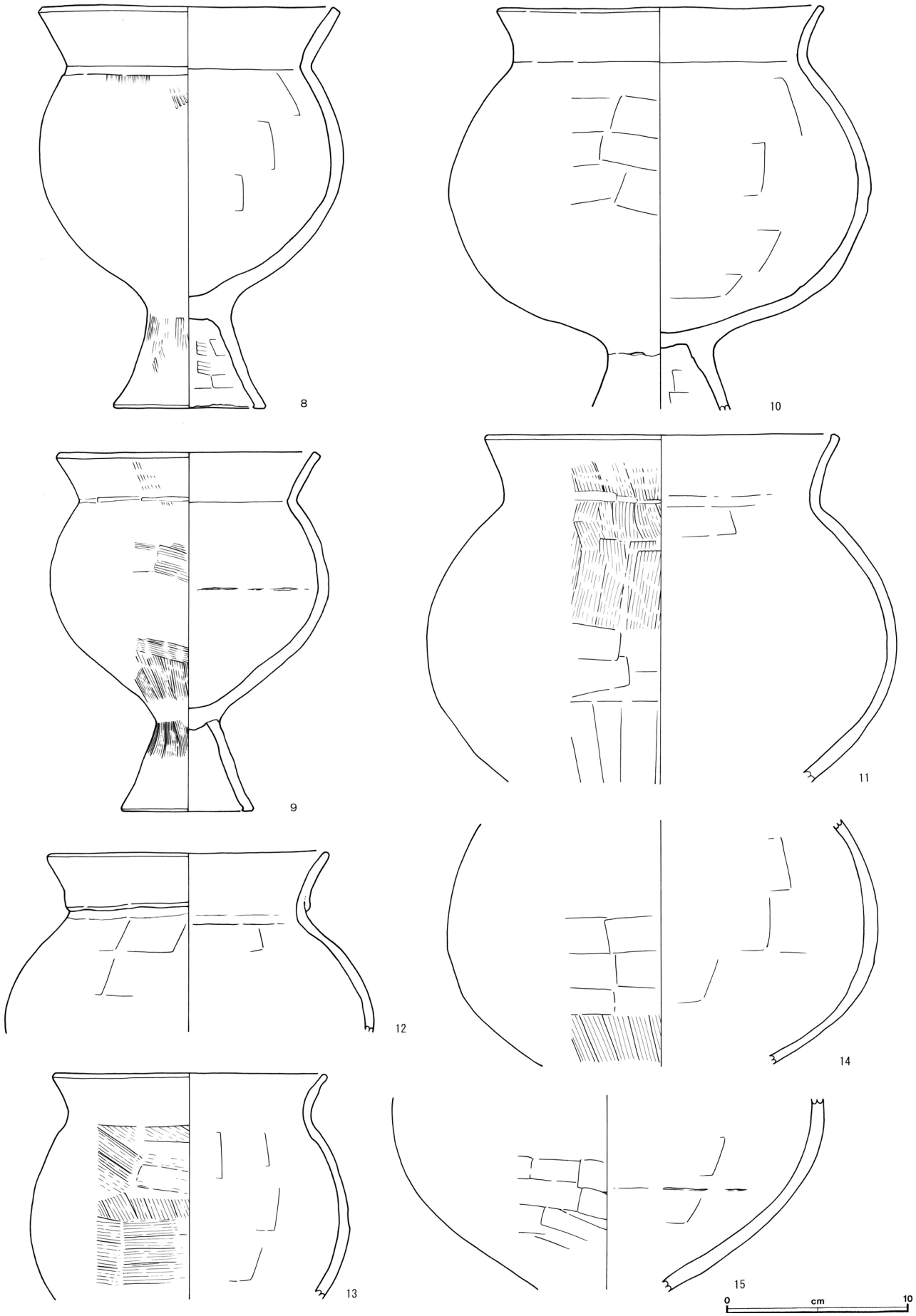



第17図　第１号住居跡

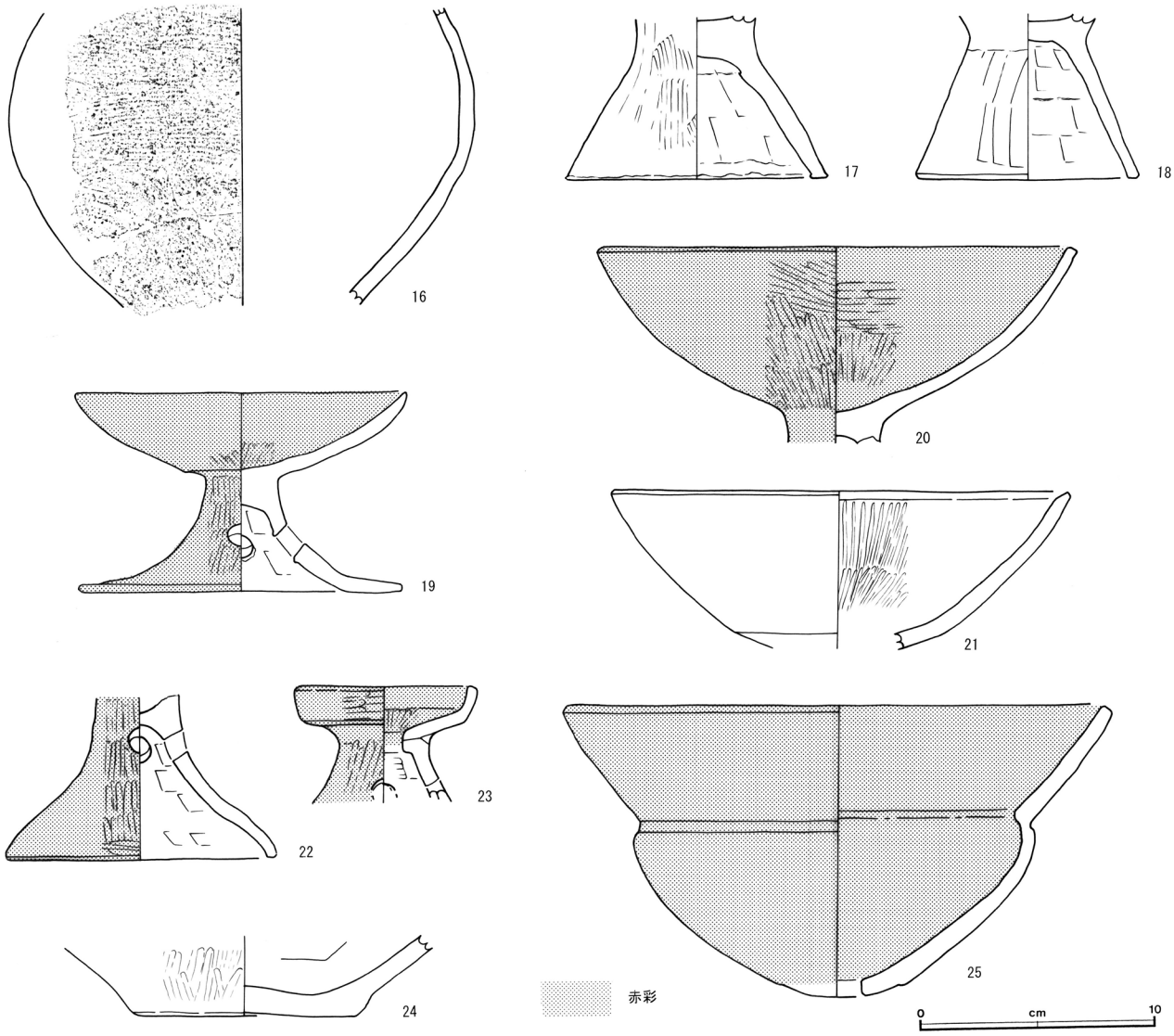
ガキで赤彩される。底面はケズリ。折り返し口縁下端と胴上部段に刻み目が付く。２は壺の口縁部破片で1/6周が残存する。口縁部にＺＳの網目状撚糸文が施文され、内外面に赤彩される。復元口径は17.2㎝である。３は壺の頸部から胴部の破片である。1/4周が残存する。全体に粗いミガキの上を赤彩する。内面はヘラナデ整形される。４は壺形土器である。口頸部を欠くが下半は全周する。外面はミガキの上を赤彩、内面はヘラナデ整形される。胎土はきめ細かく固く焼き締まっている。５は口縁部を一部欠くがほぼ完形の台付甕である。最大径25.7㎝、口径22㎝、高さ29.5㎝である。橙褐色で焼成は固い。角頭状の口縁部に外から刻み目が付く。口縁部はハケメの上をヨコナデ整形する。外面は鋭いハケメの上をナデているのでハケメは消えかけている。胎土に砂粒含む。外面上部2/3と内面下部1/3にすすが付着する。６は台付甕の上半で1/4周が残存する。角頭状の口縁部に鋭角な刻み目が付く。外面口縁部は細かいハケメ、胴部は太いハケメ、内面口縁部はハケメ、胴部はナデ整形される。７は台付甕の上半で1/4周が残存する。復元口径は18.5㎝、橙褐色である。口縁部に刻み目が付く。口縁部外面は縦方向のヘラナデ、胴部は横方向のヘラナデ、内面はヘラナデ整形される。８はほぼ完形の台付甕である。口径17㎝、底径8.5㎝、高さ22.3㎝である。口縁部は角頭状。内外面ともにヘラナデ。外面はハケメの上をヘラナデし、わずかにハケメが残る。外面の口縁部から胴部上半と、内面の下1/2にすすが付着する。橙褐色で胎土に砂が多い。９は胴部の一部を欠くがほぼ完形の台付甕である。口径14.5㎝、高さ20㎝、最大径は胴部中位で15.4㎝である。焼成は固く、胎土に砂を含む。口縁部は内外面ともにハケメの上をヨコナデ整形、外面はハケメが少し残る。胴部外面はハケメの上をナデているので、ハケメはほとんど消えている。胴部内面はヘラナデ整形。外面上部1/2にすすが付着する。内面下半部は焦げて黒くなる。10は残存率1/4の台付甕である。最大径23・5㎝、口径18㎝、残存高22.3㎝。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はヘラナデ整形される。脚接合部に輪づみ痕が残り粘土のはみ出しあり。茶褐色で胎土に砂が多い。11は台付甕で口縁部1/2、他は1/8が残存する。薄茶色で黒ずんでいる。口縁部はハケメの上をヨコナデ、胴部上1/3はハケメ、中位はヨコナデ、下1/3はタテナデ。内面はヘラナデ整形される。12は甕の上半と思われるが、折り返し口縁なので別の器種の可能性もある。1/4周が残存する。橙褐色、もろく砂が多い。口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ整形される。13は口縁部から胴部下半までの台付甕で1/4残存している。茶褐色で内外面に黒い部分あり。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメの上をナデて、ハケメが一部残る。胴部内面はヘラナデ整形される。14は台付甕の胴部である。内外面ともにナデ整形され、外面下部にハケメが残る。茶褐色で、内面下半と外面の一部にすすが付着する。15は台付甕の下半で図示した部分は全周する。胴部の最大径は24㎝である。茶褐色で外面・内面ともにすすけて黒い。胎土に砂を含む。16は台付甕の胴部である。ハケメが外面に付く。すすが内面の下半と、外面の胴中位に付着する。茶褐色で胎土に砂が多い。17・18は台付甕の脚部である。17はほぼ全周する。外面はハケメの上をナデていて、一部ハケメが残る。内外ともに粘土のはみ出しが多く全体に粗いつくりである。18は下端の一部を欠く。橙褐色で、胎土に砂が多い。内外面ともにヘラナデ整形される。19はほぼ完形の小型高坏である。口径14㎝、底径13.8㎝、高さ8.5である。外面と坏部内面はミガキの上赤彩される。口縁は内湾気味、脚のすそが平らに広がる器形。３か所の透かし穴がある。坏部の中位が一周すすけている。20は高坏の上半部である。口径20.5㎝、現存高8.3㎝。茶褐色で外面・内面ともに赤彩され、一部すすけて黒くなっている。外面はミガキ、内面下半はタテミガキ、上半はヨコミガキ、口縁部はヨコナデ整形される。21は高坏の口縁部で1/8周が残存する。内面は整然としたタテミガキ、外面はミガキで平滑にされて赤彩はない。茶褐色で、胎土に砂を含む。この個体は整形が他と異なるた




第18図　第１号住居跡出土遺物（１）



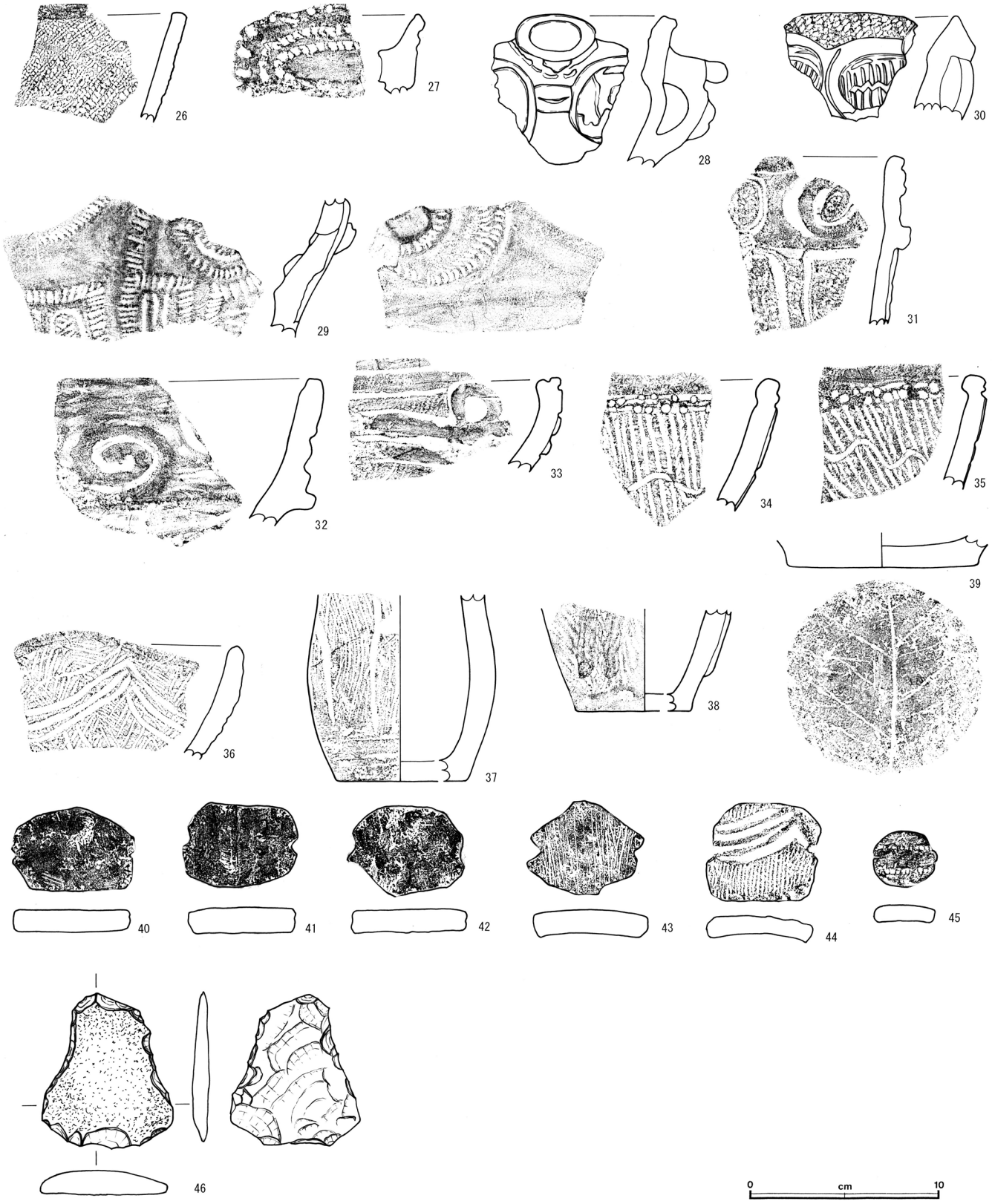

第19図　第１号住居跡出土遺物（２）




第20図　第１号住居跡出土遺物（３）

め搬入品の可能性がある。22は高坏の脚部である。下端を一部欠く。橙褐色で、外面はミガキの上赤彩される。内面はヘラナデ整形される。脚部に３か所の透かし穴がある。坏部との接合部がはっきり残る。23は器台形土器である。脚の下半を欠くが上半は全周する。口縁が短く立ち上がり接合部は口径に比して太い。脚の透かし穴は２か所対に開いている。欠損部にもあった可能性があり４穴と思われる。内上面と外面は粗いミガキに赤彩される。脚部内面はヘラナデ整形される。薄茶色で胎土に砂が多い。器台と脚部に接合痕があり、別々に作ってつないだものである。25は高坏の上半部を脚を欠いてから穴を開けて甑に転用したものである。全体に摩耗している。内外面ともにミガキの上赤彩している。底部に脚部との接合痕が見られる。胎土に砂が多い。１～25は弥生時代終末期に位置づけられると思われ、この住居跡もその時期であると考えられる。

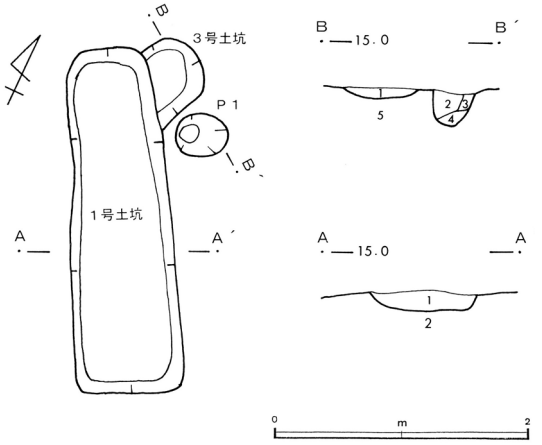
26～46は縄文時代の遺物である。住居廃棄後に流れ込んだものと考えられる。26～36は深鉢形土器の口縁部破片である。26は全体に絡状体縄文が施文される。27は隆帯に沿って角押文が見られる。28は把手で口唇部に円形の装飾、その付け根に角押文が見られる。胎土に雲母を含む。29は口唇部に爪型の押引文、胴部は隆帯に沿った爪型の押引文で区画し、区画内に沈線により文様を描く。30は口




第21図　第１号住居跡出土遺物（４）

縁下部を隆帯で区画し、口縁部は縄文が施文され、区画内は沈線で文様が描かれる。31は隆帯で渦巻文が描かれ、胴部は沈線により区画され区画内に縄文が施文される。32は隆帯により渦巻文が描かれる。33は隆帯により文様が描かれ、胴部は縄文が施文される。34・35は口縁直下に交互刺突文が巡る。地文は条線が施され、横位に波状の沈線が引かれる。36は櫛歯条線地文に連弧文が描かれる。37・38は胴部

から底部にかけての破片である。37は条線の地文に縦方向の沈線が引かれる。38は縄文が施文される。39は底部で木葉痕が見られる。40から45は土器片錘である。46は打製石斧である。26は縄文時代前期、27～29は阿玉台式、30は勝坂式、31～38は加曽利Ｅ式と思われる。




1号土坑
A－A´
1　暗灰褐色土　ローム粒少し含む。締りあり。
2　暗茶褐色土　焼土粒子少し含む。締りあり。縄文時代の包含層。

3号土坑
B－B´
1　暗灰褐色土　焼土粒子少し含む。締りあり。（3号土坑）
2　暗灰褐色土　ローム粒少し含む。締りあり。
3　暗茶褐色土　焼土粒少し含む。締りあり。
4　黒色土　焼土粒・ローム粒多く含む。締りあり。
5　暗茶褐色土　焼土粒子少し含む。締りあり。縄文時代の包含層。

第22図　土坑

## ３　土坑（第22図）

### 第１号土坑

調査区中央やや北西寄りで、縄文時代の包含層上面で検出された。平面形は長方形を呈する。長軸２ｍ67㎝、短軸77㎝、確認面からの深さは17㎝である。出土遺物は摩耗した縄文土器の細片のみであった。覆土の状態から、中世以前の遺構と思われる。

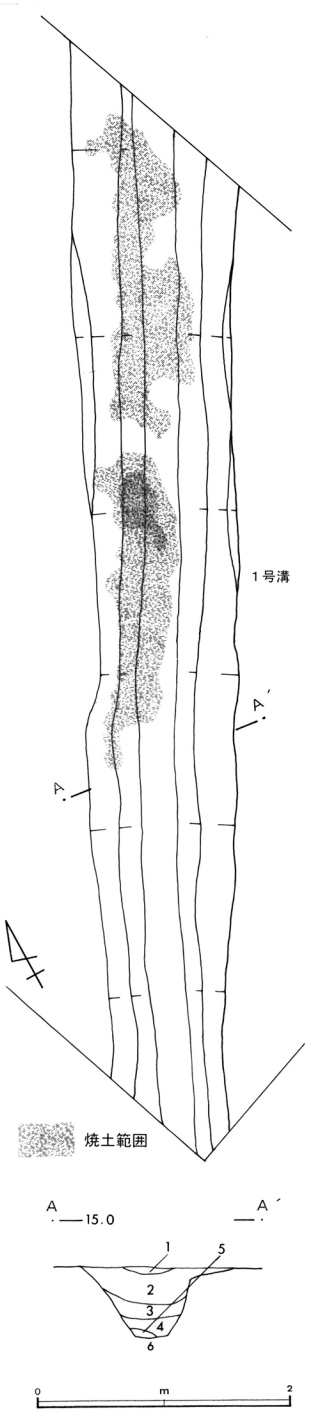
### 第３号土坑

調査区中央やや北西寄りの縄文時代の包含層上面で検出された。西側を第１号土坑に切られる。平面形は隅丸方形を呈する。検出範囲での長軸55㎝、短軸52㎝、確認面からの深さは９㎝である。出土遺物は摩耗した縄文土器の細片のみであった。第１号土坑と同様に覆土の状態より中世以前の遺構と思われる。

## ４　溝（第23図）

### 第１号溝

調査区中央を北東から南西方向へ延伸する。断面形は逆台形で確認面から35㎝までは緩やかに傾斜し、その下位では傾斜を強める。上幅は１ｍ14㎝、下幅は26㎝、確認面からの深さは57㎝である。中央より北側の覆土上層で焼土の堆積が確認された。焼土の厚さは約10㎝であった。出土遺物は縄文土器のみであるが覆土の状態より中世以前の遺構と思われる。




A－A´
1　焼土　締りややあり。
2　黒色土　焼土粒子、焼土粒含む。締りあり。
3　黒色土　焼土粒子、ローム粒多く含む。締りあり。
4　黒色土　焼土粒、ロームブロック少し含む。締りあり。
5　黒色土　やや粗い粒子。ロームブロック混入。締りあり。

第23図　第１号溝

### ５　第１号溝出土遺物（第24図）

１～３は深鉢形土器の口縁部破片である。１は口縁部に隆帯により円状の文様を描き、隆帯上と胴部に押引文が施される。２は口縁部と胴部を隆帯で区画し、口縁部に隆帯で渦巻文が描かれる。３は口縁直下に交互刺突文が巡り、胴部には縄文が施文される。１は阿玉台式、２・３は加曽利Ｅ式と思われる。

第24図　第１号溝出土遺物

### ６　ピット

ピットは６本検出された。ピット列、建物跡の復元には至らなかった。

第３表　ピット計測表　　単位　cm　() 内は現状での数値　深さは確認面よりの深さ

| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 番号 | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 50 | 33 | 34.3 | 3 | 36 | 35 | 68.0 | 5 | 57 | 42 | 114.6 |
| 2 | 37 | 29 | 80.7 | 4 | 33 | 28 | 33.7 | 6 | 46 | 42 | 42.1 |

# 第３部
# 根切遺跡（第13次調査）

## 第Ⅰ章　調査の契機と経過

### 第１節　調査の契機

根切遺跡の範囲内のさいたま市西区大字島根字下根切における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを承け、平成22年８月４日にさいたま市教育委員会が確認調査を実施したところ、古墳時代の住居跡などの遺構・遺物の所在が確認された。ただちに遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

埋蔵文化財発掘の届出の届出年月日及び受理年月日は、例言５（p.(1)）のとおりである。

### 第２節　調査の方法と経過

発掘調査は、平成22年８月31日から10月４日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。排土処理の都合上、全体を東西の２区に分割して調査を行うこととし、東半分を１区、西半分を２区とした。調査は１区より着手し、１区の調査完了後に２区の調査を実施した。

８月31日に調査機材を現地に搬入し、重機を用いて１区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、９月17日に実施した。１区の調査完了後、９月22日に重機を用いて１区の埋戻し及び２区の表土除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、９月30日に実施した。２区の調査完了後、10月４日に重機を用いて２区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

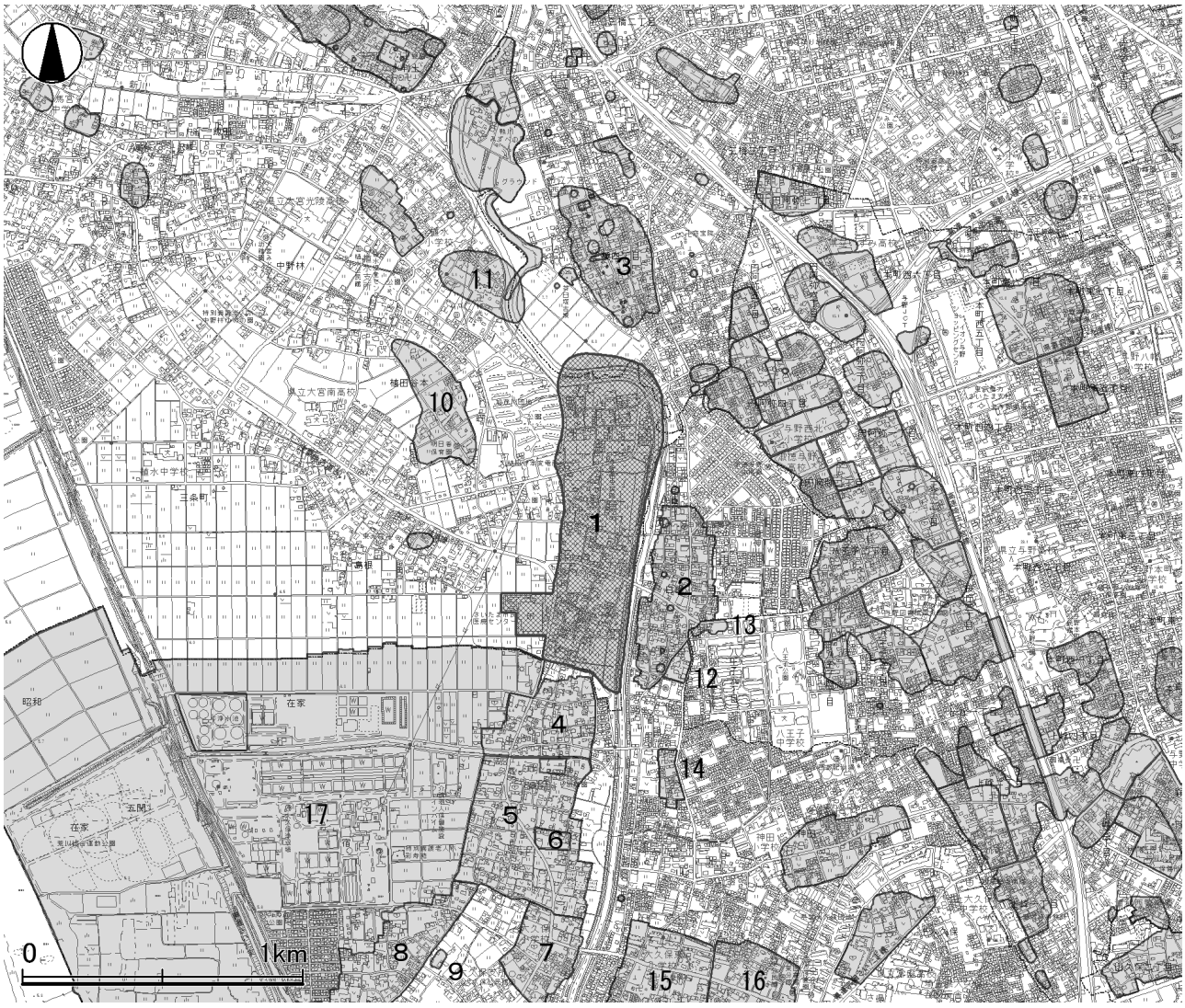
## 第Ⅱ章　遺跡の概要

### 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

根切遺跡は、さいたま市の中央西側、西区大字島根から大字植田谷本にかけて所在する。JR大宮駅から南西に約３㎞の位置にあり、遺跡の範囲は南北約1,200m、東西約450mである。地形上は、南北に流れる鴨川の西岸に沿った自然堤防上と、その西側の後背湿地に立地しており、遺跡内の標高は約６

ｍから約９ｍである。古墳時代、奈良時代、平安時代、中世にわたる遺跡として、埋蔵文化財包蔵地として周知している。これまで、開発に伴う発掘調査が旧大宮市、さいたま市および旧大宮市遺跡調査会、さいたま市遺跡調査会により14地点で行われているほか、鴨川の河川改修に伴う発掘調査が埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって行われている。

遺跡の東方約100ｍの鴨川対岸には、台地残丘と思われる標高の高い一帯があり、白鍬宮腰遺跡が立地している。白鍬宮腰遺跡や、根切遺跡の北方約100ｍに位置する側ヶ谷戸貝塚には、古墳時代中期から後期の古墳群が存在する。また、鴨川沿いの自然堤防上、根切遺跡と同じ西岸には、南方に隣接して在家稲荷遺跡、南方約400ｍに宿宮前遺跡及び宿宮前寺院跡、南方約900ｍに古貝戸遺跡、南西方約1.5㎞に塚本西耕地遺跡及び塚山古墳、西方約300ｍに金谷遺跡、北西方約250ｍに林光寺遺跡などの遺跡が、東岸の白鍬宮腰遺跡より南側には隣接して白鍬遺跡及び殿ノ前遺跡、南東方約400ｍに宮田遺跡、南方約800ｍに大久保領家遺跡及び大久保領家片町遺跡などの遺跡が連続している。また、遺跡の南西方に隣接する後背湿地には、古代の条里遺跡である大久保条里遺跡が所在する。いずれの遺跡でも、古墳時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が多く確認されており、大久保領家遺跡では大型の




**１：根切遺跡**　２：白鍬宮腰遺跡　３：側ヶ谷戸貝塚　４：在家稲荷遺跡　５：宿宮前遺跡　６：宿宮前寺院跡　７：古貝戸遺跡　８：塚本西耕地遺跡　９：塚山古墳　10：金谷遺跡　11：林光寺遺跡　12：白鍬遺跡　13：殿の前遺跡　14：宮田遺跡　15：大久保領家遺跡　16：大久保領家片町遺跡　17：大久保条里

第25図　遺跡の位置

第26図　発掘調査の位置

根切遺跡

掘立柱建物、宿宮前遺跡・宿宮前寺院跡では螺髪、根切遺跡では「川津」などの墨書土器も確認されている。

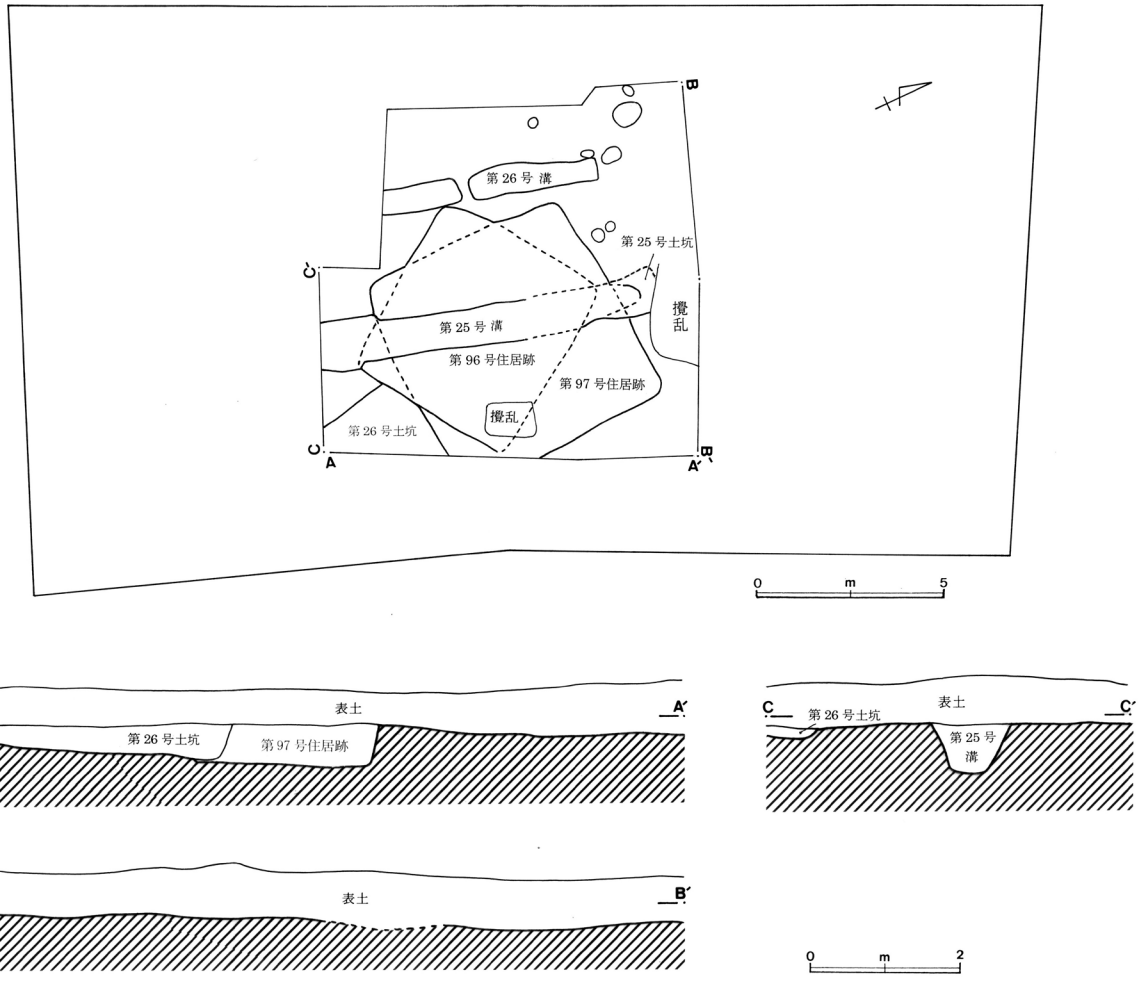
これらの状況から、根切遺跡を含む、さいたま市南西部の鴨川沿岸の一帯は、古墳時代から古墳群の築造を行える規模の集落が存在し、奈良時代から平安時代にかけては、集落のほか寺院または官衙が立地していたと推定されている。平安時代までに武蔵国足立郡に置かれた「殖田郷」は、この付近であるとする説が有力である。

これらの地域は、古代以降、自然堤防上は集落や畑として、周辺の低地は水田として利用されてきたと思われ、同様の土地利用は近代に至るまで継続している。根切遺跡の範囲は、都市計画上は市街化調整区域となっているため、大規模な開発は、平成21年に建設された市民医療センターを除いては行われていないが、遺跡の南側を通過する県道さいたま・鴻巣線沿いを中心に倉庫や店舗、住宅などの建設も行われており、徐々に市街地化が進んでいる。

## 第２節　調査区の概要

第13次調査の調査面積は約110㎡である。遺構確認面は、自然堤防の基盤層である黄褐色土層の上面で、調査時の地表面からの深さは約25～30cmであった。

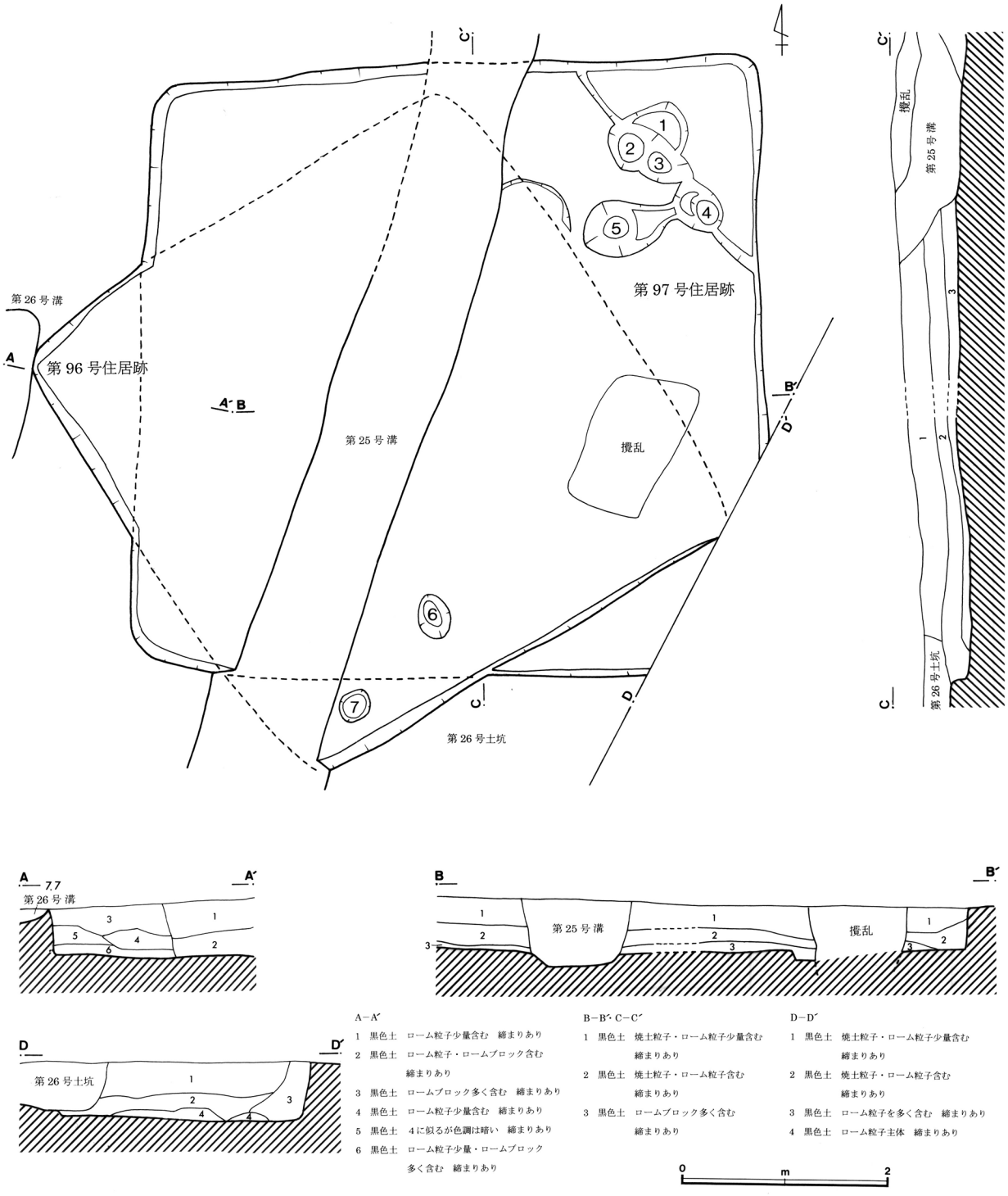
検出された遺構は古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡２基、古代の土坑２基、平安時代以降の溝




第27図　全測図及び全土層図

２条、時期不明のピット６基である。住居跡は２基が重複しており、新しい方の遺構の一部は調査区外にかかっている。主軸の方向は２基で異なっており、古い住居の廃絶後に新しい住居を作ったものと思われる。土坑はいずれも溝や住居跡など他の遺構に切られており、これらより古いものであるが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。溝は２条が平行に掘られており、うち１条は住居跡の覆土を切っていることから平安時代以降の遺構であるが、時期を特定できる遺物は出土しなかった。

遺物は、古墳時代後期から平安時代の土器や土製品などが、18リットル入り遺物収納容器13箱分出土した。




第28図　第96・97号住居跡

# 第Ⅲ章　遺構と遺物

## 第１節　住居跡

第４表　住居跡内ピット計測表

| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|
| 1 | 45 | 32 | 29 |
| 2 | 50 | 45 | 22 |
| 3 | 46 | 38 | 12 |
| 4 | 57 | 40 | 15 |
| 5 | 66 | 56 | 32 |
| 6 | 45 | 30 | 7 |
| 7 | 30 | 26 | 9 |

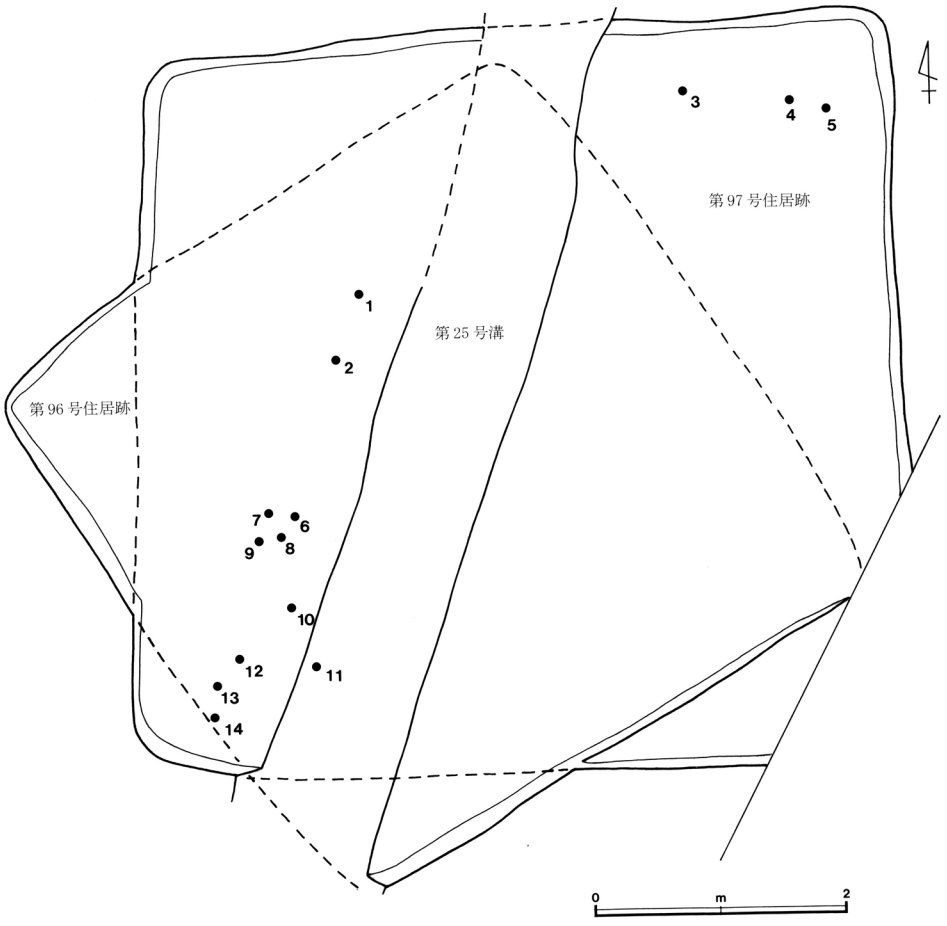
単位：cm

**第96号住居跡**（第28図・第４表）

調査区の東側に位置する。調査時は第２号住居跡と呼称した。形状はほぼ方形で一辺の長さは約４ｍ、主軸の向きはＮ50°Ｅ、確認面から床面までの深さは約60cmで、遺構の大半は後述する第97号住居跡及び第25号溝によって切られており、残存するのは西及び南の隅、および一部の床面のみである。出土した遺物から、古墳時代後期（６世紀）以降、第97号住居跡より古い時期の遺構である。

**第96号住居跡出土遺物**（第30図）

第96号住居跡の覆土中からは、古墳～奈良時代の土器破片が出土した。他の遺構で切られているため、周辺の遺構の覆土にも本来第




第29図　第96・97号住居跡遺物出土位置図

第５表　遺物対照表

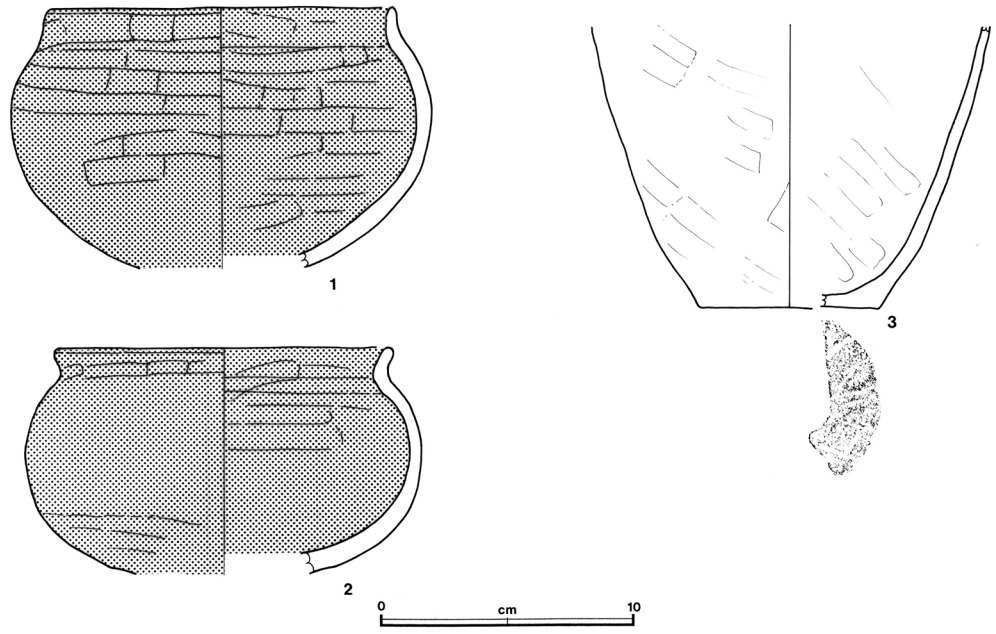
| 番号 | 標高 | 実測図 |
|---|---|---|
| 1 | 7.392 | 第31図18 |
| 2 | 7.327 | 第32図４ |
| 3 | 7.082 | 第31図５ |
| 4 | 7.136 | 第33図１ |
| 5 | 7.141 | 第33図２ |
| 6 | 7.294 | 第31図12 |
| 7 | 7.246 | 第31図19 |
| 8 | 7.297 | 第31図13 |
| 9 | 7.330 | 非掲載 |
| 10 | 7.358 | 第32図１ |
| 11 | 7.255 | 第39図１ |
| 12 | 7.336 | 第32図２ |
| 13 | 7.198 | 第31図13 |
| 14 | 7.149 | 第31図10 |

単位：m

96号住居跡に伴っていた遺物が含まれていると思われる。１、２は土師器で、碗形土器である。２点とも底部を欠くほかは復元できた。いずれも内外面とも赤彩されている。１は、きめが細かい黄白色の胎土で、内外面ともヘラナデ調整される。外面の赤彩は剥離している。口径は13.8cm、胴部の最大径は16.6cm、残存高は10.2cmである。２は接合により復元した。破片の一部は第97号住居跡の覆土からも出土している。胎土は明褐色を呈し、暗褐色の粒子を多く含む。外面の下部は被熱により表面が一部剥離し、煤が付着している。口径は13.4cm、胴部の最大径は15.6cm、残存高は8.8cmである。いずれも６世紀頃のものと思われる。３は、土師器の甕の底部の破片である。住居跡床面のピット（第28図No.７）内から出土した。器形は長胴の甕と思われる。胎土は黄褐色を呈し、白色の粒子を少量含む。側面下部の一部には黒色の火襷がみられる。底径は7.1cm、残存高は11cm、底部の残存率は36％である。

**第97号住居跡**（第28図・第29図・第５表）

調査区の東側に位置する。調査時は第１号住居跡と呼称した。形状はほぼ方形で一辺の長さは約5.9ｍ、確認面から床面までの深さは約60cm、主軸の向きはほぼ南北方向である。遺構の東側の一部は調査区外にかかっており、調査を行ったのは遺構の約93％の範囲である。前述のとおり、第96号住居跡の覆土を掘りこんでつくられており、床面の深さは第96号住居跡よりやや浅い部分もみられるが、大部分はほぼ同一である。また、遺構覆土の一部は、後述する第26号溝によって切られている。




第30図　第96号住居跡出土遺物

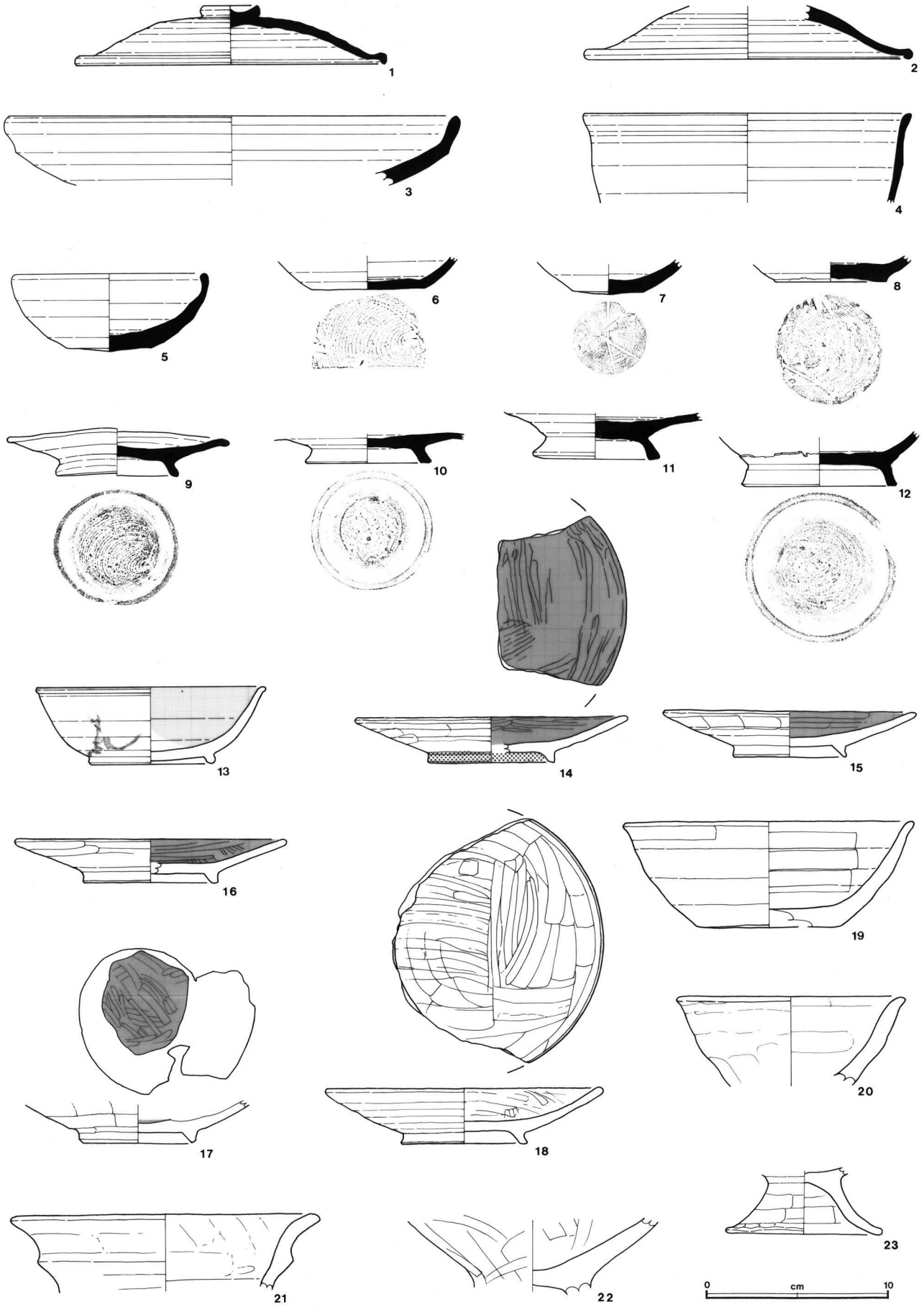
根切遺跡

第97号住居跡出土として取り上げた遺物の時期は、古墳時代から平安時代（10世紀頃）の幅広い時期にわたる。第96号住居跡など、近隣のより古い遺構に伴う遺物が覆土中に含まれていたり、第26号溝などより新しい遺構に伴う遺物を住居跡出土として取り上げていたりする可能性も考えられる。覆土上層～中層では多数の高台付の坏（須恵器、土師器とも）や、灰釉陶器の埦など、10世紀頃に比定される遺物の出土が多いが、６～７世紀頃に比定される有稜の高坏などの遺物もみられる。床面近くで、ほぼ完形の口縁部が内湾する須恵器の坏（第31図５）や、長胴の土師器の甕（第33図２）の一括出土が見られることから、遺構の時期の上限は、７世紀後半から８世紀前半頃と推定される。

**第97号住居跡出土遺物**（第31図～第34図）

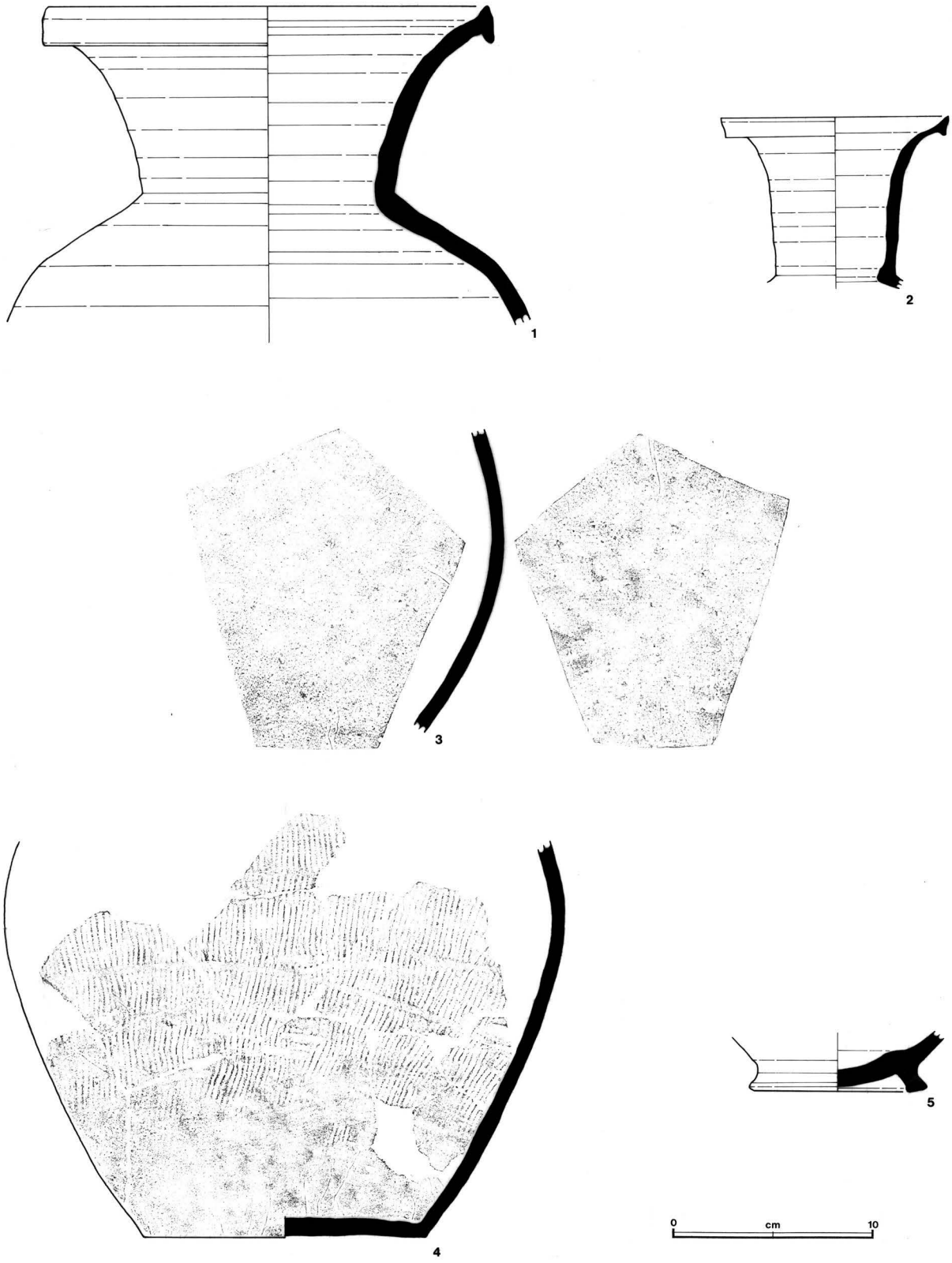
第97号住居跡の覆土からは、古墳時代～平安時代の遺物が出土した。出土層位は、上層・下層に分けて記録した。上層は第28図土層の１層、下層は２層・３層に相当する。前述のとおり、他の遺構に伴う遺物が混入している可能性も考えられるが、分離が困難であるため一括して掲載する。

第31図１～12は須恵器の蓋、埦、坏である。１はボタン形のつまみを持つ蓋の破片で、覆土上層から出土した。胎土は青灰色で、直径１～３㎜の礫片を含む。直径は17.1cm、器高は3.2cm、口縁部の残存率は20％である。２は蓋の縁部の破片で、覆土上層及び下層から出土した破片が接合した。胎土は明灰褐色で、１～３㎜の礫片を少量、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子を多く含む。直径は18.0cm、残存高は3.0cm、口縁部の残存率は48％である。３は坏の口縁部の破片で、覆土上層から出土した。口縁部は外面に１段の稜を持って内反する。胎土は灰褐色で、器面内面は暗灰色を呈する。直径0.5～１㎜の暗褐色粒子を多く含む。直径は24.6cm、残存高は3.7cm、口縁部の残存率は９％である。４は埦の口縁部の破片で、覆土中層から出土した。口縁はやや内湾し、口唇部はやや外反する。胎土は暗灰色で、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子と１～２㎜の礫片を多く含む。直径は18.0cm、残存高は5.0cm、口縁部の残存率は８％である。５は坏である。口縁部の約半分を欠くほかは完形である。出土位置は第29図No.３で、覆土の３層に相当する。胎土は灰色で、白色の粒子を少量含む。口縁は内湾しながら立ち上がり、口唇部はさらに内反する。底面は全面ヘラ削り整形が施される。最大径は10.9cm、器高は4.0cmである。６～８は坏の底部破片である。６は覆土上層から出土した。胎土は灰色できめが細かく、白色の針状物質を多く含むほか、１～２㎜の礫片を含む。底部は回転糸切り後に外周部のみヘラ削り整形される。残存高は1.5cm、底面の残存率は79％である。７は覆土上層から出土した。胎土は青灰色できめが細かい。底面は全面ヘラ削り整形され、中央で交差する３条の沈線が＊印状に施される。残存高は1.7cm、底部の残存率は74％である。８は覆土下層から出土した。胎土は黄灰褐色で、２～５㎜の礫片と、直径0.5～１㎜の白色粒子を含む。底部は回転糸切り後に外周のみヘラ削り整形されている。残存高は1.2cm、底部の残存率は100％である。９～12は高台付きの坏の底部と思われる破片である。９は第97号住居跡と第25号溝から出土した遺物が接合した。胎土は灰褐色で、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子を多く含むみ、また白色粒子を少量含む。口縁は直線状で、口唇部が外反する。高台内には回転糸切り痕が残る。全体に上下に歪んでおり、器高は最高で2.5cm、口縁部の残存率は53％である。10は第29図No.14の位置で出土した。覆土の２層に相当する。胎土は暗灰色で、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子と白色粒子を含む。口縁部はほぼ水平に広がり、やや外反する。高台内には回転糸切り痕が残る。残存高は1.6cmである。11は覆土下層から出土した。胎土は暗灰色で、２～５㎜の礫片を多く含む。口縁



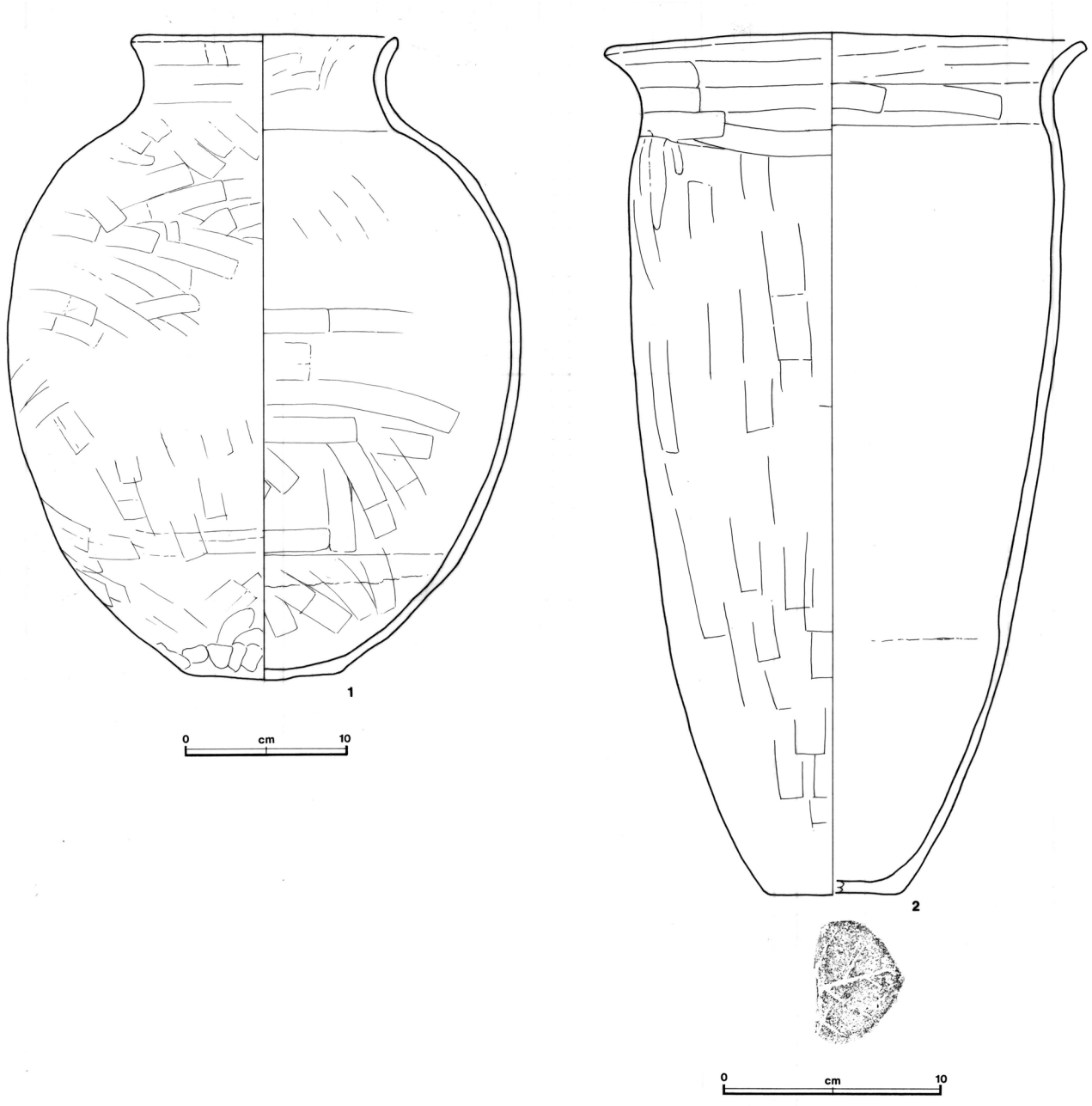

第31図　第97号住居跡出土遺物（１）

部と高台部は平行ではなくやや斜めに歪んでおり、口縁部はやや外反する。残存高は2.6cmである。12は第29図No.６の位置で出土した。覆土の２層に相当する。胎土は灰褐色で、直径0.5～１㎜の白色粒子と暗褐色粒子を少量含む。口縁部は内湾しながら立ち上がる。残存高は2.7cmである。13は灰釉陶器




第32図　第97号住居跡出土遺物（２）

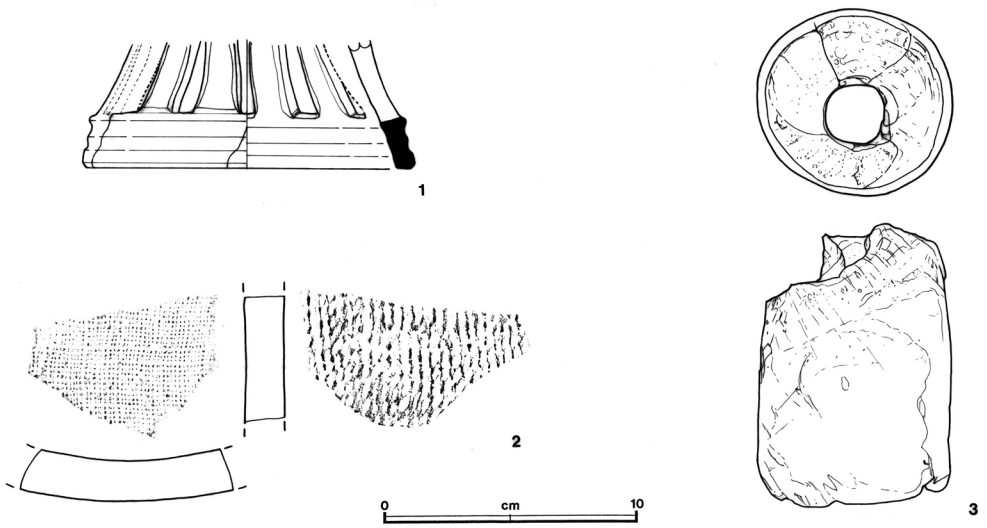
の埦である。第29図No. ８とNo.13の位置で出土した破片が接合し、口縁の一部を欠くほかはほぼ完形に復元された。覆土の２層に相当する。胎土は灰白色できめが細かく、内外面、底面とも滑らかに調整されている。内面の約半分に褐色の釉がかかる。外面の一部に褐色の物質が付着する。口径は12.5cm、器高は4.2cm、口縁部の残存率は82%である。14～20は土師器の坏である。14～17は高台を持つ皿状の器形で、内面はヘラミガキ調整の後に黒色処理が施された黒色土器である。14のみ高台部に赤彩と思われる物質の付着がみられる。胎土は14～16は明褐色、17は褐色で、いずれも直径0.5～１㎜の暗褐色粒子を少量含むほか、16・17は淡黄色の粒子を少量含む。出土層位はいずれも覆土上層、方寸は、14が直径15.0cm、器高2.5cm、口縁部の残存率21%、15が直径13.8cm、器高2.5cm、口縁部の残存率50%、16が直径15.0cm、器高2.4cm、口縁部の残存率26.5%、17が残存高2.1cm、底部の残存率79%である。18も高台を持つ皿状の器形で、第29図No. １の位置で出土した。覆土の２層に相当する。




第33図　第97号住居跡出土遺物（３）

胎土は明褐色に褐色がまだらに混ざる。直径0.5～２㎜の暗褐色粒子を多く含む。内面はヘラミガキ調整である。直径は15.3cm、器高は3.0cm、口縁部の残存率は35％である。19は第29図No.７の位置で出土した。覆土の２層に相当する。胎土は明褐色で、直径１～２㎜の暗褐色粒子を多く含む。口縁部外面の一部には煤と思われる黒色の物質が付着する。平底の埦状の器形で、口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部はやや外反する。底面は平滑に整形されている。直径は16.0cm、器高は5.8cm、口縁部の残存率は63％である。20は口縁部の破片で、覆土下層から出土した。胎土は褐色で、直径0.5㎜程度の暗褐色粒子を多く含む。口縁部はやや内湾し、口唇部はやや外反する。直径は12.6cm、残存高は4.7cm、口縁部の残存率は24％である。21～23は土師器の高坏である。21は口縁部の破片で、覆土下層から出土した。胎土は黄褐色できめが粗く、練りが不十分なためか層状の構造が残る。直径0.5～１㎜の暗褐色及び白色の粒子を含む。器面外面は細かくひび割れ、層状の剥離がみられる。口縁部には稜を持ち、口唇部は外反する。直径は17.0cm、残存高は4.2cm、口縁部の残存率は25％である。22は頸部上部の破片で、覆土上層から出土した。胎土は明褐色で、器面外面の一部は褐色を呈す。頸部の直径は6.4cm、残存高は3.8cmである。23は脚部の破片で、覆土上層から出土した。胎土は器部が明褐色、脚部が暗褐色で、器部内面は茶褐色を呈する。直径0.5㎜程度の白色粒子を多く含む。底部直径は8.6cm、頸部直径は4.0cm、残存高は3.3cm、底部の残存率は37％である。

第32図１～５は須恵器の壺及び甕である。１は壺の口縁部から頸部の破片で、第29図No.10の位置で出土した。覆土１層に相当する。胎土は灰褐色で、白色の粒子及び灰色の礫片を少量含む。頸部の外面には黒色の自然釉が付着する。頸部は全体が外反して上に開き、口唇部は外側に折り返される。口縁部の直径は22.8cm、頸部の直径は12.8cm、残存高は15.7cm、口縁部の残存率は29％である。９世紀第２～３四半期の産と推定される。２は壺の口縁部から頸部の破片で、第29図No.12の位置で出土した。覆土１層に相当する。胎土は灰褐色で、白色の粒子を含む。頸部の外面の約半周には褐色の灰釉が付着する。頸部は直線状に伸び、上半は外反して広がり、口唇部は外側に折り返される。口唇部の直径は11.6cm、頸部の直径は6.0cm、残存高は8.2cm、口縁部の残存率は45％である。３は胴部の破片である。覆土中層から出土した。胎土は暗灰色で、外面の上半部には灰褐色の自然釉が付着する。器面内面は茶褐色を呈する。白色粒子、白色針状物質、１～３㎜の礫片を含む。４は胴部から底部にか

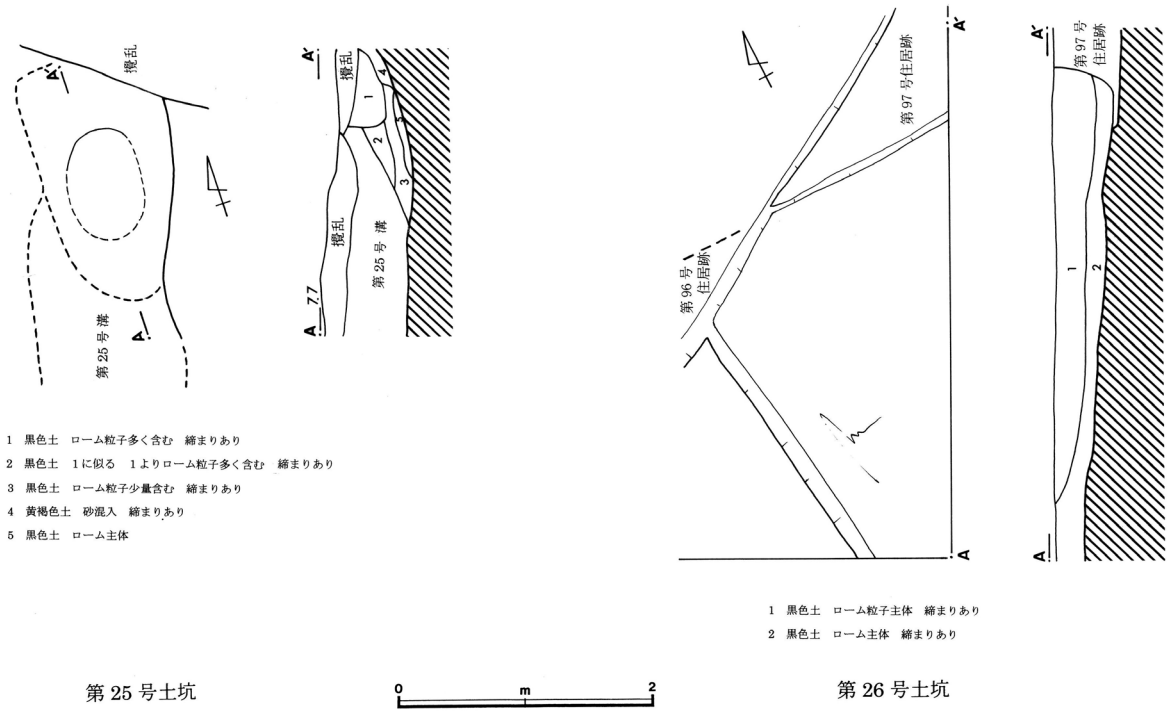



第34図　第97号住居跡出土遺物（４）

けての破片である。第29図No. ２の位置で出土した。覆土３層に相当する。胎土は明灰褐色で、やや還元焼成が弱い。下半部は外面が被熱し酸化している。ロクロ整形、内面は未調整、外面は上半部のみ板叩きの後に全体をヘラナデ整形している。胴部の最大径は28.4cm、底径は14.4cm、残存高は19.8cmである。５は底部の破片である。出土層位は記録されておらず不明である。胎土は灰褐色で、暗褐色の粒子を少量含む。底部内面に自然釉が溜まったような状態で付着している。底部には高台を持つ。高台部最大径は9.0cm、残存高は2.7cmである。

第33図１～２は土師器の甕である。１は、第29図No. ４の位置で一括出土した破片が接合した。覆土３層に相当する。胎土は明褐色で、粒子が粗く空隙が多い。直径0.5～2mmの暗褐色粒子を多く含む。内外面ともヘラナデ調整、胴部は卵型で、最大径は中央よりやや上に位置する。口縁は外反して立ち上がる。口縁部直径は16.6cm、胴部の最大径は31.8cm、底径は10.0cm、器高は39.2cm、口縁部の残存率は23%である。２は第29図No. ５の位置で一括出土した破片が接合した。覆土３層に相当する。胎土は黄褐色で、直径0.5～１mmの暗褐色粒子を多く含むほか、白色粒子を含む。外面及び口縁部の内面はヘラナデ調整、胴部は葉巻型で、最大径は口縁部である。口縁は外反して広がる。底面には木葉痕がみられる。口縁部の直径は22.5cm、胴部の最大径は20.2cm、底径は6.2cm、器高は39.0cmである。

第34図１は須恵器の円面硯の脚部の破片と考えらえる。覆土下層から出土した。胎土は灰色で、器面は暗青灰色を呈する。直径0.5～１mmの暗褐色粒子を含むほか、直径0.5mm程度の白色粒子を少量含む。推定される脚裾部の直径は13.3cm、残存高は5.0cm、底部の残存率は15%である。２は布目瓦で、平瓦と思われるものの中央部の破片である。覆土上層から出土した。胎土は灰褐色で、白色の粒子を含む。凹面の表面は暗灰褐色を呈する。凹面には布目が残る。凸面には叩き板の縄目が残る。３は羽口の一部である。覆土上層から出土した。胎土は黄褐色で、直径0.5～１mmの白色粒子を多く含む。炉内に差し込まれていたと思われる一端は、外面が被熱により軽石状に発泡、黒色に変色し、ガラス状




第35図　第25・26号土坑

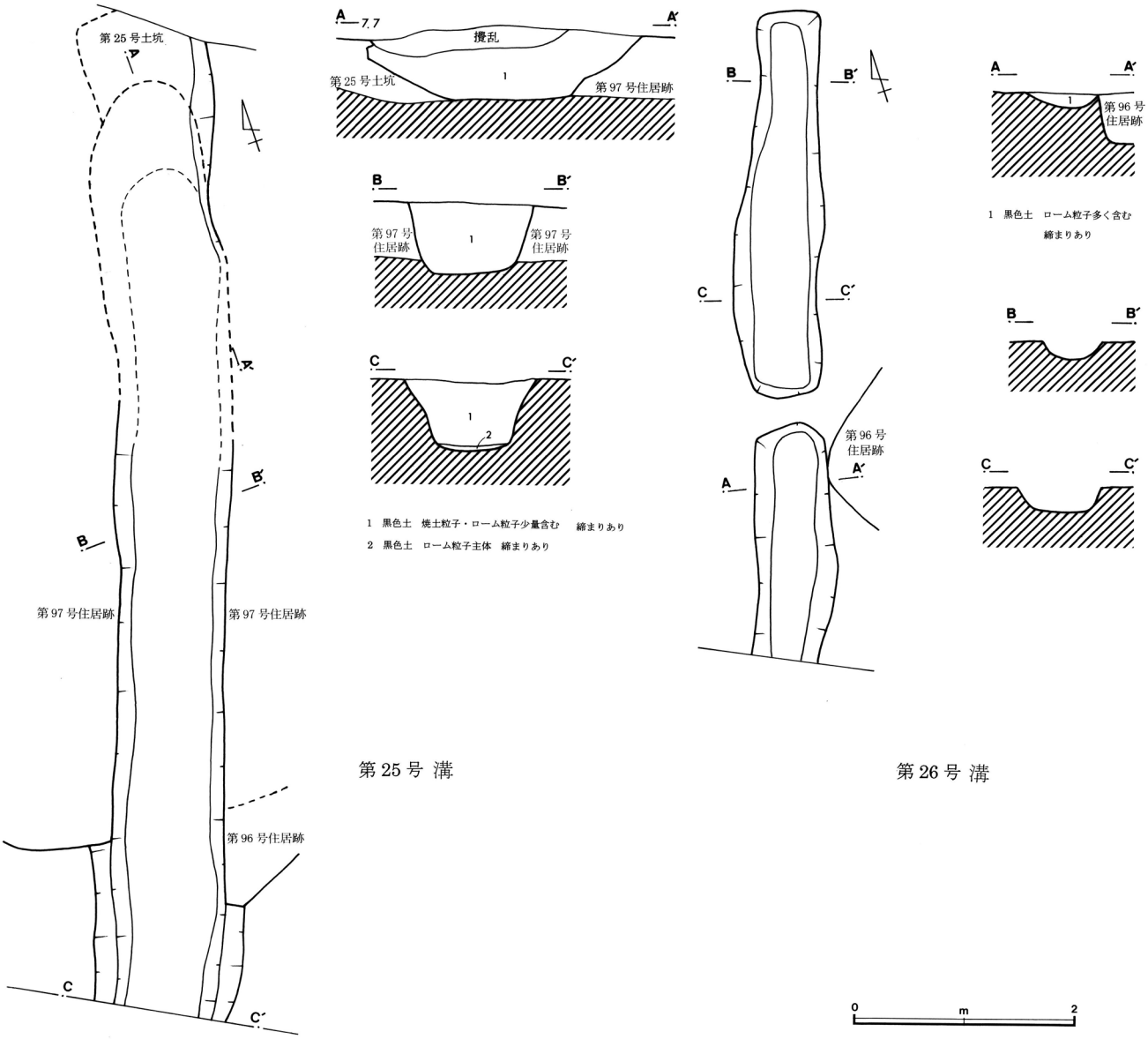
の物質が付着している。被熱部分とそうでない部分の境界は、長軸に垂直ではなくやや斜交しており、炉に対して斜めに装着された、あるいは炉内の隅部に装着され、被熱にむらがあった可能性が考えられる。最大径は7.4cm、残存長は11.3cmである。

## 第２節　　その他の遺構

### １　土坑

**第25号土坑**（第35図）

調査区の北側、第96号住居跡及び第97号住居跡を切って南北に伸びる第25号溝の北端に位置する。調査時は第１号土坑と呼称した 南側は第25号溝、北側は撹乱によって切られるため、構築時の形状は把握できなかった。残存部分の形状は南北に長い方形で、長軸は約２ｍ、短軸は約１ｍ、軸線は約Ｎ15°Ｅである。確認面から底面までの深さは約40cmである。遺物は土師器の小片が出土したが、図示




第 25 号 溝　　第 26 号 溝

第36図　第25・26号溝

できるものはなかった。遺物及び覆土の様相、第25号溝との関係から、古代の遺構であると推定される。

**第26号土坑**（第35図）

調査区の南東端、第96号住居跡及び第97号住居跡の南東側に位置する。調査時は第２号土坑と呼称した。南側と東側は調査区外へと続いている。精査時に住居跡の覆土との判別が難しく、新旧関係は土層観察によって判明したため、遺構北側の平面形状を明らかにすることができなかった。確認できた西側の壁の形状はほぼ直線状で、方向はＮ10°Ｗである。確認面から底面までの深さは、北側で約50cm、南側で約30cmである。遺物は土師器の小片が出土したが、図示できるものはなかった。遺物及び覆土の様相、住居跡との関係から、平安時代以後の遺構であると推定される。

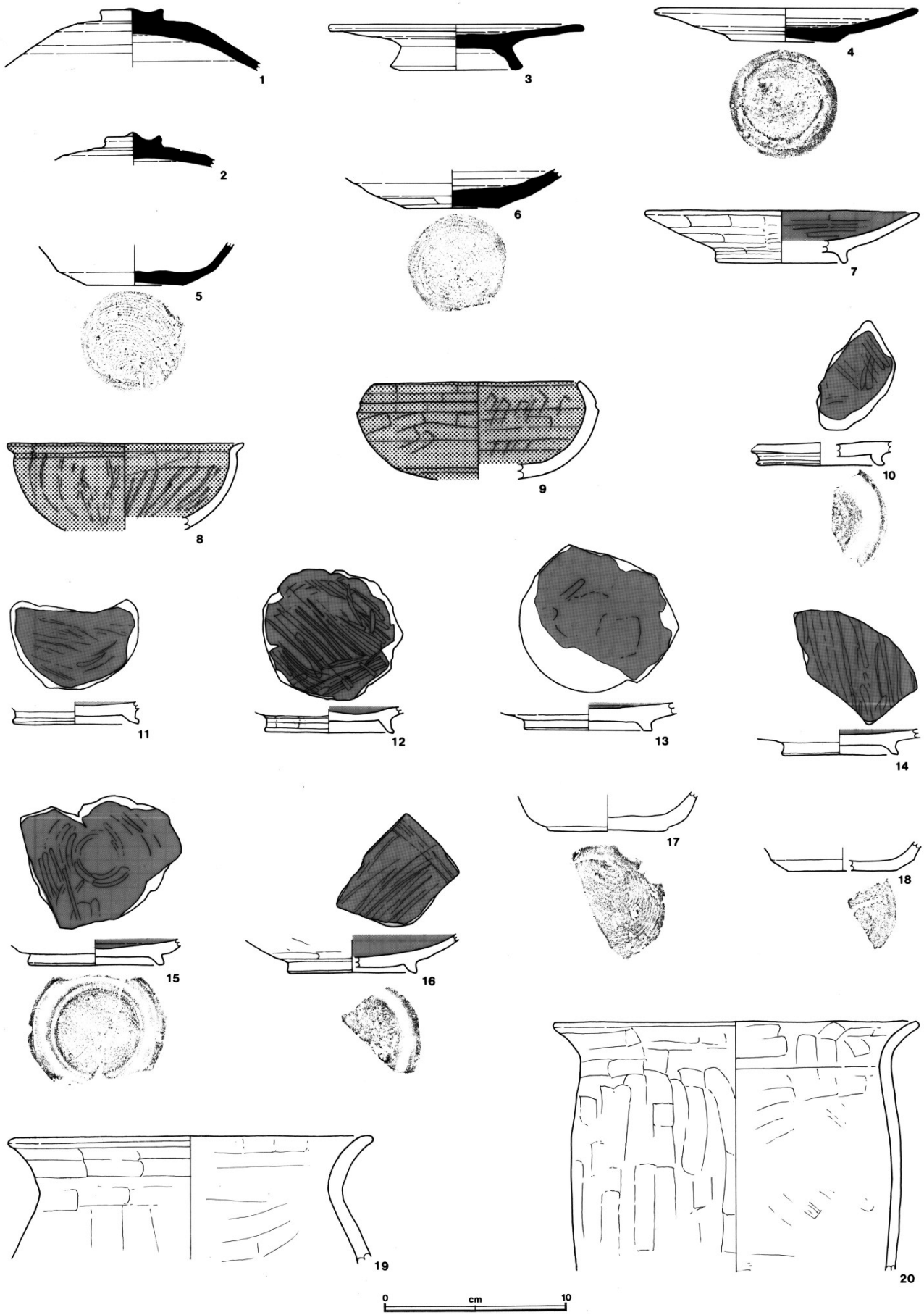
## ２　溝

**第25号溝**（第36図）

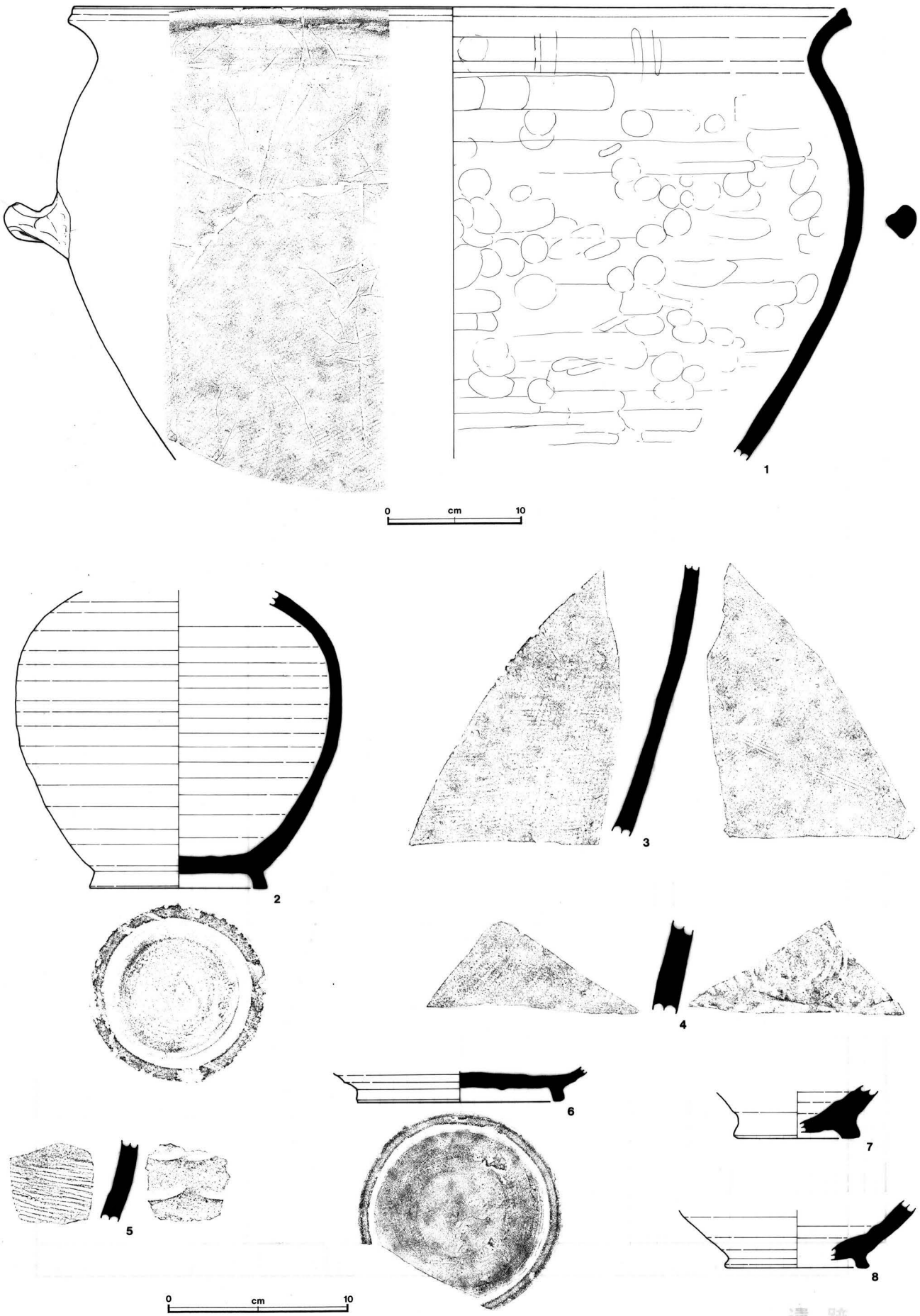
調査区のほぼ中央に南北に伸びる直線状の溝である。調査時は第１号溝と呼称した。北側は調査区の端から約３ｍ南で途切れており、南側は調査区外へと続いている。確認面での上幅は約130cm、断面形状は逆台形で、底面の幅は約70cm、確認面から底面までの深さは約80cmである。第25号土坑、第96号住居跡及び第97号住居跡を切って造られており、覆土中からは古墳時代から平安時代にかけての遺物が出土した。本来は他の遺構に伴う遺物が、溝の埋没時に流入したものが多いと思われるため、第25号溝の構築及び埋没の時期は平安時代以降であるが、確定はできなかった。

**第25号溝出土遺物**（第37図～第39図）

第37図１～６は須恵器である。１・２はボタン型のつまみを持つ蓋の破片である。１の胎土は灰色で、直径0.5mm程度の白色粒子を多く含むほか、１～３mmの礫片を含む。残存高は3.1cmである。２の胎土は灰褐色で、１mm程度の礫片を多く含むほか、直径0.5～１mmの暗褐色粒子を含む。残存高は2.0cmである。３～６は坏である。３は高台を持つ。胎土は灰色で、0.5mm程度の白色粒子を多く含むほか、１～３mmの礫片を含む。口縁部はやや外反しながらほぼ平らに広がる。高台部は下部が広がる。直径は14.0cm、高台部の最大径は7.3cm、器高は3.0cm、口縁部の残存率は28％である。４の胎土は明灰褐色で、ややきめが粗い。直径0.5～2mmの暗褐色粒子を多く含む。口縁部から口唇部は直線状に広がる。底部は回転糸切り後ヘラナデ調整、直径は14.4cm、器高は1.8cm、口縁部の残存率は47％である。５の胎土は明灰褐色で、直径１～２mmの暗褐色粒子を含むほか、礫片を少量含む。口縁部は、底面から約0.8cmの位置に稜を持ち、上部は直線状に広がる。底部は回転糸切り後未調整である。残存高は2.2cmである。６の胎土は明灰褐色で、直径１～２mmの暗褐色粒子を含むほか、礫片を少量含む。底部はヘラ切り後ヘラナデ調整、残存高は1.7cmである。７～20は土師器である。７は高台付の坏で、器形が復元された。内面ヘラミガキ調整の後に黒色処理された黒色土器である。胎土は明褐色で、直径0.5mm程度の白色粒子及び褐色粒子、雲母粒子をそれぞれ少量含む。口縁部は直線状に広がる。直径15.0cm、器高2.8cm、口縁部の残存率は14％である。８・９は丸底の坏の口縁部の破片である。いずれも内外面とも赤彩されるが、色調は８はやや淡く、９は赤味が強い。８の胎土は明褐色で、直径0.5～



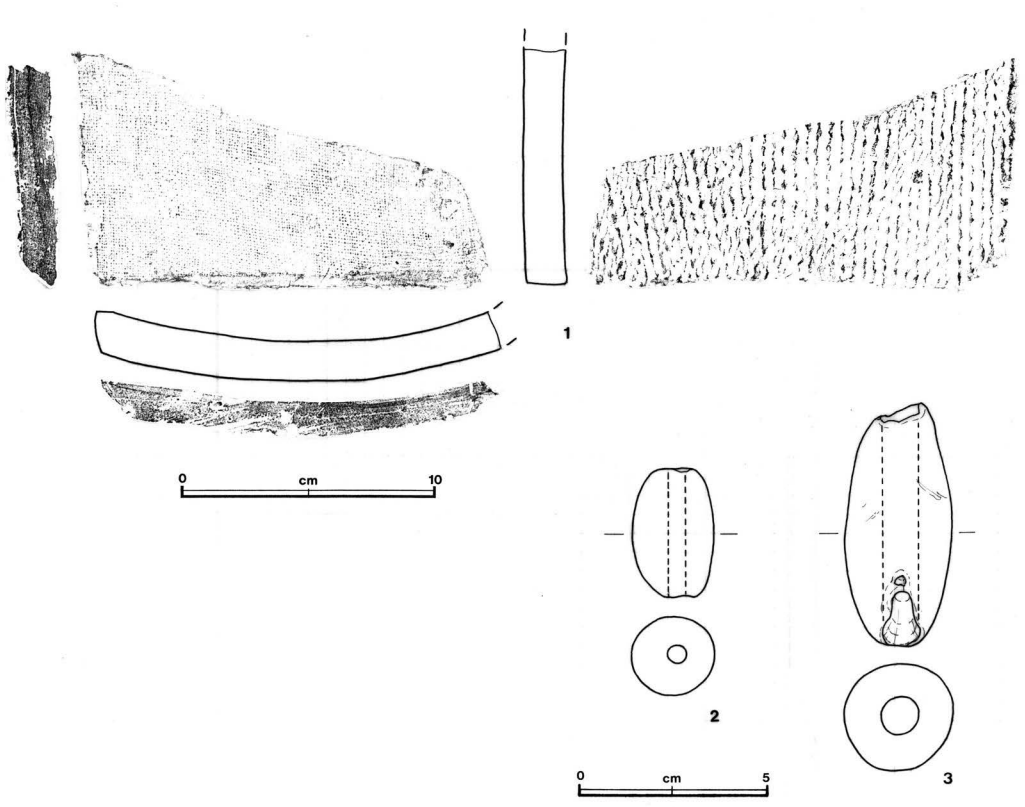

第37図　第25号溝出土遺物（１）




第38図　第25号溝出土遺物（２）

根切遺跡

１㎜の白色粒子を含む。口縁部は強く内湾し、口唇部は外に折れる。器面内面には放射状の暗紋が施される。直径は13.0cm、残存高は4.8cm、口縁部の残存率は13％である。９の胎土は茶褐色である。口縁部・口唇部とも強く内湾し、口縁から約1.5cm下の最大径付近に浅い沈線が廻る。最大径は13.2cm、口縁部直径は11.2cm、残存高は5.4％、口縁部の残存率は26％である。器面は内外面とも平滑に磨かれている。８・９とも、古墳時代末、７世紀後半から８世紀初頭のものと考えられる。10～16は高台を持つ坏の底部の破片である。いずれも内面はヘラミガキ調整の後に黒色処理された黒色土器である。10の胎土は黄褐色、残存高は1.3cmである。11の胎土は明褐色で、暗褐色粒子を多く含む。残存高は0.8cmである。12の胎土は褐色で、直径0.5㎜程度の白色粒子を含む。残存高は1.0cmである。13の胎土は黄褐色で、暗褐色の粒子を少量含む。ロクロ整形で底面には回転糸切り痕が残る。残存高は0.9cmである。14の胎土は明褐色できめが細かく、直径0.5㎜程度の暗褐色粒子を含む。ロクロ整形で底面には回転糸切り痕が残る。残存高は1.0cmである。15の胎土は褐色で、きめはやや粗く、直径0.5㎜程度の暗褐色粒子を多く含む。残存高は1.0cmである。16の胎土は褐色で、暗褐色粒子を含む。残存高は2.1cmである。これらの高台付の坏は平安時代、９～10世紀のものと思われる。17・18は高台のない坏の底部の破片である。17の胎土は淡黄褐色できめが細かく、直径１～２㎜の褐色粒子を含む。口縁部は内湾しながら立ち上がる。ロクロ整形、底部は回転糸切り後に外周部のみヘラナデ整形、残存高は2.0cmである。18の胎土は暗茶褐色で、直径0.5㎜程度の白色粒子を含む。口縁部は稜を持って直線状に立ち上がる。ロクロ整形、底部は回転糸切り後に外周部のみヘラナデ整形、残存高は1.3cmである。19・20は甕または甑の口縁部から頸部の破片である。19は胴部に最大径を持つ甕であると思われる。胎土は明褐色で、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子、直径１㎜程度の白色粒子を含む。口縁部の直径は




第39図　第25号溝出土遺物（３）

20.0cm、残存高は6.7cmである。20は口縁部に最大径を持つ長胴の甕または甑で、胎土は黄褐色、直径0.5～１㎜の暗褐色粒子を多く含むほか、白色粒子を少量含む。最大径は口縁部で、直径は20.0cm、残存高は13.6cmである。

第38図は須恵器の甕および壺である。１は甕の口縁部から胴部にかけての部分で、溝覆土及び表土中から出土した破片が接合した。胎土は明灰色できめが細かく、直径１～３㎜の白色粒子を含む。外面は板叩き整形後にヘラ調整、内面はヘラ整形痕が残る。胴部に最大径を持ち、最大径付近に半円形の把手が水平方向に取り付けられている。口縁部は外反して開き、口唇部には沈線が廻る。口縁部直径は58.8cm、胴部の最大径は60.3cm、残存高は33.2cm、口縁部の残存率は29％である。２は壺の胴部である。胎土は灰色で、直径１～５㎜の白色の粒子及び礫片を含む。外面上半部の一部には自然釉の付着がみられる。胴部の最大径は18.3cm、残存高は16.5cmである。３～５は甕の胴部の破片である。いずれも表面には板叩き調整痕がみられるほか、４・５の内面には円形の当て板痕がみられる。３の胎土は灰色で、器面外面は暗灰色を呈する。直径0.5～１㎜の暗灰褐色粒子を含む。４の胎土は灰褐色で、器面外面は暗灰色、内面は灰色を呈する。直径0.5～１㎜の白色粒子を含む。５の胎土は、内外の器面から厚さの約３分の１までがそれぞれ灰褐色、中心の部分が暗灰色で、器面表面は灰色、内面は茶褐色を呈する。直径0.5㎜程度の白色粒子と、１㎜程度の礫片を多く含む。６～８は甕または壺の底部の破片である。６の胎土は明灰色で、直径0.5㎜程度の白色粒子を含む。高台部外面の一部に自然釉の付着がみられる。高台部の直径は11.6cm、残存高は1.7cmである。７の胎土は明灰色である。胴部外面及び底部内面の一部に自然釉の付着がみられる。高台部の直径は7.0cm、残存高は2.6cmである。８の胎土は明灰色で、器面内面は灰褐色を呈する。底部内面の一部に自然釉の付着がみられる。

第39図１は布目瓦の破片である。第29図No.11の位置で出土した。平瓦の狭端左側の隅部の破片である。胎土は暗灰褐色で、５㎜前後の礫片を含む。凹面には布目が残る。凸面には叩き板の縄目が鮮明に残る。２・３は樽形の土錘である。２は須恵質で暗灰色を呈し、胎土には白色粒子を多く含む。全長は3.4cm、最大径は2.1cmである。３は土師質で明黄褐色を呈する。全長は6.4cm、最大径は2.9cmである。

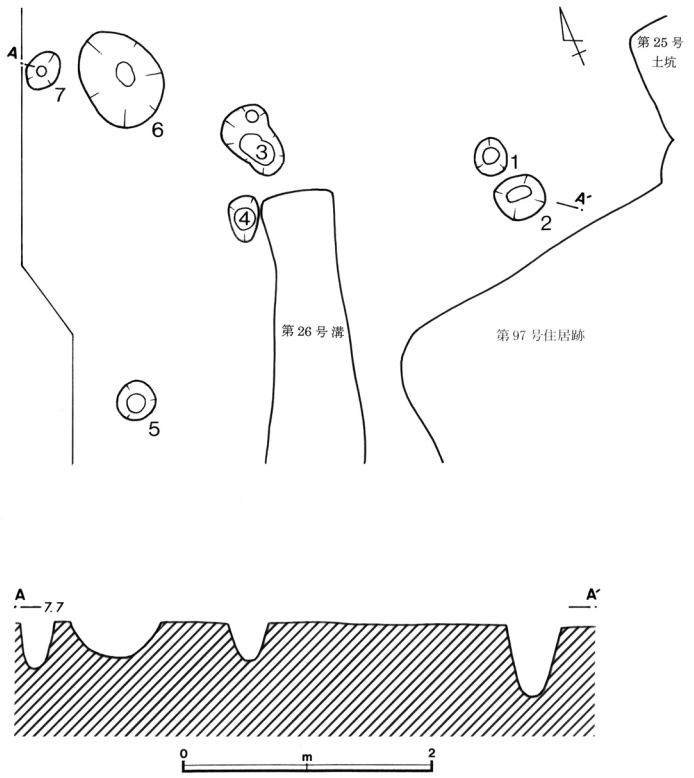
**第26号溝**（第36図）

調査区の西側を、第25号溝から約４ｍ離れて平行に伸びる溝である。調査時は第２号溝と呼称した。北側は調査区の端から約３ｍ手前で途切れており、南側は調査区外へ続いている。溝の途中、北端から約４ｍの箇所に、幅50cmほどの土橋状の掘り残し部分がある。確認面での幅は約80cm、断面形状は逆台形で、確認面から底面までの深さは約30cm、底面幅は約50～60cmである。遺物は土師器の小片が出土したが、図示できるものはなかった。遺物及び覆土の様相、第25号溝との関係から、平安時代以降の遺構であると推定されるが、特定はできなかった。

**３　ピット群**（第40図）

第96号住居跡の北西側で、遺構外から合計７基のピットが確認された。位置は第40図、深さ等は第６表のとおりである。いずれも遺物は出土せず、時期等は不明である。

根切遺跡




第40図　ピット群

第６表　ピット計測表

| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|
| 1 | 40 | 26 | 29 |
| 2 | 38 | 32 | 57 |
| 3 | 58 | 39 | 31 |
| 4 | 36 | 24 | 26 |
| 5 | 32 | 30 | 33 |
| 6 | 80 | 60 | 28 |

単位：cm

# 第４部

# 大北遺跡（第10～13次調査）

## 第Ⅰ章　調査の契機と経過

### 第１節　調査の契機

ここに報告する４件の発掘調査は、平成23年２月から平成24年４月にかけて実施した発掘調査である。４ヶ所の調査地点は近接し、検出した遺構・遺物も相互に関連するものであった。記録保存に要した原因は、個別のものであったが、こうした事情から、ここでは４ヶ所の調査を一括して報告するものである。

なお４ヶ所の調査地点を含む範囲を対象とした別計画に伴い平成20年10月に確認調査が実施済みであった。

**1　大北遺跡**　2　井沼方遺跡　3　井沼方南遺跡　4　大間木宮前遺跡　5　附島遺跡　6　西谷遺跡　7　大間木内谷遺跡　8　中尾中丸南遺跡　9　中尾緑島東遺跡　10　中尾緑島遺跡

第41図　遺跡の位置

（第10次調査）

平成23年２月、大北遺跡の範囲内のさいたま市緑区東浦和３丁目14番１における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同地は別計画に伴う確認調査によって遺構・遺物の所在が確認済みであり、縄文時代の住居跡や遺物包含層、縄文土器などの遺構・遺物の所在を確認した。遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画

では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

（第11次調査）

平成23年４月、大北遺跡の範囲内のさいたま市緑区東浦和３丁目14－29における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同地は別計画に伴う確認調査によって遺構・遺物の所在が確認済みであり、縄文時代の住居跡や遺物包含層、縄文土器などの遺構・遺物の所在を確認している。遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、建物建築部分については保護層が確保されるが、切り下げが行われる駐車場部分については、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

（第12次調査）

平成23年４月、大北遺跡の範囲内のさいたま市緑区東浦和３丁目14－25における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同地は別計画に伴う確認調査によって遺構・遺物の所在が確認済みであり、縄文時代の住居跡や遺物包含層、縄文土器などの遺構・遺物の所在を確認した。遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

（第13次調査）

平成24年４月、大北遺跡の範囲内のさいたま市緑区東浦和３丁目14－28における個人専用住宅建設計画に伴い、工事主体者よりさいたま市教育委員会に宛て、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同地は別計画に伴う確認調査によって遺構・遺物の所在が確認済みであり、縄文時代の住居跡や遺物包含層、縄文土器などの遺構・遺物の所在を確認した。遺跡の保存についての協議を行ったが、今回の工事計画では、建物建築部分については保護層が確保されるが、切り下げが行われる駐車場部分については、確認された遺跡に影響が及ぶことが確実であり、計画の変更も困難であるとのことであった。このことから、埋蔵文化財の現状での保存が不可能な範囲を対象として、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、工事主体者からの依頼により、さいたま市教育委員会が実施した。

## 第２節　調査の方法と経過

（第10次調査）

第10次調査は、平成23年２月18日から３月11日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不

可能である個人住宅建設部分である。排土処理の都合上、全体を南北の２区に分割して調査を行うこととし、北半分を１区、南半分を２区とした。調査は１区より着手し、１区の調査完了後に２区の調査を実施した。

調査機材は作業に先立って現地に搬入した。２月18日に重機を用いて１区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、２月21から３月３日まで実施した。１区の調査完了後、３月３日に重機を用いて１区の埋戻し及び２区の表土除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、３月４日から３月11日まで実施した。２区の調査完了後、３月11日に重機を用いて２区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

（第11次調査）

第11次調査は、平成23年４月14日から４月21日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分のうち駐車場となる部分である。

４月14日に機材搬入、重機を用いて調査区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、４月15日から21日まで実施した。調査完了後、４月21日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

（第12次調査）

第12次調査は、平成23年４月21日から４月28日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分である。調査機材は第11次調査から引き続き実施するため、その機材をそのまま現地に搬入した。

４月21日に重機を用いて調査区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、４月22日から27日まで実施した。調査完了後、４月28日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

（第13次調査）

第13次調査は、平成24年４月18日から４月27日にかけて実施した。調査の対象は、遺跡の現状保存が不可能である個人住宅建設部分のうち、駐車場となる部分である。

４月18日に機材搬入、重機を用いて調査区の表土層の除去を行った。その後人力で遺構の範囲の確認を行い、遺構調査を実施した。遺構の測量は平板測量により、４月18日から20日まで実施した。調査完了後、４月27日に重機を用いて調査区の埋戻しを行い、機材を撤収し、現地における発掘調査の作業を終了した。

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

大北遺跡は、さいたま市の南東部、緑区東浦和３丁目から大字中尾に所在する。JR武蔵野線東浦和駅か

ら北西に約600ｍの位置にあり、ＪＲ武蔵野線の南まで続く最大幅300ｍほどの樹枝状台地上にあり、両側は谷底低地に向かって傾斜する。遺跡内の標高は約13ｍから約14ｍである。近年では、区画整理の進捗及び立地上駅から近距離であるため、住宅の建設の増加により市街化が進んでいる。

本遺跡のある浦和支台南端部は、開析谷を挟んで何本もの樹枝状台地が南北方向に並列している。各台地上には多くの遺跡が存在し、それらの遺跡では過去に多くの調査が実施されている。時代は旧石器時代から平安時代にわたり、各時期の遺構・遺物が発見されている。

本遺跡の調査は、昭和53年以来９回行われた（註１）。今回は第10次から第13次調査となる（第２図Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ）。

これまでの調査区は、遺跡のほぼ全域に分散している。縄文時代早～後期の土器・ファイヤーピット・住居跡、弥生時代中期の住居跡などが発見されており、今回の調査においては縄文時代早期条痕文系土器が多く検出されている。

註１　９回の調査は以下のとおりである。

・青木義脩・岩井重雄・小倉均　1979『大北遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第９集（第２図Ａ）

・青木義脩・岩井重雄・小倉均　1981『大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第15集（第２図１～９）

・青木義脩・高山清司・小倉均　1982『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集（第２図10・11）

・青木義脩・小倉均　1983年『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第25集（第２図12～14）

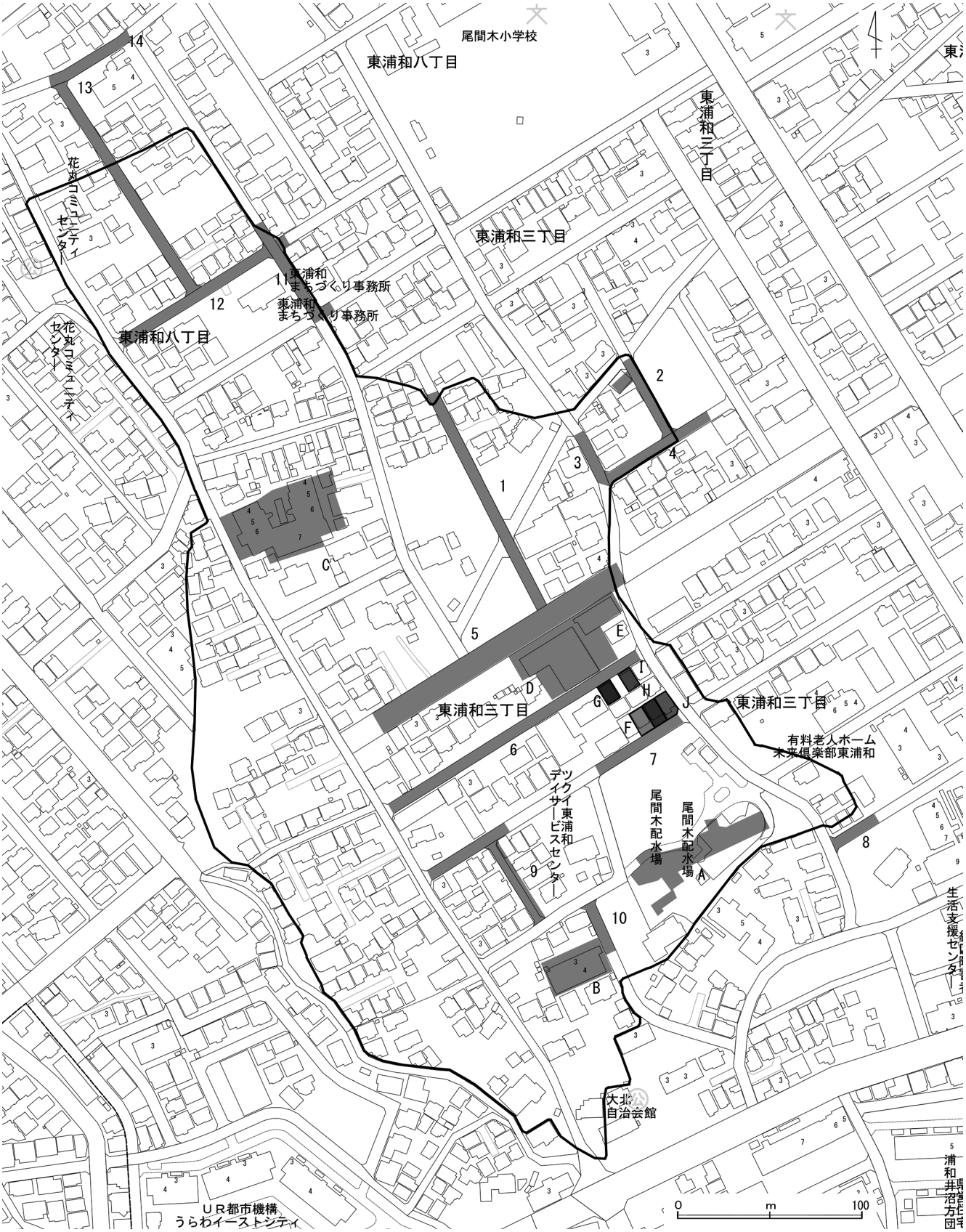
・高山清司・大塚和男・栁田博之　1989『大北遺跡発掘調査報告書（第５次）』浦和市遺跡調査会報告書第120集（第２図Ｂ）

・青木義脩・栁田博之・山田尚友・藤井浩　1992『大北遺跡発掘調査報告書（第６次）』浦和市遺跡調査会報告書第156集（第２図Ｃ）

・小倉均・近藤行仁・豊田和夫　2001『大北遺跡発掘調査報告書（第７次）』浦和市遺跡調査会報告書第299集（第２図Ｄ）

・岩井昭子・青木義脩　2015『大北遺跡発掘調査報告書（第８次）』さいたま市遺跡調査会報告書第105集（第２図Ｅ）

・関根俊雄・橋本玲未・内田裕也・小川舞子 2016『岩槻城跡（二の丸第７地点）・土呂陣屋跡（Ｕ・Ｖ・Ｗ地点）・大北遺跡（第９次調査）・側ヶ谷戸貝塚（第７次調査）』さいたま市内遺跡発掘調査報告書第15集（第２図Ｆ）




第42図　発掘調査の位置

## 第２節　調査区の概要

（第10次調査）

調査範囲は47㎡を対象とし、ローム層上面を遺構確認面とした。

遺構は、縄文時代の遺物包含層のほかに縄文時代の土坑６基、ピット38基検出した。

遺物は、縄文時代早期から中期の土器や石器が、18リットル入り遺物収納容器１箱分出土した。

（第11次調査）

調査範囲は20㎡を対象とし、ローム層上面を遺構確認面とした。

遺構は縄文時代の中期以前で詳細には時期の特定のできなかった住居跡１基検出した。また縄文時代の遺物包含層、土坑５基、ピット19基検出した。検出した住居跡は調査区外にわたって広がっており、全体を調査していない。

遺物は、縄文時代早期から後期の土器や石器が、18リットル入り遺物収納容器１箱分出土した。

（第12次調査）

調査範囲は10㎡を対象とし、ローム層上面を遺構確認面とした。

遺構は縄文時代の土坑３基、ピット９基検出した。

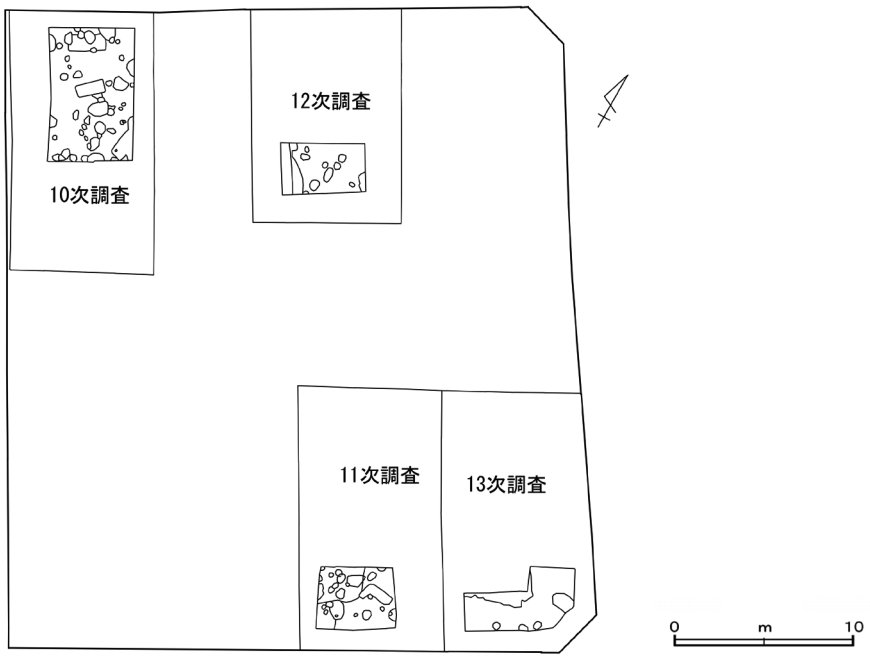
遺物は、縄文時代早期から中期の土器や石器が、18リットル入り遺物収納容器１箱分出土した。

（第13次調査）

調査範囲は19.4㎡を対象とし、ローム層上面を遺構確認面とした。

遺構は縄文時代の遺物包含層のほかに縄文時代の土坑４基検出した。

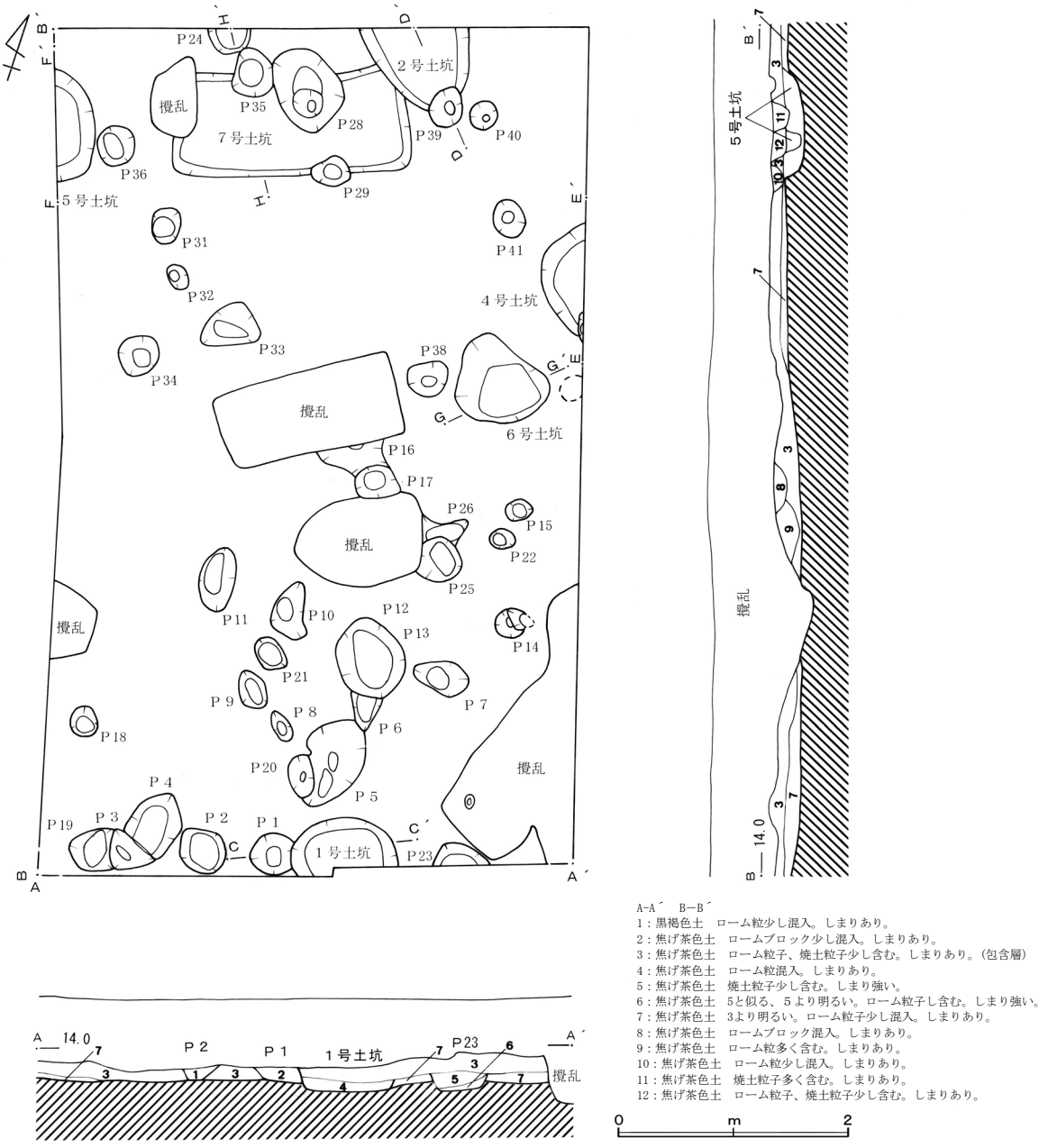
遺物は、縄文時代早期から後期の土器や石器が、18リットル入り遺物収納容器１箱分出土した。




第43図　調査区の位置

# 第Ⅲ章　第10次調査の遺構と遺物

今回の調査区の基本土層は、地表面下50～60㎝までが表土（第44図）、その下で10～20㎝の遺物包含層（第44図）が確認され、さらにその下でローム面が確認された。遺構は土坑６基、ピット38基が検出された。




第44図　全測図及び全土層図

## 第１節　　遺構

### １　土坑

**第１号土坑**（第45図）

調査区中央部南側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを呈し、南北46cm、東西97cm、確認面からの深さは14.5cmである。底面は平坦である。

**第２号土坑**（第45図）

調査区北側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形プランを示すものと思われ、南北76cm、東西96cm、確認面からの深さは13.8cmである。底面は平坦である。

**第４号土坑**（第45図）

調査区東側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを呈し、南北1m4cm、東西34cm、確認面からの深さは9.7cmである。

**第５号土坑**（第45図）

調査区西側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを呈し、南北1mcm、東西34cm、確認面からの深さは15.7cmである。

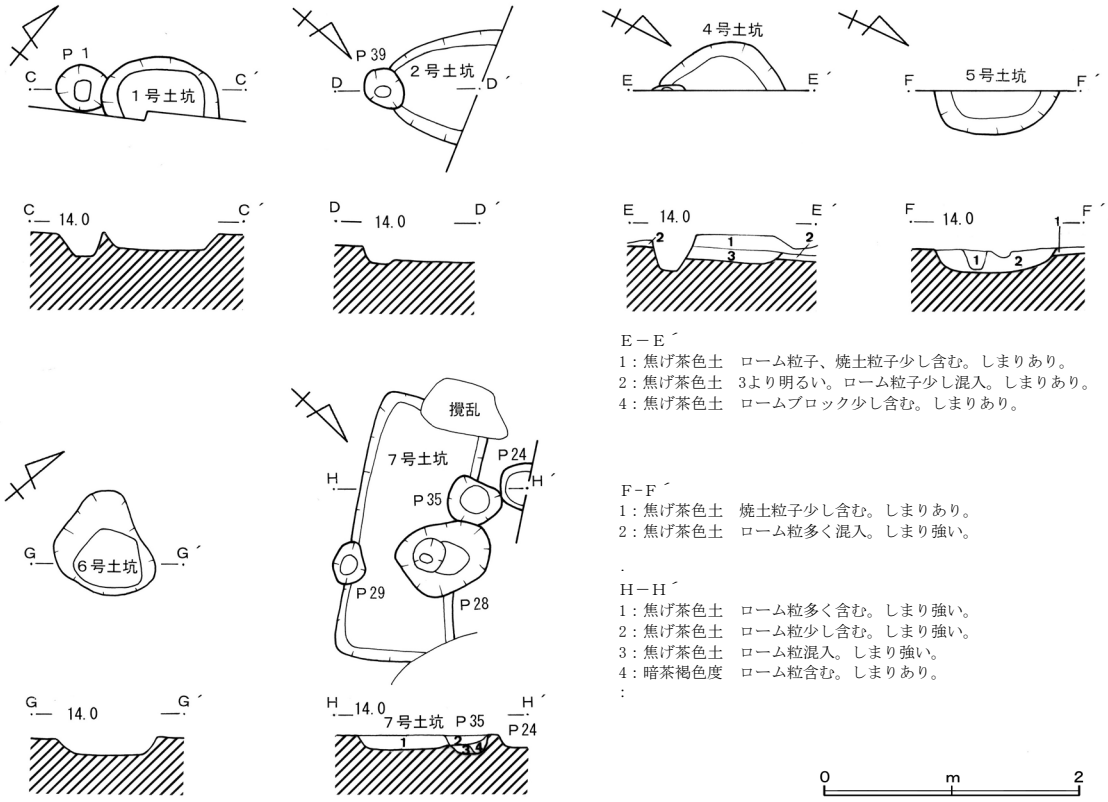
**第６号土坑**（第45図）

調査区中央東側で検出したもので、楕円形のプランを示すものと思われ、南北80cm、東西84cm、確認面からの深さは15.3cmである。

**第７号土坑**（第45図）

調査区中央北側で検出したもので、隅丸方形のプランを呈し、南北95cm、東西2m12cm、確認面からの深さは7.8cmである。第２号土坑及びピット３基により切られている。一部攪乱されていた。

なお、第３号土坑は欠番である。




第45図　土坑

## ２　ピット

今回の調査では、遺構外のピットを38基検出した。これらのピットは土坑内にまたがっているものや単独で確認されているもの等、調査区内を広範囲にわたって確認された。

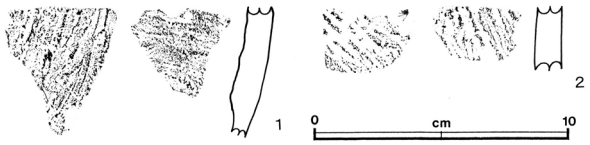
第７表　ピット計測表　（単位：cm）

| No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 40 | 36 | 17.5 | 15 | 25 | 19 | 18.5 | 29 | 35 | 27 | 17 |
| 2 | 45 | 37 | 11.5 | 16 | 60 | 22 | 24.5 | 30 | 欠番 | | |
| 3 | 45 | 36 | 22.5 | 17 | 40 | 30 | 48.5 | 31 | 31 | 30 | 14 |
| 4 | 54 | 42 | 9 | 18 | 25 | 25 | 7 | 32 | 25 | 18 | 7 |
| 5 | 86 | 54 | 34 | 19 | 40 | 35 | 11 | 33 | 52 | 37 | 13.5 |
| 6 | 30 | 30 | 5.7 | 20 | 42 | 21 | 13.5 | 34 | 38 | 21 | 9 |
| 7 | 50 | 30 | 10.5 | 21 | 35 | 30 | 11.5 | 35 | 44 | 38 | 15.8 |
| 8 | 30 | 16 | 5.5 | 22 | 24 | 18 | 12 | 36 | 35 | 35 | 18.7 |
| 9 | 45 | 28 | 9.5 | 23 | 53 | 20 | 12 | 37 | 欠番 | | |
| 10 | 53 | 30 | 9 | 24 | 55 | 30 | 25 | 38 | 37 | 34 | 10 |
| 11 | 58 | 32 | 11.5 | 25 | 45 | 42 | 7 | 39 | 45 | 29 | 32.3 |
| 12 | 74 | 60 | 9 | 26 | 42 | 30 | 6.5 | 40 | 25 | 25 | 30 |
| 13 | 74 | 60 | 9 | 27 | 欠番 | | | 41 | 46 | 30 | 28.5 |
| 14 | 32 | 26 | 31 | 28 | 75 | 70 | 28.8 | | | | |

## 第２節　遺物

### １　土坑出土遺物（第46図）

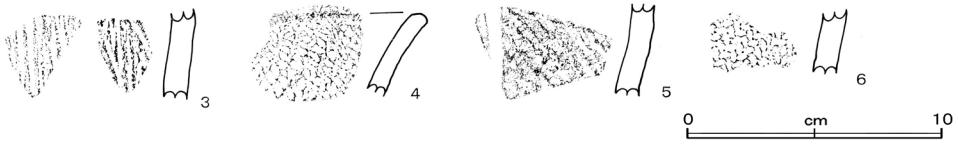
１は第２号土坑から、２は第６号土坑から出土した。１・２ともに縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。深鉢形土器の胴部と思われ、胎土に繊維を含むが概して少ない。２は条痕文の他に円形工具による刺突文らしきものも見られる。




第46図　土坑出土遺物

### ２　ピット出土遺物（第47図）

３は胴部破片で内外面に条痕文が見られる。縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するものと思われる。４は口縁部破片で縄文が施文される。縄文時代前期関山式と思われる。５は胴部破片で縄文と沈線文が施文されている。縄文時代中期加加曽利Ｅ式と思われる。６は胴部破片で縄文が施文される。縄文時代前期関山式と思われる。

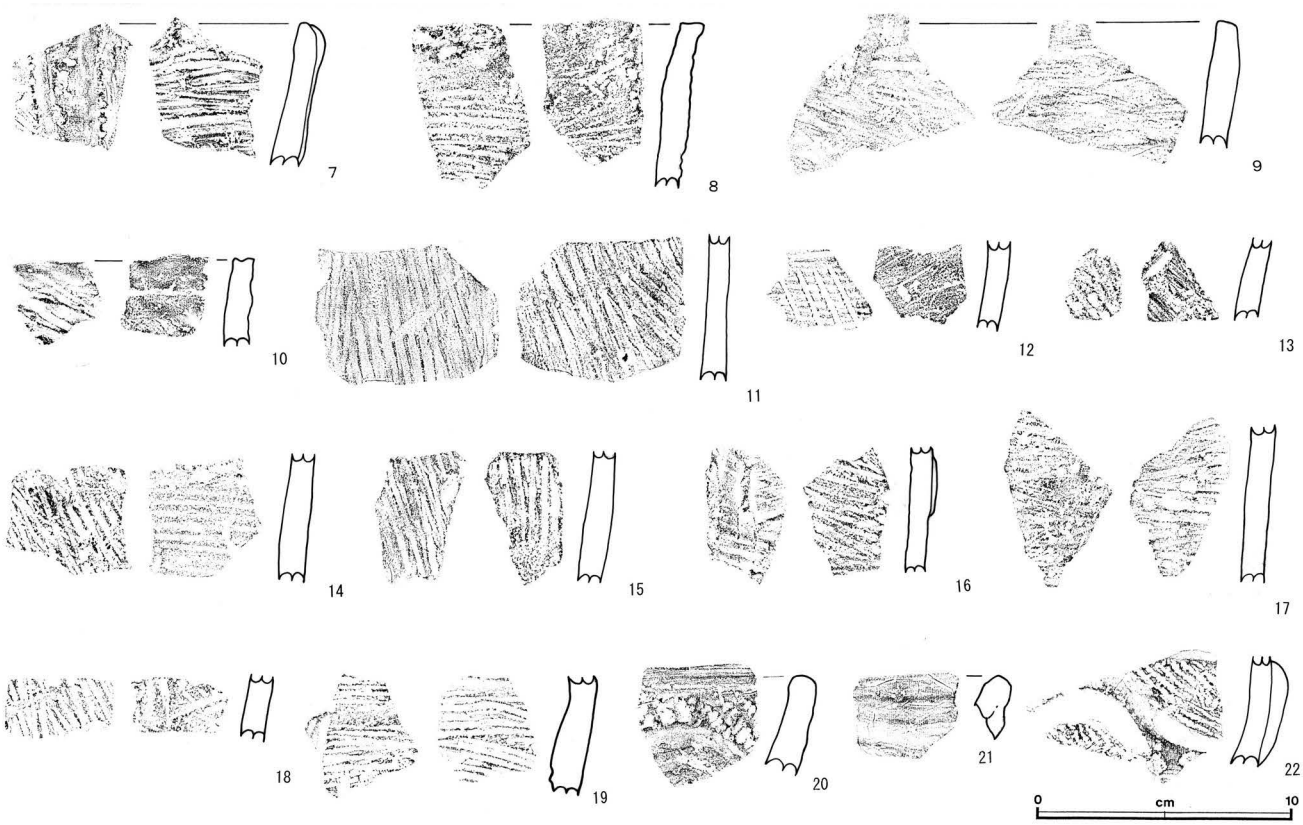



第47図　ピット出土遺物

### 3　包含層出土遺物（第48図）

7～19は縄文時代早期後葉の条痕文系土器である。すべて深鉢形土器の破片である。7～10は口縁部破片で、7は口縁部が波状となり微隆起線文がある。8は口唇に刻みが見られる。内面の磨滅が目立つ。10は口唇部に円形の工具で等間隔に押圧するため、小波状になる。11～19は胴部破片で、12は条痕文の他に沈線文が見られる。16には条痕文の他に微隆起線文が見られる。

20～22は縄文時代中期加曽利Ｅ式の土器である。20・21は口縁部破片で、20は口縁下に沈線と縄文が施文されている。21は口縁下に横方向の太い沈線が施されている。22は深鉢形土器胴部破片で、渦巻き状と思われる隆帯が付いている。

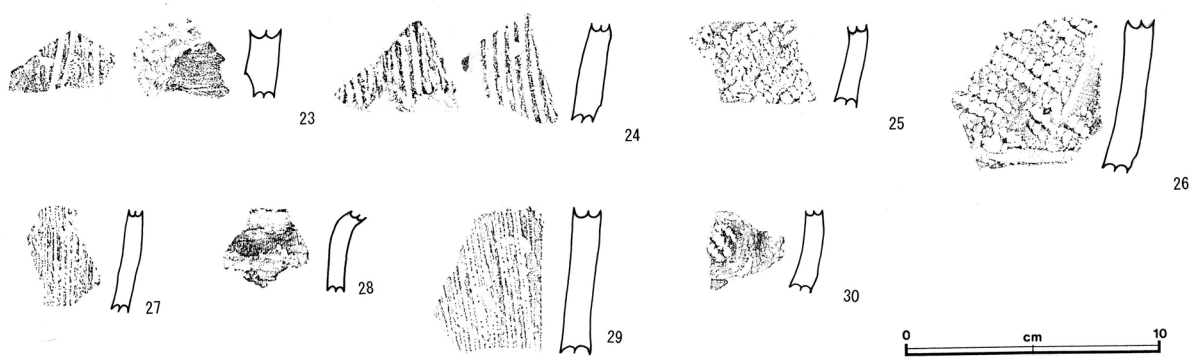



第48図　包含層出土遺物

### 4　遺構外出土遺物（第49図）

23・24は表土中より採取した胴部破片である。両方とも縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。条痕文は肋脈のある貝殻により施文されている。25は胴部破片で縄文が施文される。縄文時代前期関山式と思われる。26から30までの土器はすべて縄文時代中期加曽利Ｅ式の土

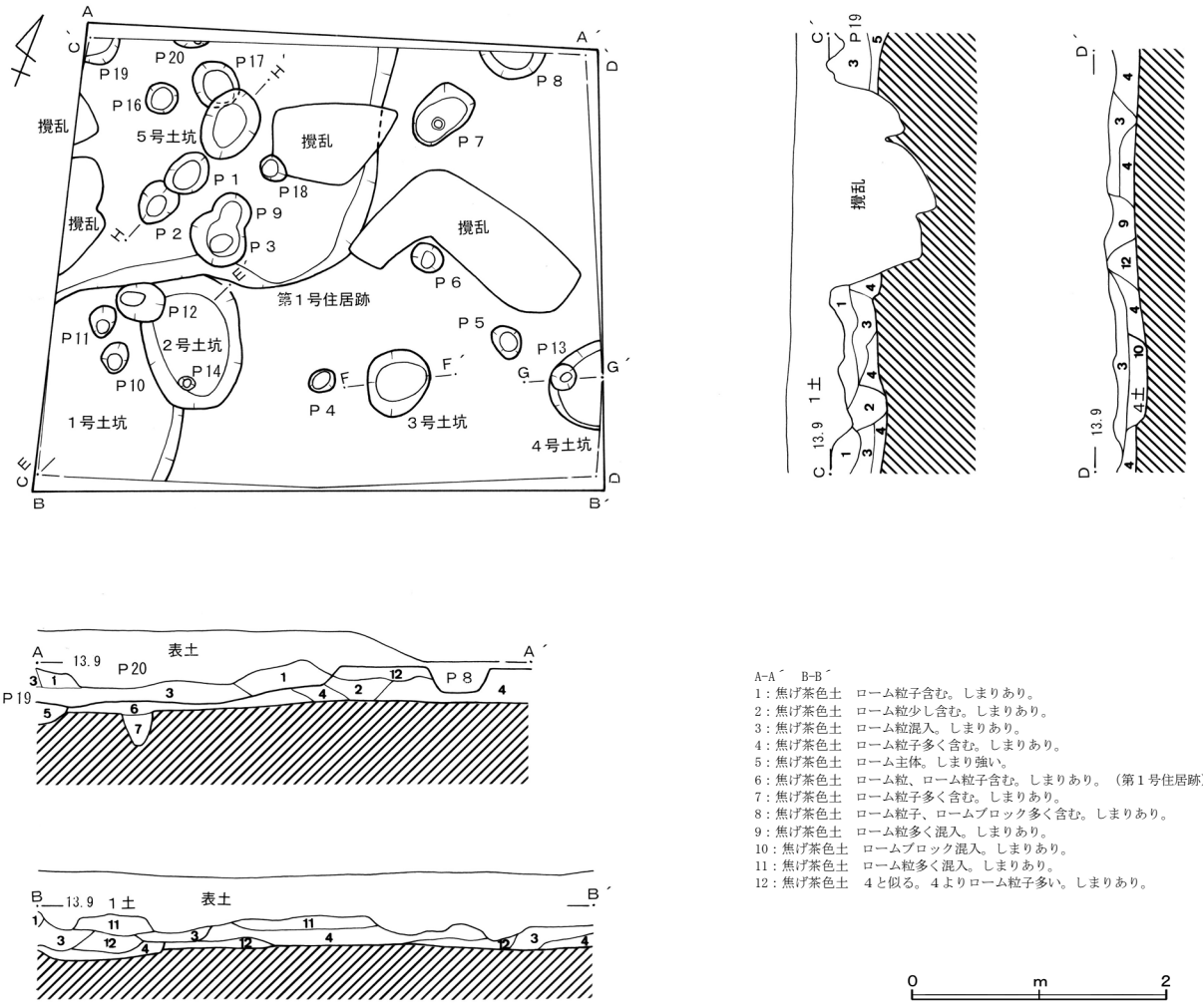
器と思われる。26から28までは攪乱中から、29・30は表土中から採取したもので、すべて胴部の破片である。




第49図　遺構外出土遺物

# 第Ⅳ章　第11次調査の遺構と遺物

今回の調査区の基本土層（第50図）は、地表面下40～50㎝までが表土、その下で20㎝の遺物包含層が確認され、さらにその下でローム面が確認された。遺構は土坑５基、ピット20基が検出された。




第50図　全測図及び全土層図

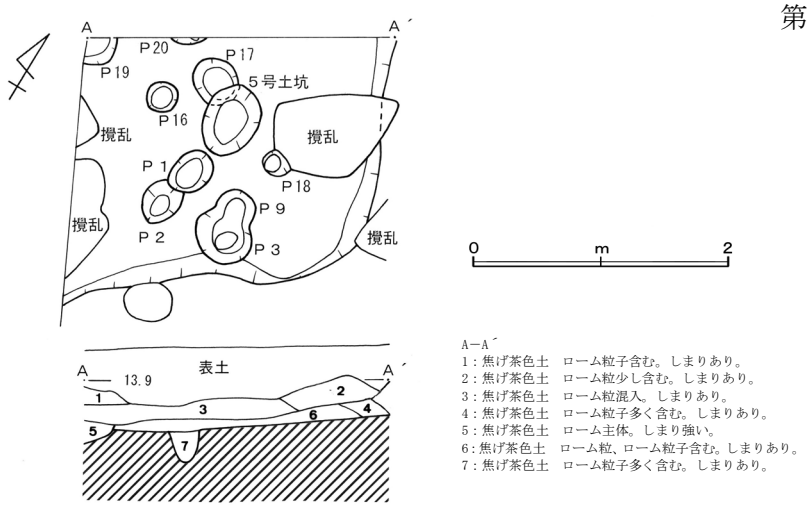
## 第１節　　遺構

### １　住居跡

**第１号住居跡**（第51図）

調査区西側で検出した。一部調査区域外に伸びる。第１号土坑・第２号土坑と重複し、住居跡の方が新しい。平面形は不整形である。第５号土坑は住居跡内から出土したが、第１号住居跡との新旧は不明である。また、ピットが８基確認されたが、第１号住居跡との関係性は不明である。現行値では長径2m46㎝、短径2m25㎝を図る。確認面からの深さは40㎝である。床面は平坦で、炉は検出されなかった。遺物の量は少ないものの縄文時代早期の条痕文系土器が出土している。そのため、当該住居跡は縄文時代早期の遺構

と思われる。




第51図　第１号住居跡

第８表　第１号住居跡内ピット計測図

| No. | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|
| 1 | 38 | 29 | 15.1 |
| 2 | 35 | 31 | 7.6 |
| 3 | 48 | 38 | 11.7 |
| 9 | 48 | 38 | 8.1 |
| 16 | 26 | 25 | 12.7 |
| 17 | 40 | 38 | 13.5 |
| 18 | 24 | 20 | 21.8 |
| 19 | 31 | 22 | 19 |
| 20 | 30 | 15 | 23 |

（単位：cm）

## ２　土坑

**第１号土坑**（第52図）

調査区南西側で検出したもので、その大半は調査区域外に伸びる。第１号住居跡・第２号土坑と重複し、両遺構に切られているので、第１号住居跡・第２号土坑より古い。楕円形のプランを示すものと思われ、南北1m53cm、東西1m12cm、確認面からの深さは18.3cmである。底面は平坦である。

**第２号土坑**（第52図）

調査区南西側で検出したもので、第１号住居跡・第１号土坑と重複し、第１号土坑を壊して構築され第１号住居跡が最後に形成されたと思われる。楕円形のプランを呈し、南北1m8cm、東西79cm、確認面からの深さは10.2cmである。底面は平坦である

**第３号土坑**（第52図）

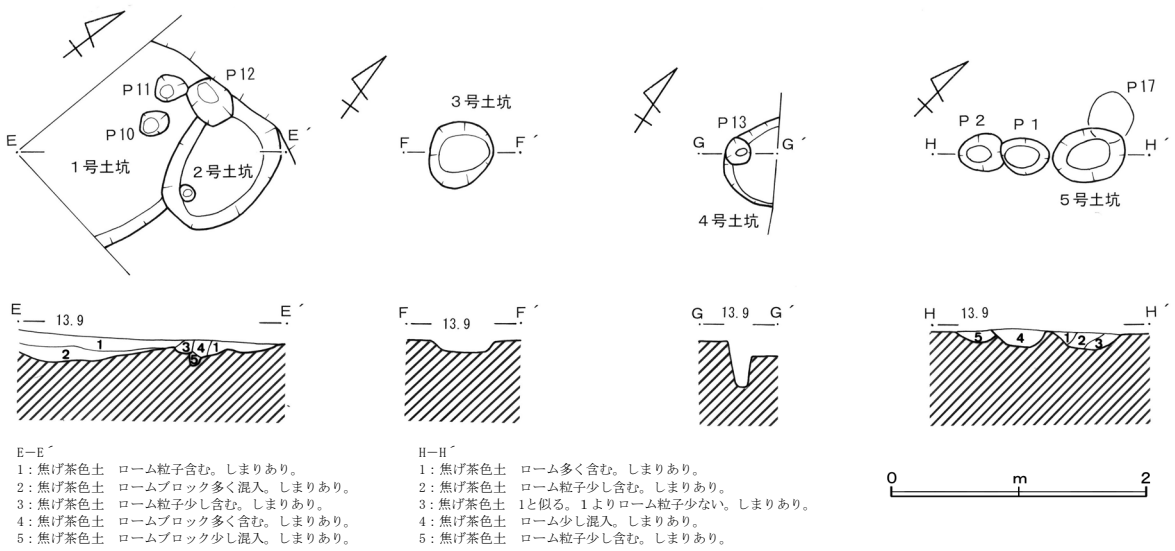
調査区南東側で検出した。ほぼ円形のプランを呈し、南北55cm、東西48cm、確認面からの深さは7.9cmである。

**第４号土坑**（第52図）

調査区南東側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを示すものと思われ、南北7m、東西44cm、確認面からの深さは14.5cmである。

**第５号土坑**（第52図）

第１号住居跡覆土中で検出した。楕円形のプランを示すものと思われ、南北56cm、東西43cm、確認面からの深さは16.5cmである。




第52図　土坑

### 3　ピット

今回の調査では、第１号住居跡の９基以外で調査区内でピットを10基検出した。ピットからは遺物は出土していないため、時期は不明である。

第９表　ピット計測表

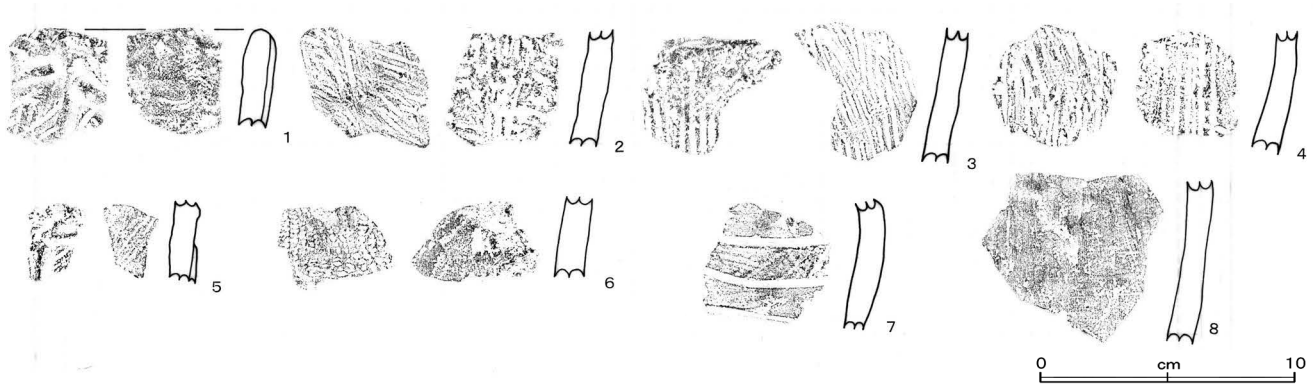
| No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 25 | 18 | 14.6 | 7 | 54 | 35 | 20.2 | 11 | 27 | 23 | 12.4 | 14 | 15 | 11 | 13.8 |
| 5 | 29 | 23 | 12.7 | 8 | 50 | 22 | 19.2 | 12 | 40 | 32 | 56.2 | 15 | 欠番 | | |
| 6 | 28 | 25 | 15.9 | 10 | 25 | 20 | 11 | 13 | 20 | 13 | 23 | | | | |

（単位：cm）

## 第２節　　遺物

### 1　住居跡出土遺物（第53図）

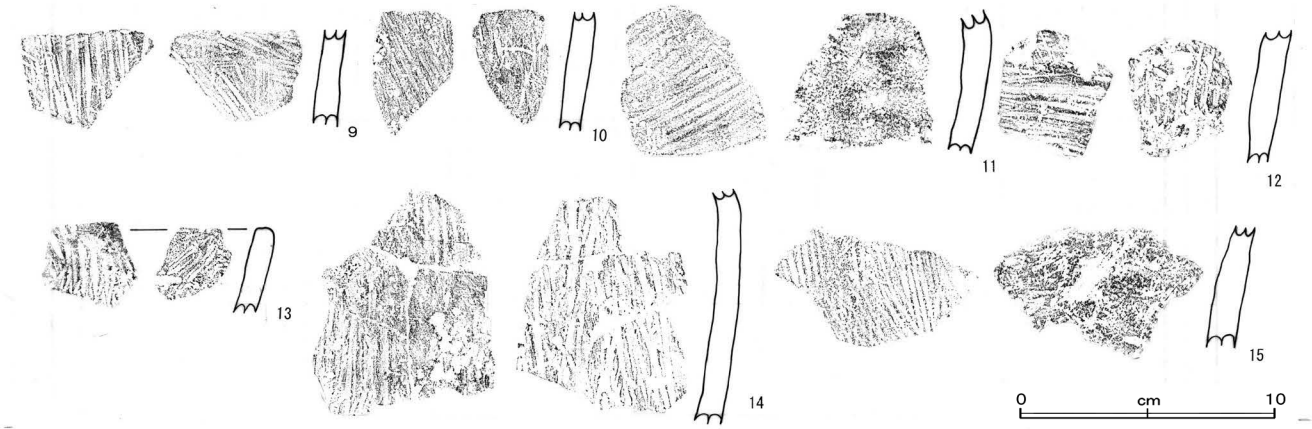
１から５は縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。これらは深鉢形土器の胴部と思われる。１は口唇に刻みがあり、微隆起線文が施されている。２及び３は深鉢形土器の胴部の破片である。４は波状内面に炭化物が付着している。５は微隆起線文が施されている。６は縄文時代前期羽状縄文系の深鉢形土器の胴部破片である。単節縄文が施されており、繊維を含む。７及び８は縄文時代後期初頭の称名寺式の深鉢形土器の胴部破片である。７は磨消縄文が地紋で上下に沈線文が見られる。８は無文である。




第53図　第１号住居跡出土遺物

**２　土坑出土遺物**（第54図）

９から15は縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。これらは深鉢形土器の胴部と思われる。９から11は第１号土坑内出土遺物、12は第２号土坑出土遺物、13から15は第５号土坑の出土遺物である。




第54図　土坑出土遺物

**３　ピット出土遺物**（第55図）

16及び17は縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属し、深鉢の胴部破片で、内外面に条痕文が見られる。

第55図　ピット出土遺物

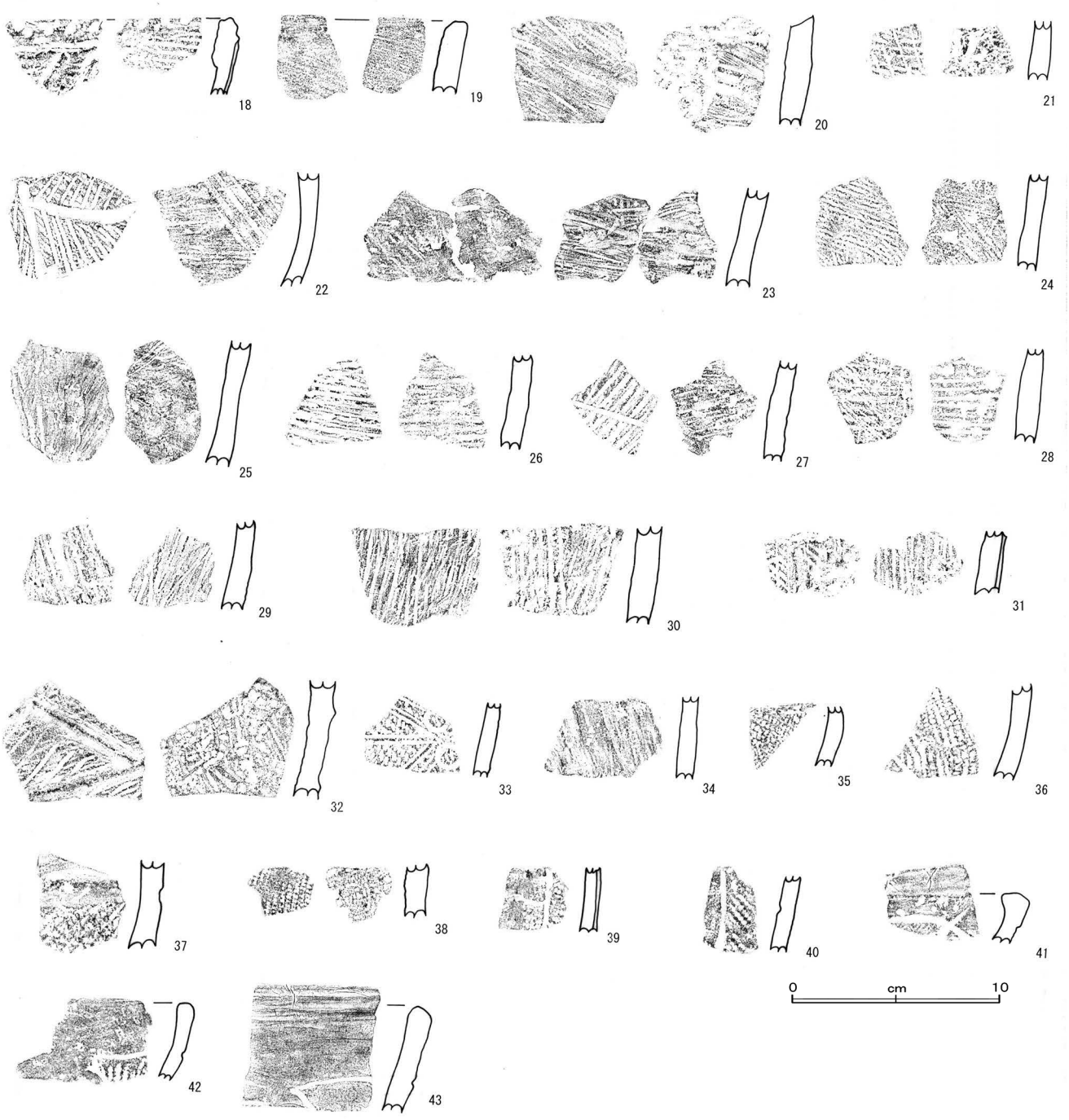
**４　包含層出土遺物**（第56図）

18～32は縄文時代早期後葉の条痕文系土器である。すべて深鉢形土器の破片と思われる。18～20は口縁部破片で、18は口唇部に刻みが見られ、条痕文の上に微隆起線文がある。21～32は胴部破片で、21・31は内面の磨滅が目立つ。22・27のように条痕文のほかに沈線文が見られるものもあり、22は太い沈線による

区画と集合した沈線文が見られる。32は条痕文のほかに微隆起線文、沈線文が見られ、微隆起線文による区画内に沈線文が施文されている。33は縄文時代前期諸磯式の深鉢胴部の破片である。

34～40は縄文時代中期の土器である。34～36は縄文時代中期加曽利Ｅ式の土器の胴部破片であり、35・36は区画文と縄文が施文され、37は沈線文が見られる。38は縄文が施されている。39・40は縄文のほかに沈線による区画文が見られる。

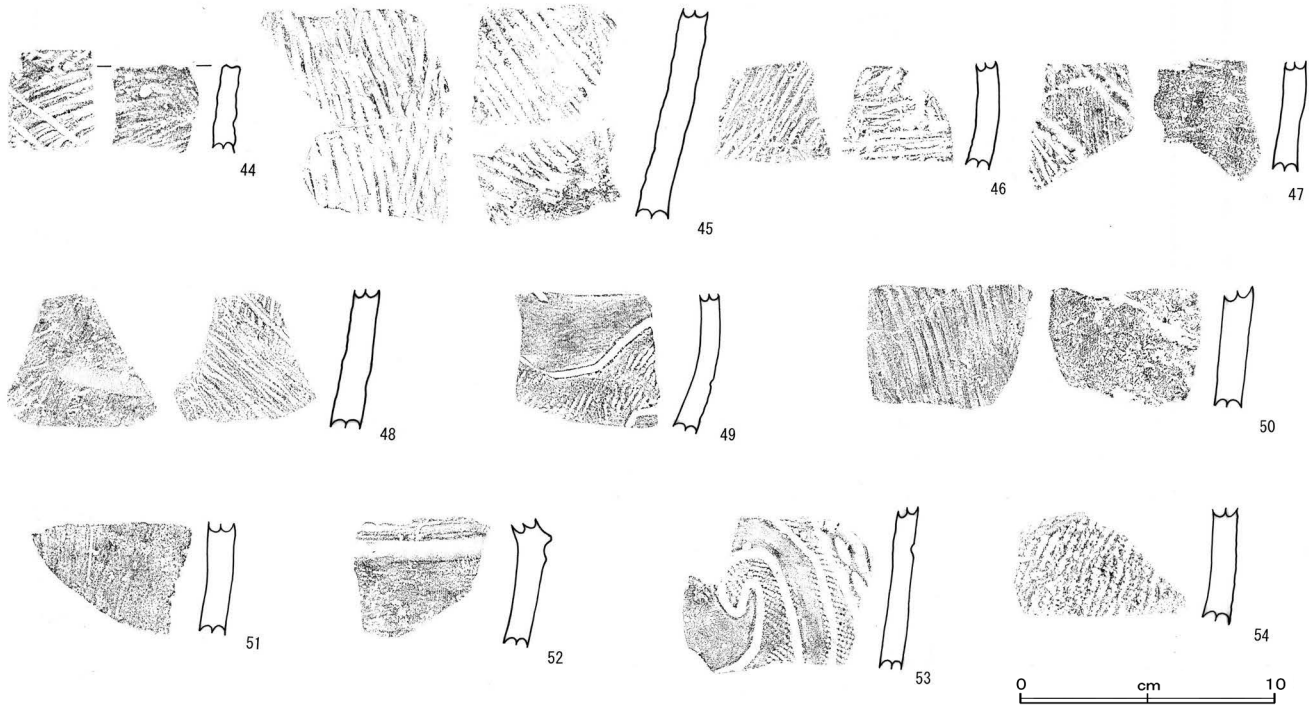
41～43は口縁部の破片で41・42は沈線による区画内に縄文が施文されている。縄文時代後期初頭称名寺式と思われる。




第56図　包含層出土遺物

## ５　遺構外遺物（第57図）

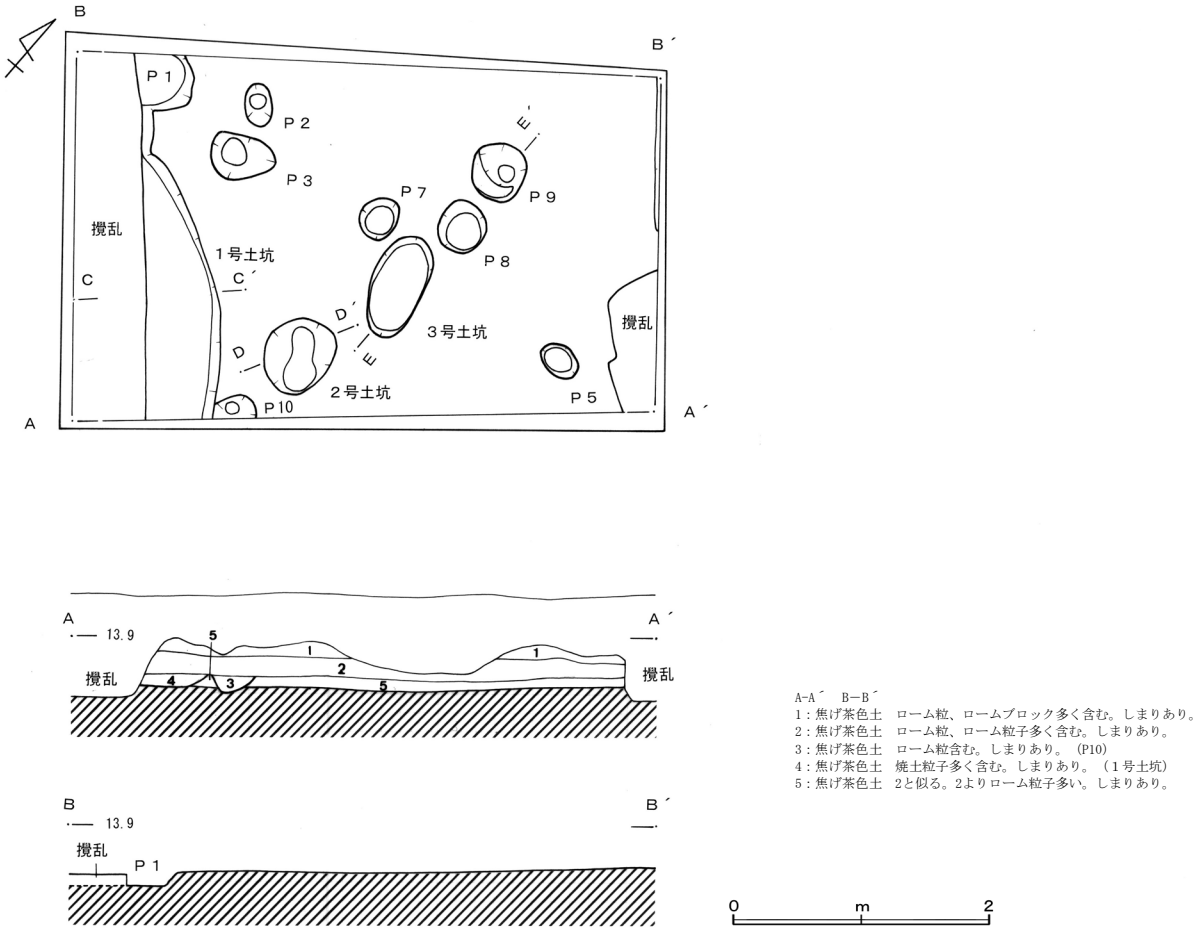
44と45は遺構精査中に出土した土器である。縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。深鉢形土器の胴部と思われ、44は条痕文の施文後に沈線文が施文されている。46～54は表採された土器である。46～48及び50は縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属する胴部の破片で、48には条痕文に加え、微隆起線文が施文されている。49は沈線で区画されており、縄文時代後期初頭称名寺式と思われる。51は無文であるが49と同様に縄文時代後期の土器と考えられる。52は無文に隆帯がみられ、51と同様後期の土器と思われる。53は沈線により区画され、縄文と刺突のある隆帯が見られる。54は縄文が施されている。




第57図　遺構外出土遺物

# 第Ⅴ章　第12次調査の遺構と遺物

今回の調査区の基本土層は、地表面下40～60㎝までが表土、その下で10㎝の焦げ茶色土の遺物包含層（第58図）が確認され、包含層下で10㎝の焦げ茶色土の遺物包含層（第58図）、さらにその下でローム面が確認された。遺構は土坑３基、ピット８基が検出された。




第58図　全測図及び全土層図

## 第１節　　遺構

### １　土坑

**第１号土坑**（第59図）

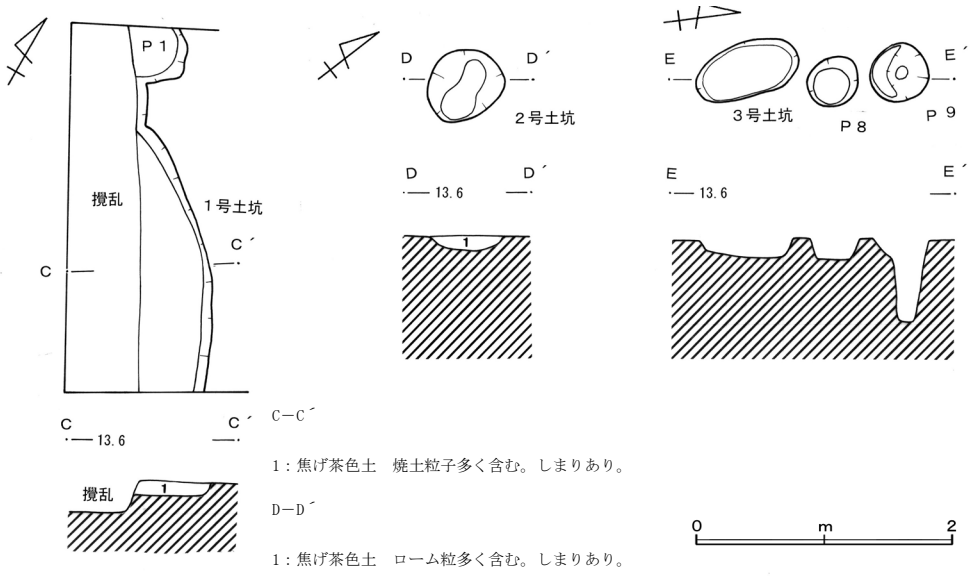
調査区南側で検出したもので、その大半は調査区域外に伸びる。南北方向に長い楕円形のプランを呈し、南北２ｍ、東西50㎝、確認面からの深さは15㎝である。底面は平坦である。

**第２号土坑**（第59図）

調査区中央部東側で検出したもので、円形のプランを呈し、径約50㎝、確認面からの深さは15㎝である。底面は平坦である

**第３号土坑**（第59図）

調査区中央部で検出したもので、東西方向に長い楕円形のプランを呈し、南北85㎝、東西40㎝、確認面からの深さは15㎝である。




第59図　土坑

## 2　ピット

今回の調査では、遺構外のピットを８基検出した。３から黒曜石製の石鏃が出土。それ以外では遺物は出土していない。４と６は欠番となった。

第10表　ピット計測表

| No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 51 | 46 | 10.5 | 5 | 34 | 26 | 8.9 | 9 | 46 | 44 | 66.3 |
| 2 | 35 | 22 | 20.3 | 6 | 欠番 | | | 10 | 30 | 14 | 12.4 |
| 3 | 53 | 37 | 16.2 | 7 | 35 | 32 | 12.3 | | | | |
| 4 | 欠番 | | | 8 | 44 | 38 | 16.7 | | | | |

（単位：cm）

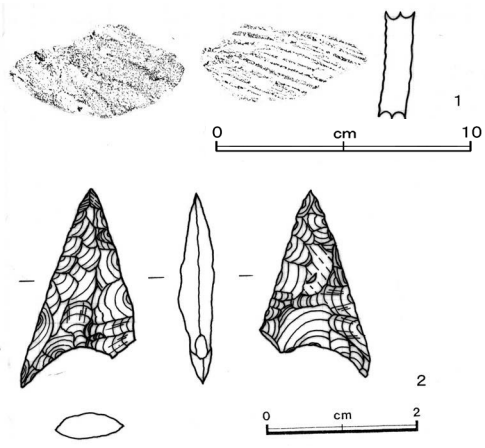
## 第２節　　遺物

### 1　土坑出土遺物（第60図）

１は第２号土坑から出土した。深鉢形土器の胴部縄文時代早期後葉の条痕文系土器で、内外面に条痕文が見られ、胎土に砂粒を含む。深鉢形土器の胴部と思われる。

### 2　ピット出土遺物（第60図）

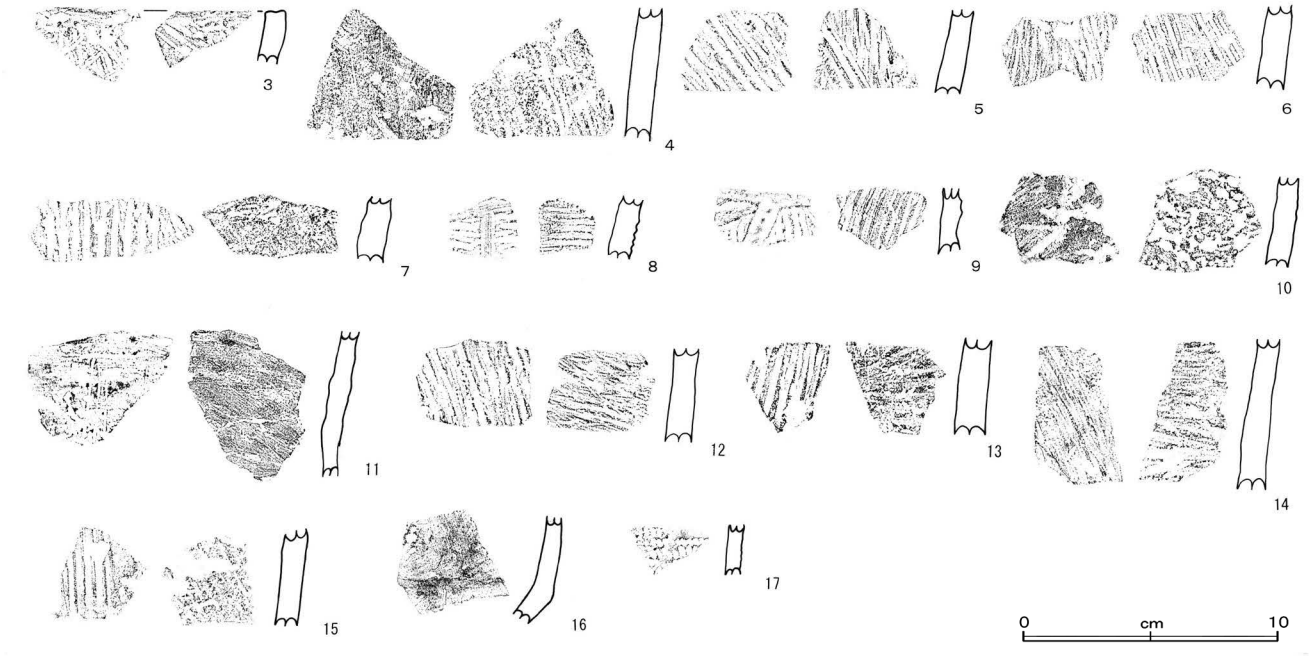
３号ピットから出土した黒曜石製の石鏃である。最大長24㎜最大幅14㎜、最大厚さ２㎜、重さ0.７ｇである。石鏃の脚部が一部欠損している。




第60図　土坑・ピット出土遺物

### ３　包含層出土遺物（第61図）

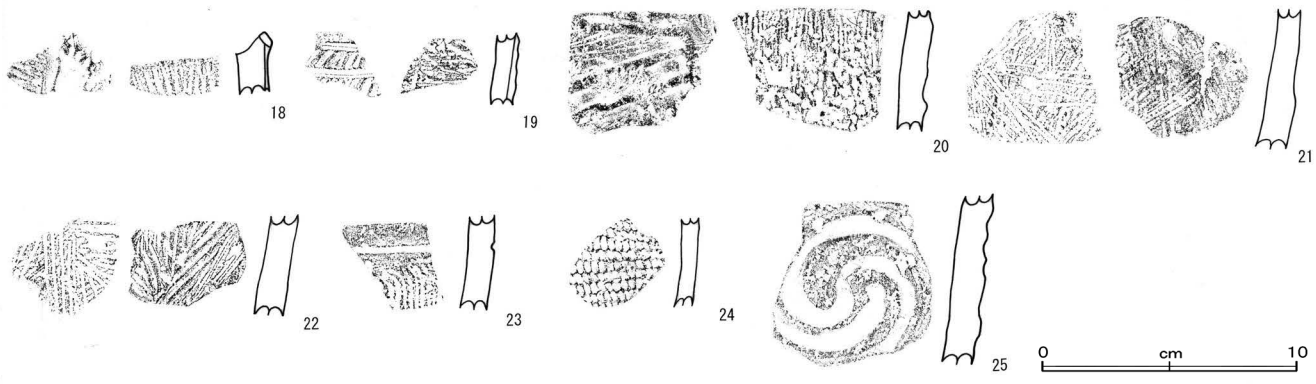
３～15は縄文時代早期後葉の条痕文系土器で、すべて深鉢形土器の胴部破片である。３～６・９～15は内外に条痕文のみを施文したものである。７・８には太い沈線による区画と集合した沈線文が見られる。９は内外面の磨滅が目立つ。10は胎土に繊維を多く含んでいる。14には浅い沈線文も見られる。16・17は縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式土器で深鉢形土器の破片であり、16は無文、17は縄文が施されている。




第61図　包含層出土遺物

### ４　遺構外出土遺物（第62図）

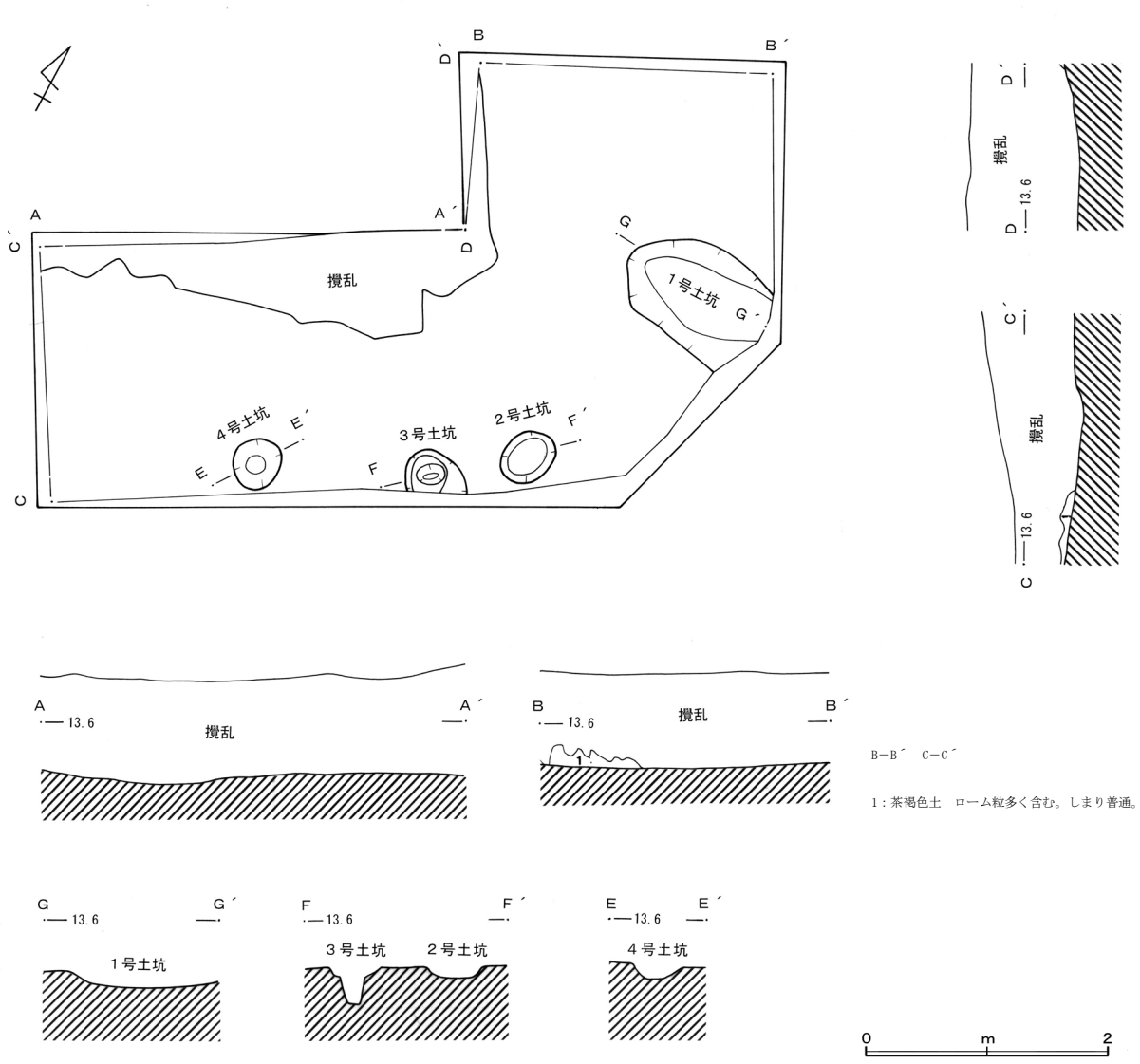
18～25は表採された土器である。18～22は縄文時代早期後葉の条痕文系土器で、18は深鉢口縁部の破片でそれ以外はすべて深鉢形土器の胴部破片である。19は沈線文が施文され、20は微隆起線文が施文されている。21は胎土に砂粒を含む。23～25は縄文時代中期加曽利Ｅ式の土器で深鉢形土器の胴部破片である。23は沈線文が横走し下部に縄文が施されている。24は縄文が施されている。25は渦巻文が施文されている。




第62図　遺構外出土遺物

# 第Ⅵ章　第13次調査の遺構と遺物

今回の調査区の基本土層は、地表面下50～90㎝までの大半が表土で攪乱を受けており、わずかに茶褐色土の覆土が存在し（第63図）、その下はローム面（第63図）が確認された。遺構は土坑４基が検出された。




第63図　全測図及び全土層図

## 第１節　　遺構

### １　土坑

**第１号土坑**（第63図）

調査区南東部で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。東西方向に長い楕円形のプランを呈し、南北90㎝、東西１ｍ30㎝、確認面からの深さは15㎝である。底面は平坦である。

**第２号土坑**（第63図）

調査区中央部南側で検出したもので、楕円形のプランを呈し、南北40㎝、東西50㎝、確認面からの深さは10㎝である。底面は平坦である

**第３号土坑**（第63図）

調査区中央部南側で検出したもので、一部調査区域外に伸びる。楕円形のプランを示すものと思われ、南北35㎝、東西50㎝、確認面からの深さは30㎝である。

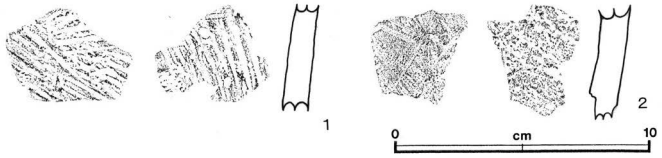
**第４号土坑**（第63図）

調査区中央部南西側で検出したもので、円形のプランを呈し、径約40㎝、確認面からの深さは10㎝である。底面は平坦である

## 第２節　　遺物

### １　土坑出土遺物（第64図）

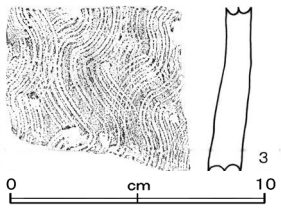
１は第１号土坑、２は第２号土坑から出土。縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属し、内外面に条痕文が見られる。深鉢形土器の胴部で、胎土に繊維を含む。１の内側の条痕文の上に沈線文が見られる。




第64図　土坑出土遺物

### ２　包含層出土遺物（第65図）

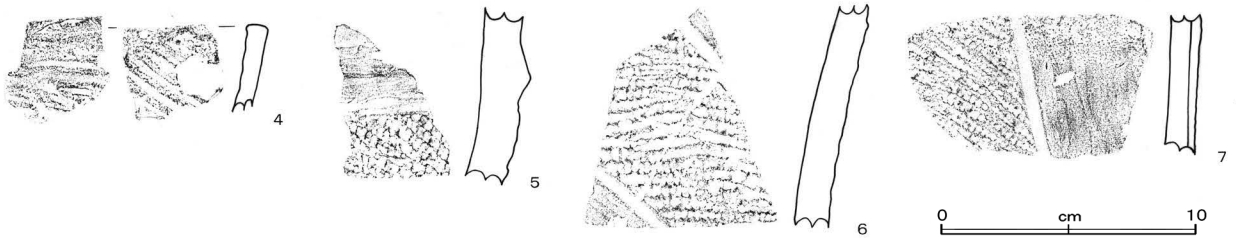
３は縄文時代中期の加曽利Ｅ式土器で、櫛歯状工具による波状文が施文されている。




第65図　包含層出土遺物

### ３　遺構外出土遺物（第66図）

４～７は表採された土器で、４は深鉢口縁部破片で縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属するもので、内外面に条痕文が見られる。５は深鉢胴部破片で、隆帯と縄文が施文されている。縄文時代中期加曽利Ｅ式のものと思われる。６は深鉢胴部破片で、沈線文と縄文が施文されており、７は胴部破片で、縄文と沈線文が施されている。６及び７は縄文時代後期初頭称名寺式と思われる。




第66図　遺構外出土遺物

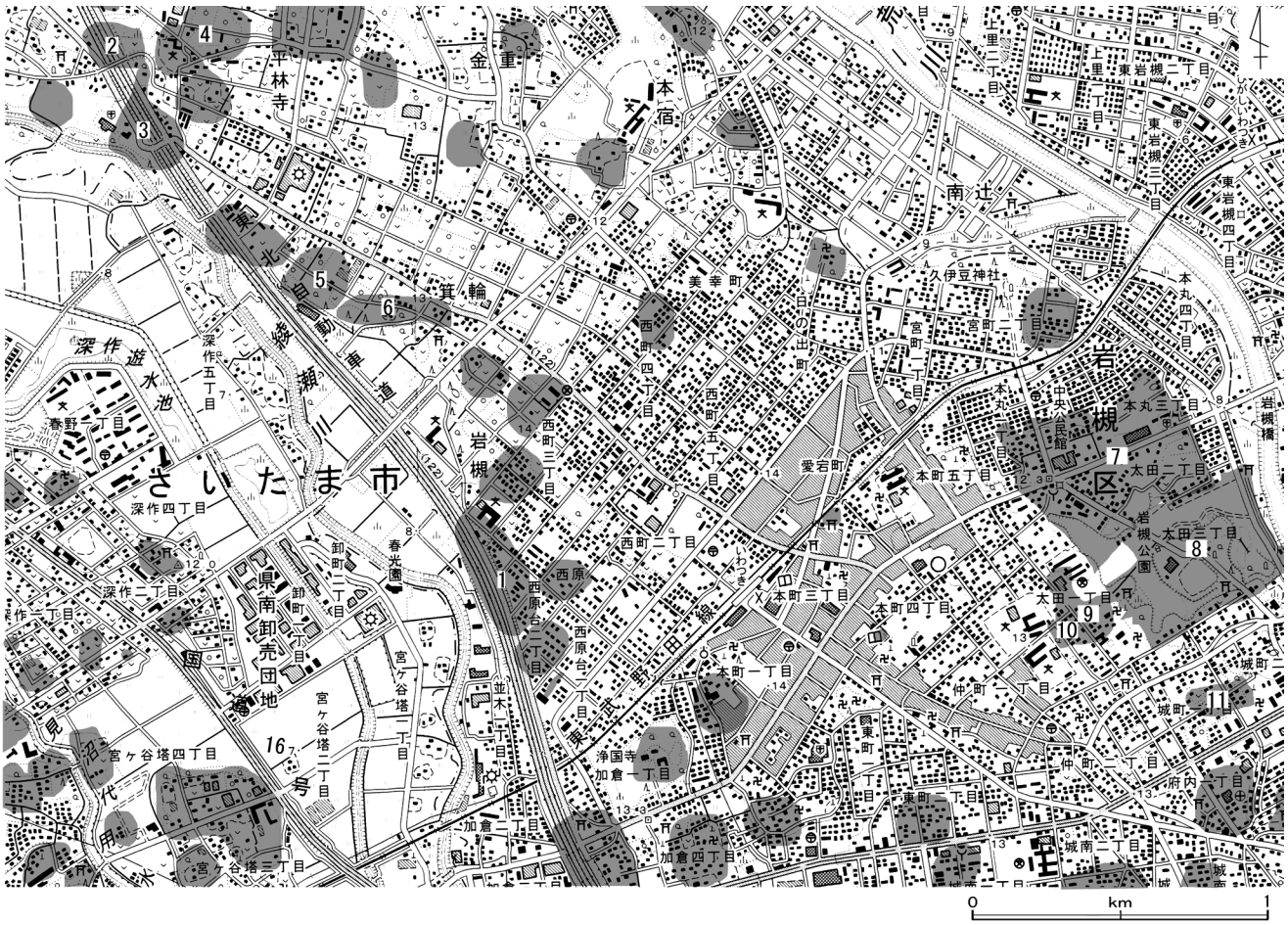
# 第５部

# 西原遺跡（第７地点）

## 第Ⅰ章　調査の契機と経過

### 第１節　調査の契機

平成27年11月、さいたま市岩槻区西原台における個人専用住宅の建設にあたり埋蔵文化財発掘の届出が工事主体者よりさいたま市教育委員会教育長宛に提出された。これを受け、平成27年12月18日に確認調査を実施したところ、縄文時代の遺物包含層・土器片を検出した。これらの遺構・遺物の現状保存が可能か否かの協議を実施したところ、予定される工事では発見された遺構・遺物の保存に影響を及ぼすことが明らかであった。そのため、さいたま市教育委員会が工事に先立って、記録保存のための発掘調査を平成28年２月４日から同年２月24日まで実施した。




**1　西原遺跡**　2　馬込遺跡　3　平林寺遺跡　4　平林寺西東遺跡　5　西原三遺跡　6　箕輪東遺跡　7　岩槻城跡　8　岩槻城跡（新曲輪　鍛冶曲輪跡）　9　太田貝塚　10　岩槻城大構跡　11　新曲輪遺跡

第67図　遺跡の位置

## 第２節　調査の方法と経過

### １　方法

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設部分のうち確認調査により遺構が確認された範囲を中心に調査区を設定し調査を実施した。排土の処理の関係で、西側を１区、東側を２区として調査を実施することになった。重機により表土を除去した後、人力により遺構確認を行い、引き続き遺構確認調査を実施した。遺構の平面測量は主に２メートルピッチのグリッドを設定し、そのグリッドを用いた簡易遣り方測量により実施した。

### ２　経過

発掘調査は平成28年２月４日から同年２月24日まで実施した。

平成28年

２月４日㈭　機材搬入を行う。仮設トイレの設置。近隣の住民へ挨拶、調査区の設定を実施。調査区内で２ｍピッチのグリッドを設定。

２月５日㈮　１区の調査を開始。重機により表土を除去。遺物包含層上面で遺構確認をしたが、確認されなかったため、遺物包含層を下げた。

２月８日㈪　精査を行う。遺構の北側の壁に沿った土坑２基（２号、３号土坑）を確認。調査区の南西側に土坑１基（１号土坑）確認、またその土坑に先行する溝（１号溝）のプランを確認。溝は調査区の南側に存在し東西に延びていることを確認。床面まで確認。

２月９日㈫　１号土坑の掘削実施。１号溝の土層図を作成。２、３号土坑の掘削を実施。

２月10日㈬　ピット６基確認。１号溝の写真撮影を実施。その後、北側壁面土層図、西側壁面土層図、東側壁面土層図の作成及び写真撮影を実施。

２月12日㈮　調査区の写真撮影実施。

２月15日㈪　１区を重機により埋め戻し、２区の表土の除去を実施。２区では調査区の東側半分は破壊を受けていることが判明。その後、雨天のため中止となった。

２月17日㈬　遺構確認作業を実施。土坑１基（４号土坑）、ピット７基を確認。１号溝の続きを確認。

２月18日㈭　２区北側壁面の写真撮影及び土層図の作成を実施。１号溝の追加土層図を作成。

２月19日㈮　２区の全体写真撮影を実施。

２月22日㈪　重機により埋め戻しを行う。

２月23日㈫　全測図の作成実施。機材の搬出を行う。

２月24日㈭　仮設トイレの搬出を行い、現地での作業を終了する。

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

西原遺跡は、さいたま市の東部、岩槻区西原台に所在する。東武野田線岩槻駅から北西約１㎞に位置する。遺跡は岩槻支台西縁の舌状台地に占地する。遺跡の東側は小支台へと強く傾斜し、西側は綾瀬川により形成された沖積地へ急激に落ち込む。遺跡中心部の標高は14～15ｍであり、沖積地との比高差は7ｍ前後を測る。

本遺跡ではこれまでに６地点で発掘調査が実施されている（第２図）。第１地点は埼玉県遺跡調査会が昭和45年に東北自動車道の工事に先立ち発掘調査を実施し、縄文時代早期の炉穴、縄文時代中期の集落跡、弥生時代中期から後期の集落跡を検出している。このうち、縄文時代の中期の集落跡では、環状に分布する住居跡群が確認されている（註１）。また、第２～４地点は岩槻市教育委員会が実施し、第２地点は平成６年に実施され（註２）、縄文時代後期初頭と弥生時代末期の遺構が検出された。第３地点は平成７年に実施され、ピットが検出されたが、年代や性格の把握には至っていない（註３）。第４地点は平成11年に実施され縄文時代及び弥生時代の土器が出土し、土坑・溝・ピットが検出されているが、遺構はいずれも中世以降に位置づけられるものであった（註４）。第５地点・第６地点では縄文時代中期の住居跡が検出されている（註５及び６）。

註１　埼玉県遺跡調査会　1972年『加倉・西原・馬込・平林寺』
なお、中世の遺物は「元林恵子 2013年「西原遺跡出土中世資料と青白磁水注」『埼玉考古』」で紹介されている。

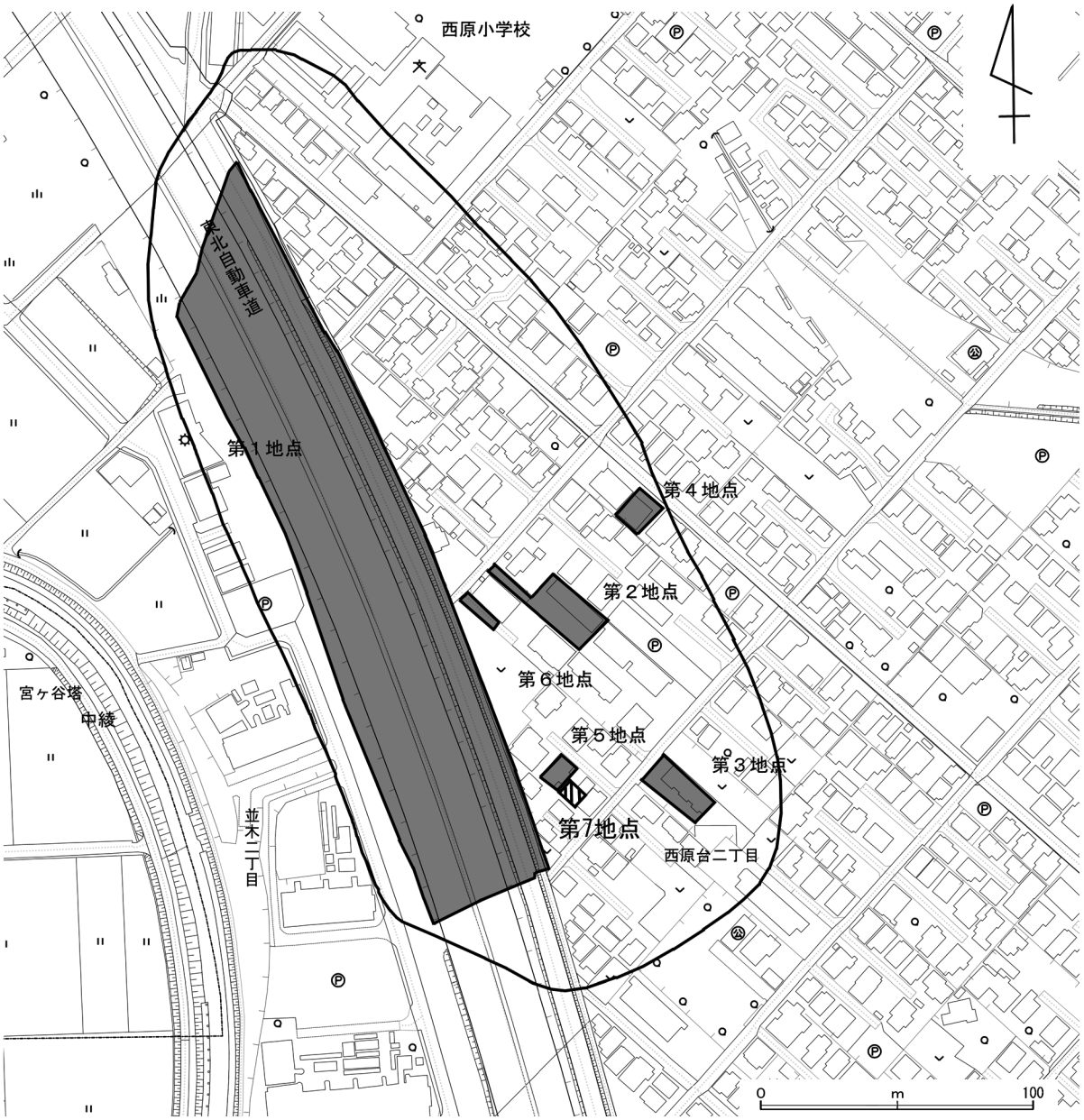
註２　岩槻市教育委員会　1996年『西原遺跡第３地点・箕輪東遺跡発掘調査報告書』岩槻市文化財調査報告書第18集

註３　岩槻市教育委員会　2001年『平成12年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書』

註４　岩槻市教育委員会　2001年『木曽良・上野六丁目・西原・村国道下』岩槻市文化財調査会報告書第22集

註５　さいたま市教育委員会　2008年『西原遺跡（第5地点）、Ｂ－３号遺跡（第２次・第３次調査）、本太五丁目遺跡（第４次調査）、五関中島遺跡（第２次調査）、下大久保新田遺跡（第７次調査）、別所子野上遺跡（第11次調査）』さいたま市内遺跡発掘調査報告書第７集

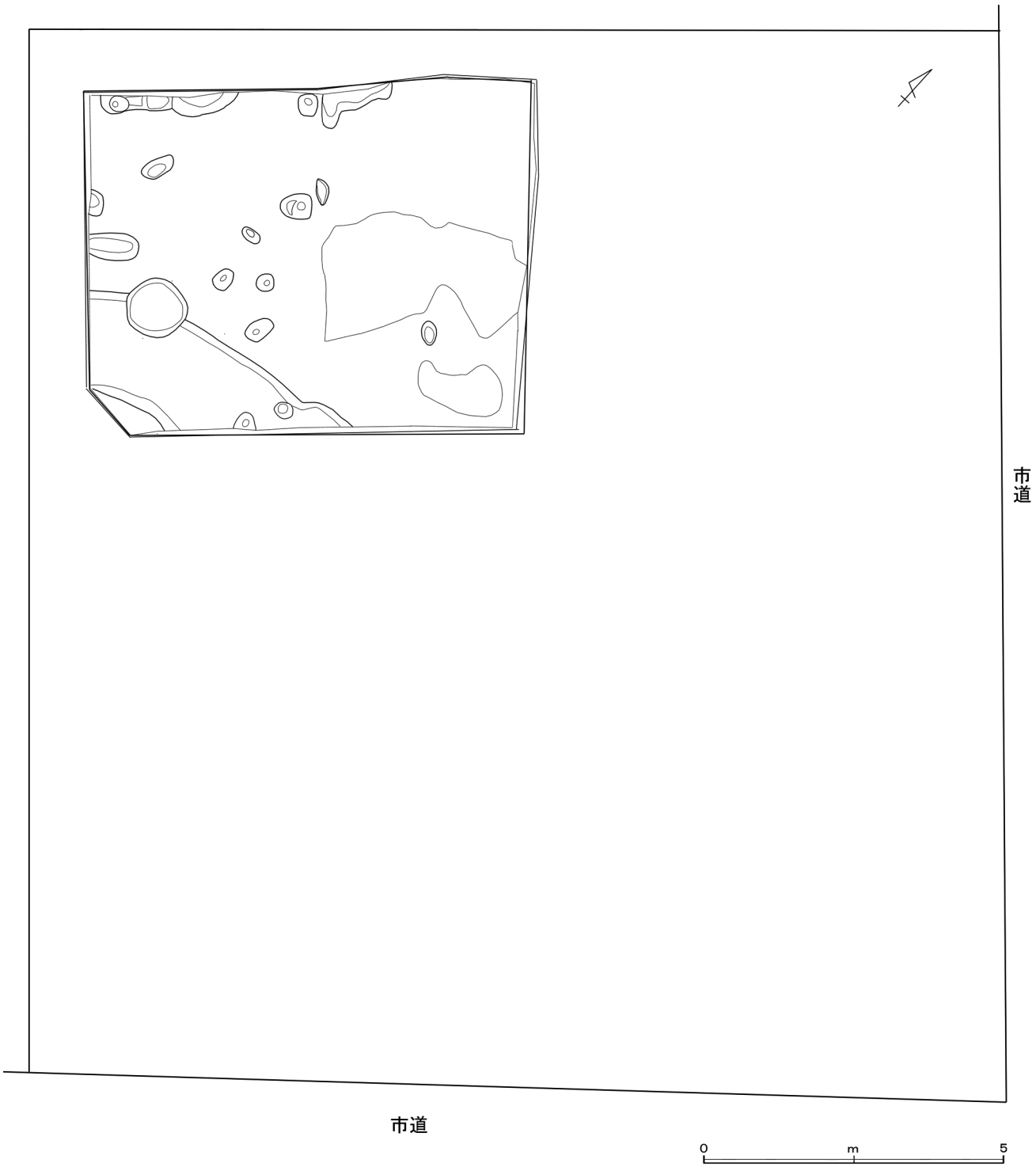
註６　岩井昭子・青木義脩　2013年『西原遺跡（第６地点）』さいたま市遺跡調査会報告書第101集




第68図　発掘調査の位置図

## 第２節　調査区の概要

今回の調査は個人専用住宅建設に伴うもので、住宅建設範囲で確認調査により遺構が検出された部分を中心として調査範囲を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の溝１基、土坑４基、遺物包含層が検出された。遺物は、縄文時代中期の土器・石器、中世の陶器が、18リットル入り遺物収納容器１箱分出土した。

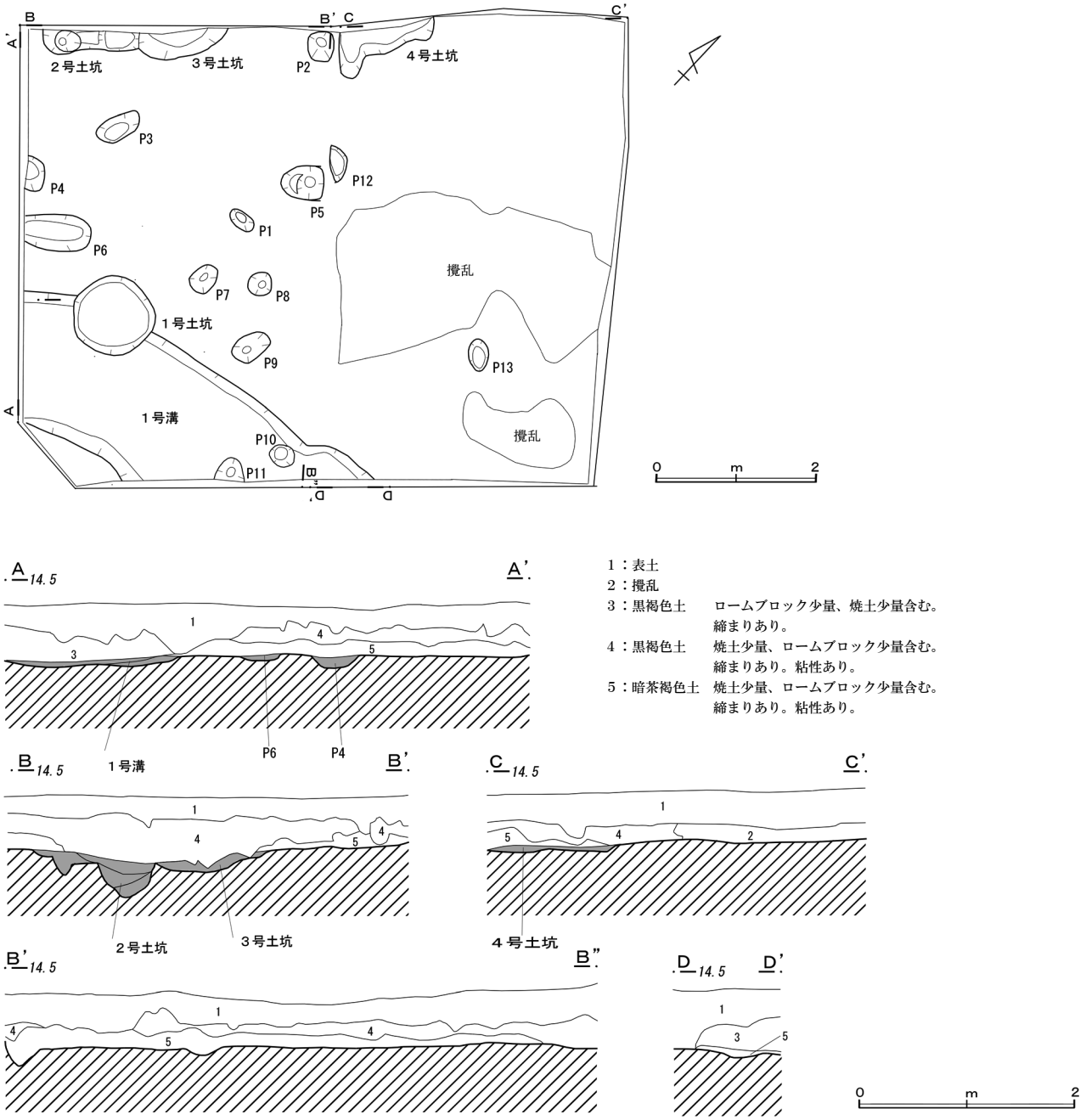



第69図　調査区の位置

# 第Ⅲ章　遺構と遺物

今回の調査区の基本土層は、地表面下30～40㎝までが暗褐色土の表土（第70図１）、その下で20㎝の遺物包含層（第70図３及び４）、さらに10㎝の遺物包含層（第70図５）、最下層でローム面が確認された。

溝１条、土坑４基、ピット13基がローム層上面から検出された。




第70図　全測図及び全土層図

## 第１節　　遺構

### １　土坑（第71図）

#### 第１号土坑

調査区西側中央で検出した。第１号溝の覆土を掘削して形成されている。円形のプランを示す。長径１m、短径90㎝、確認面からの深さは30㎝である。底面は平坦である。層位は黒褐色土のみの１層であり、

縄文時代中期の土器が出土したが、第１号溝より新しい遺構であると考えられる。

**第２号土坑**

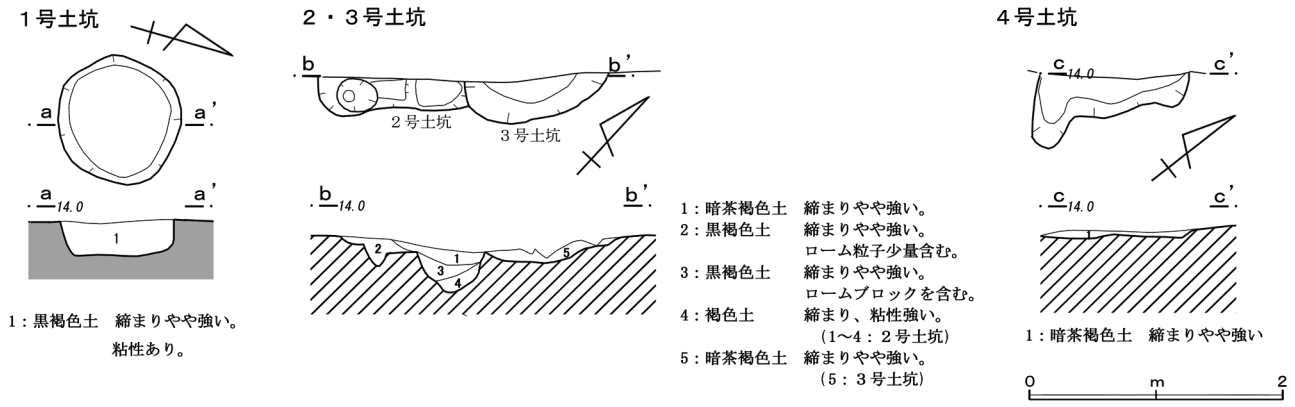
調査区北西側で検出したもので、第３号土坑と隣接しており、一部調査区域外に伸びる。不整形なプランを示している。南北30㎝、東西１ｍ20㎝、確認面からの深さは最大で約30㎝である。土坑の西側にピットのような形状が見られ、底面は起伏がある。遺物は出土していない。

**第３号土坑**

調査区北西側で検出したもので、第２号土坑と隣接しており、一部調査区域外に伸びる。南北方向に長い不整楕円形のプランを呈し、南北50㎝、東西１ｍ10㎝、確認面からの深さは20㎝である。底面は平坦である。縄文時代中期の阿玉台式土器が数点出土した。

**第４号土坑**

調査区北東側で検出したもので、第３号土坑と隣接しており、一部調査区域外に伸びる。不整形なプランを示している。南北60㎝、東西１ｍ20㎝、確認面からの深さは10㎝である。遺物は出土していない。

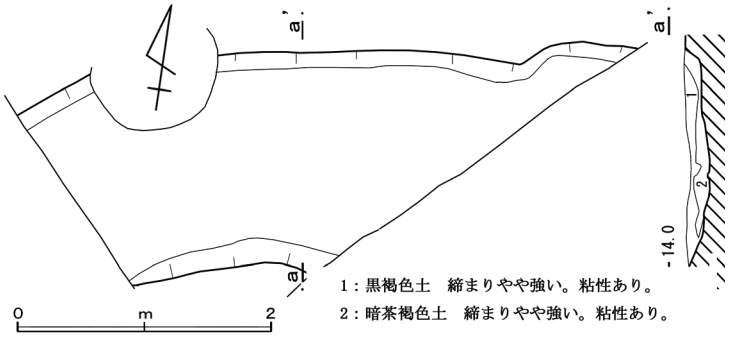



第71図　土坑

## ２　溝

**第１号溝**（第72図）

調査区南西で検出された。平面形状は弧を描いた形状となっている。両側は調査区外へ続いている。上端幅約１ｍ90㎝、深さ約20㎝で底面は平坦で、断面は浅いＵ字形である。遺構覆土は黒褐色土の層と暗茶褐色土の層の２層に分かれており、暗茶褐色土の層から阿玉台式の土器片とチャート製の石鏃が出土した。この溝は縄文時代中期の遺構と考えらえる。




第72図　１号溝

### ３　ピット

今回の調査では、ピットを13基検出した。いずれも遺物の出土はなかった。

第11表　ピット測量表　　（単位：cm）

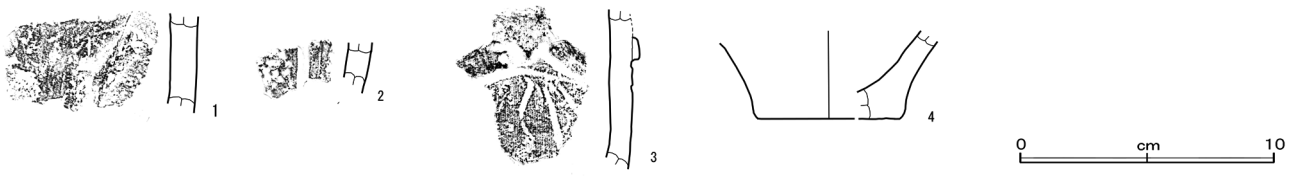
| No. | 長径 | 短径 | 深さ | No. | 長径 | 短径 | 深さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 35 | 20 | 11.4 | 8 | 30 | 30 | 9.4 |
| 2 | 35 | 30 | 15.5 | 9 | 50 | 30 | 24.4 |
| 3 | 58 | 30 | 31.3 | 10 | 30 | 27 | 6.5 |
| 4 | 42 | 20 | 10.7 | 11 | 50 | 40 | 10.1 |
| 5 | 54 | 45 | 13.7 | 12 | 48 | 20 | 12 |
| 6 | 78 | 46 | 14.3 | 13 | 39 | 26 | 15.5 |
| 7 | 37 | 34 | 23.9 | | | | |

## 第２節　遺物

### １　土坑出土遺物（第73図）

１及び２は第１号土坑から出土した。１は深鉢の胴部の破片であり、低い隆帯が緩く弧を描く。阿玉台式と考えられる。２は深鉢の胴部の破片と考えられ、磨消縄文が施され、地文は縄文である。加曽利E式と考えられる。

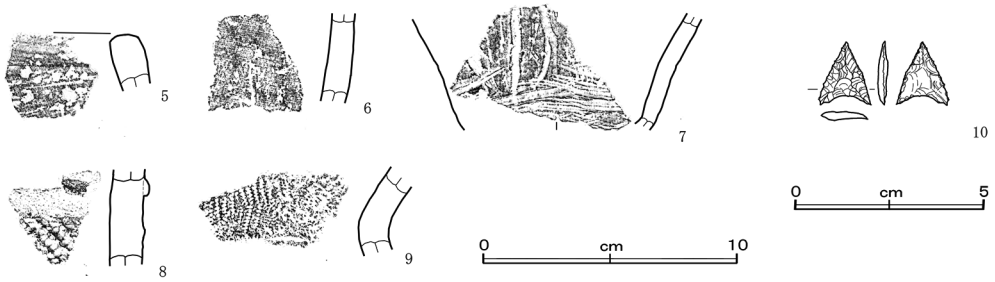
３及び４は第３号土坑から出土した。３は深鉢の胴部の破片であり、欠損が著しい。波状にめぐると思われる隆帯とそれに沿う沈線文、また垂下する沈線文が残る。阿玉台式と考えらえる。４は底部の破片である。復元底部は5.8cmである。




第73図　土坑出土遺物

### ２　第１号溝出土遺物（第74図）

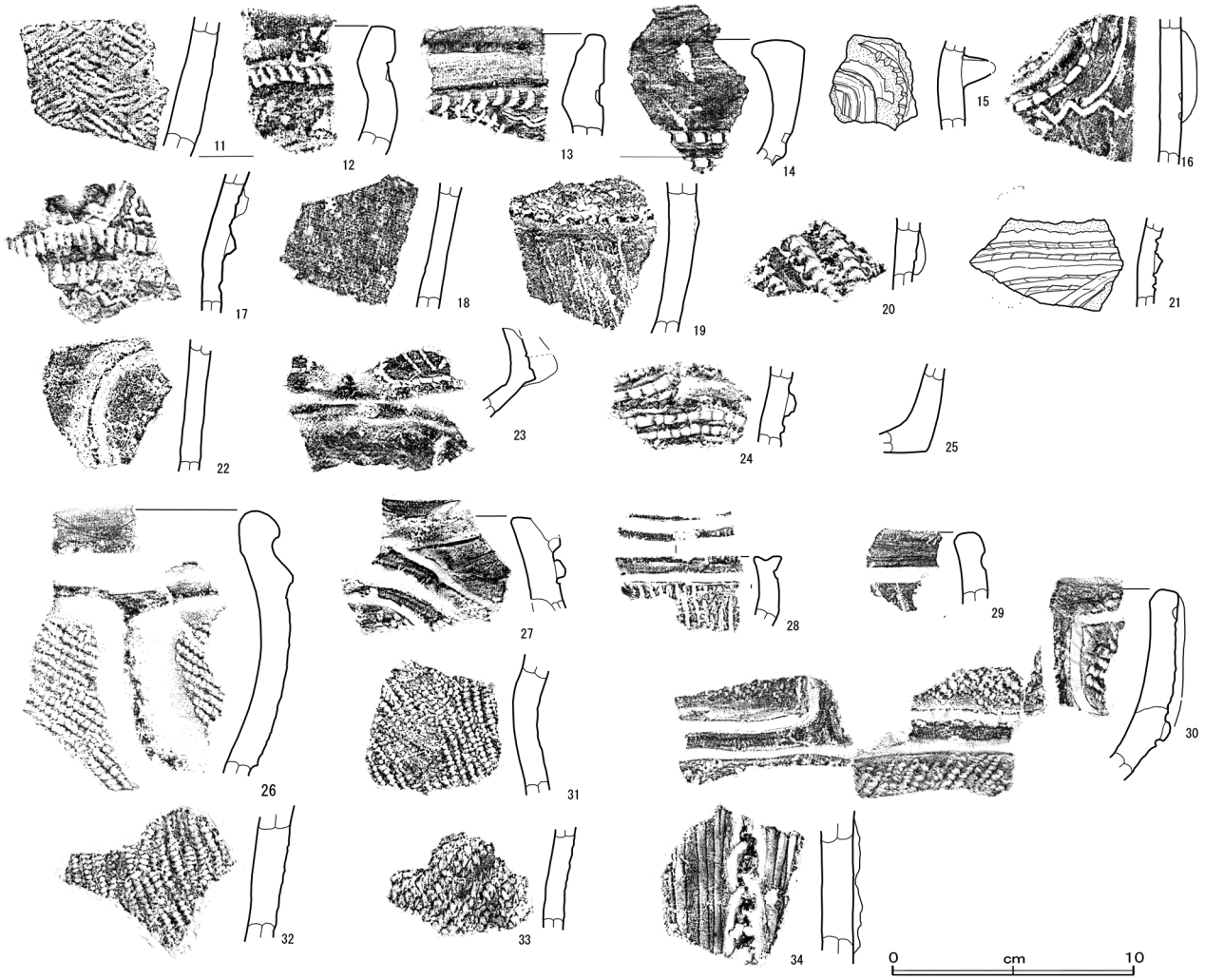
５は深鉢の口縁部の破片、６は深鉢の胴部の破片である。５と６は無文である。５～７は阿玉台式土器と考えられる。８は低い隆帯と広い沈線が横走する。９は単節縄文が施されている。８及び９は加曽利E式と考えられる。10はチャート製の石鏃である。重量0.43ｇ、長さ1.61cm、幅1.31cm、厚さ0.24cmである。




第74図　第１号溝出土遺物

### ３　包含層出土遺物（第75図）

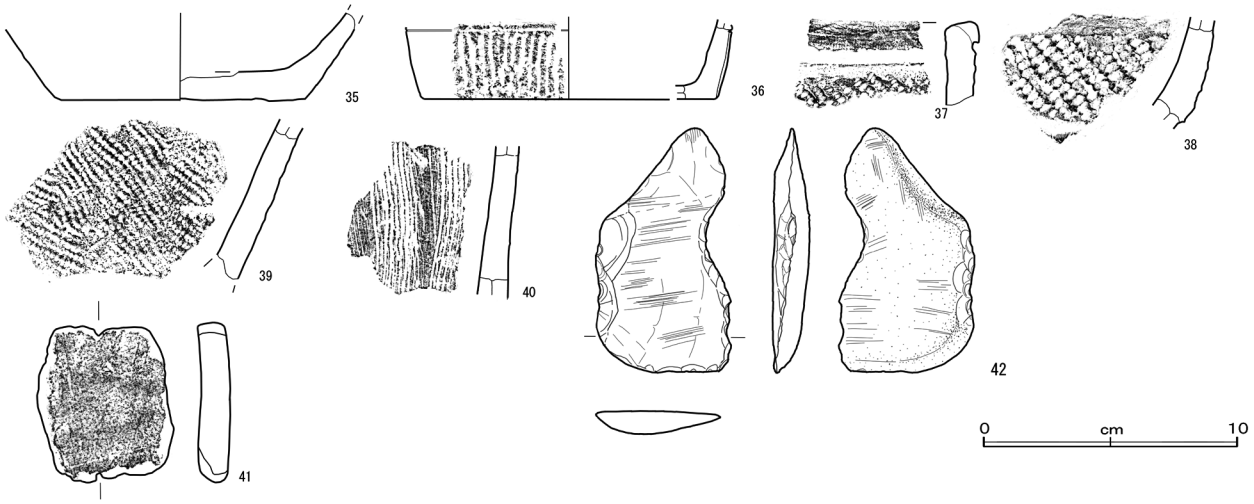
11は胴部の破片であり、縄文時代前期の羽状縄文系の土器である。12から25は縄文時代中期の阿玉台式である。12は深鉢の口縁部であり、口縁部直下に刺突文があり、外反している。雲母を含む。13は口縁部の破片、連続刺突文が施されており、外反している。14は口縁部の破片であり、内湾している。押引文が施されている。15は口縁部に付随する装飾系の破片である。16は口縁部の破片で、上部に欠損が見られる。隆帯に沿って長い角押文が施されている。17は胴部の破片であり、隆帯に沿った1cm程度の工具による連続刺突が施されている。18は胴部の破片であり、無文で雲母を含む。19は胴部破片で半截竹管文が施されている。20は胴部の破片であり、隆帯に沿って爪形文に近い刺突文が施されている。21は胴部の破片であり、隆帯に沿って上下に連続刺突文が見られる。22は胴部の破片であり、隆帯の囲いが途中で途切れている。雲母を多く含む。23は深鉢胴部の破片であり、雲母を含む。刺突文があり、隆帯の貼付文は剝落している。24は胴部の破片であり、隆帯の上下にキャタピラ文様が見られる。25は底部の破片であり、雲母を含む。26から33は縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式である。26は口縁部の破片で内湾している。隆帯の区分けの中に縄文が施されている。27は口縁部であり、口縁部直下に刺突文があり、外反している。28は口縁部の破片であり口縁直下に沈線が施されている。刺突文が見られる。29は口縁部の破片で、やや外反しており沈線文が施されている。30は口縁部の破片で、口縁部から胴部にかけて隆帯により区分けされており、区分けの中に縄文が施されている。31は胴部の破片であり、外反しており縄文が施されている。32は胴部の破片であり、縄文が施されている。33胴部の破片であり、縄文が施されている。34は曽利系土器であり、胴部の破片である。隆帯が一部欠損しており、刺突文が施されている。




第75図　包含層出土遺物

**４　遺構外出土遺物**（第76図）

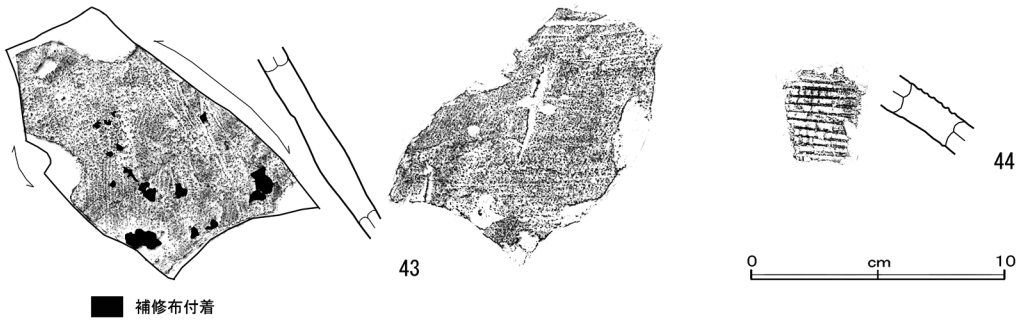
35及び36は縄文時代中期中葉の阿玉台式である。35は底部の破片、半截竹管文が見られる。縦横に区分けがある。36は底部の破片。37から40は縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式である。37は口縁部の破片であり、縄文が施されている。38は胴部の破片であり、縄文が施されている。39は胴部の破片であり、40は胴部の破片である。41は土器片錘である。42は掻器（スクレーパー）である。




第76図　遺構外出土遺物

## ５　中世出土遺物（第77図）

43及び44は中世の遺物である。43は遺構外より、44は包含層より出土した。43は常滑焼大甕の破片でヒビが入った部分を漆を塗った布で補修した跡が見られる。44も常滑焼大甕の肩部で押印文が施されている。自然釉が見られる。




第77図　中世出土遺物

（１）重機による表土除去

（２）調査状況

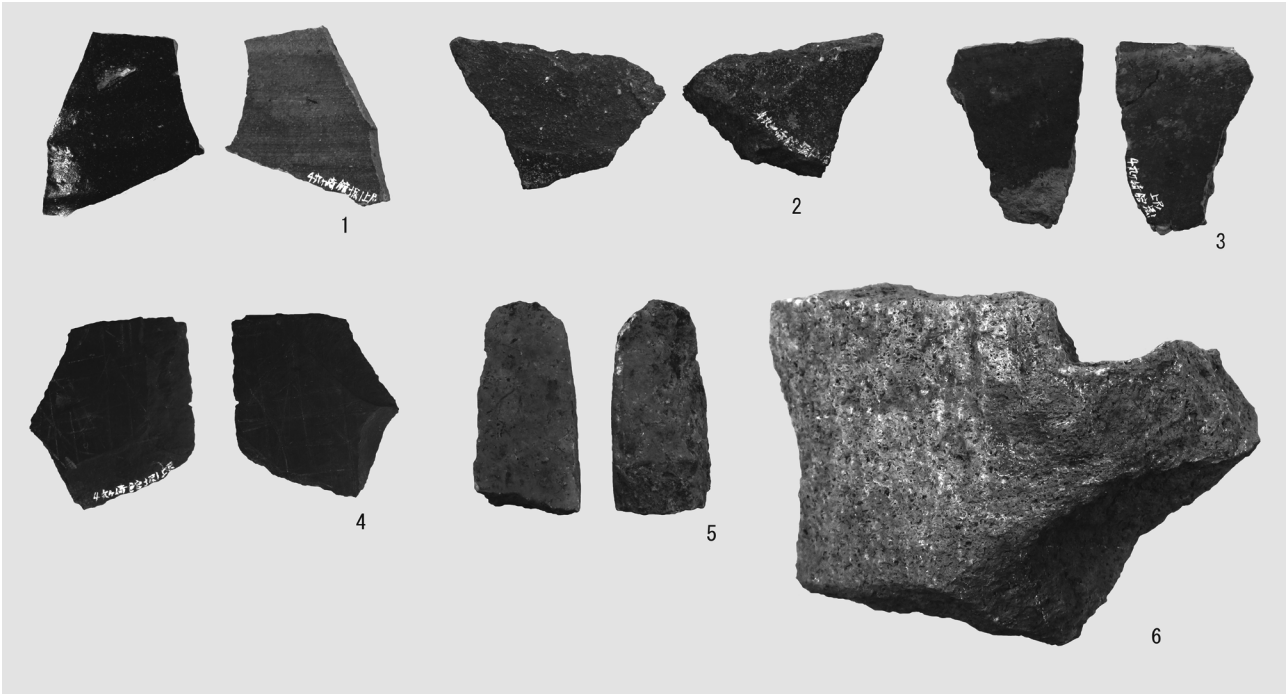
（３）調査区土層

（５）第１号井戸

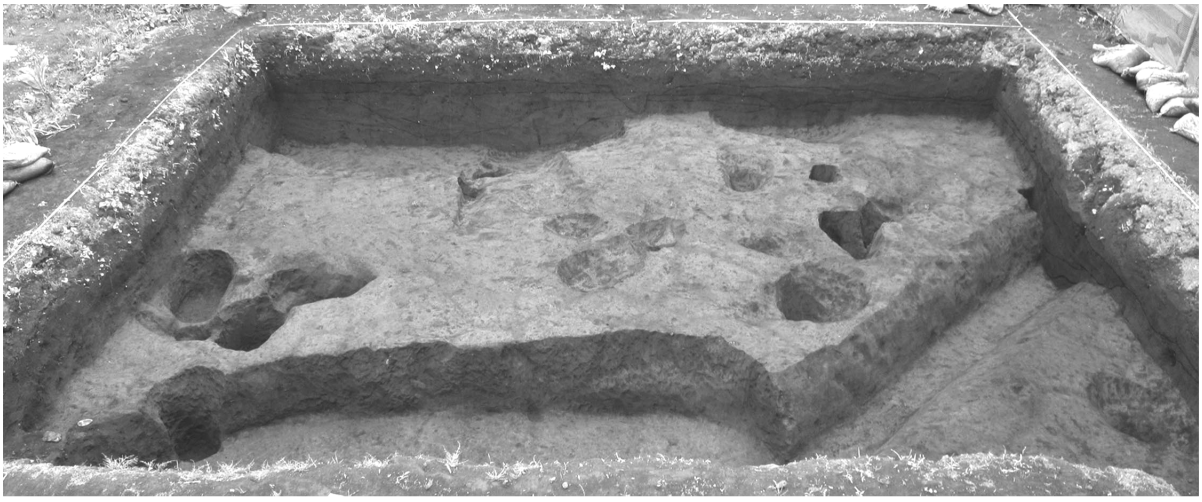
（４）調査区全景

## 図版－２　丸ヶ崎館跡（第１次調査）

（１）第１号堀




（２）出土遺物



（１）１区完掘状況

（２）２区完掘状況

（３）第２号住居跡

（４）第７・８号土坑

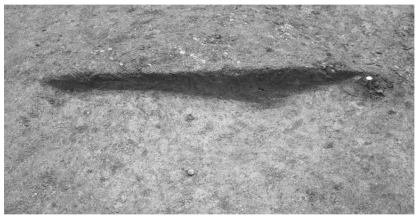
# 図版－４　新曲輪遺跡（第２地点）

（１）第１号住居跡

（２）第１号住居跡遺物出土状態

（３）第１号住居跡遺物出土状態

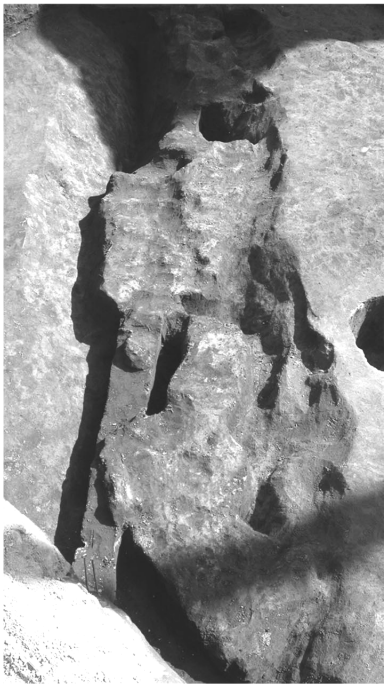
（４）第１号住居跡遺物・炭化材出土状態



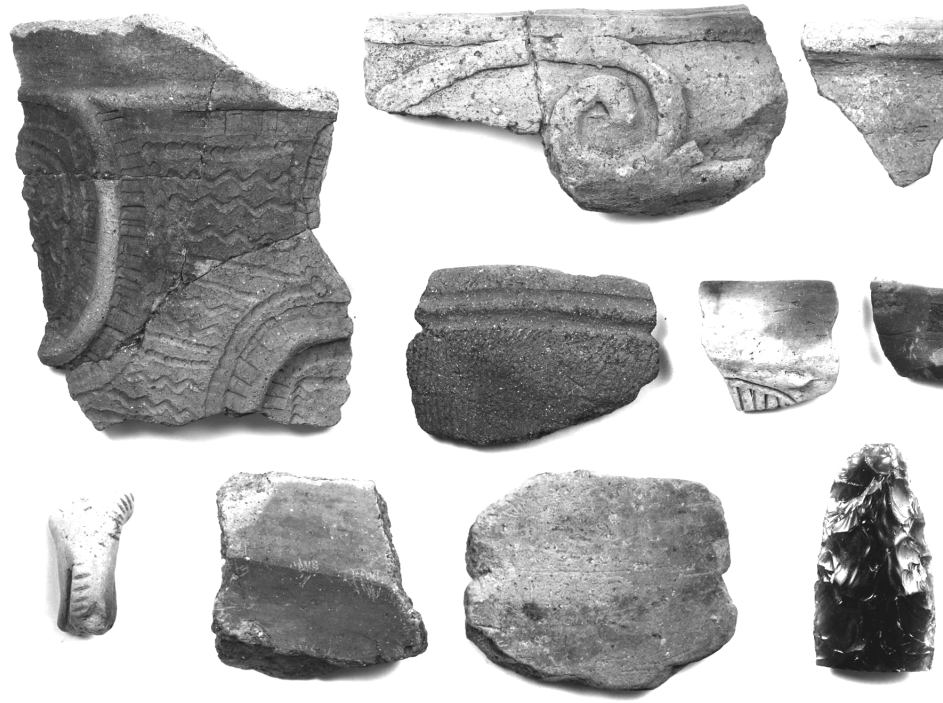
（５）第１号住居炉跡

（６）第１・３号土坑

（７）第１号溝



（８）第１号溝焼土検出状態



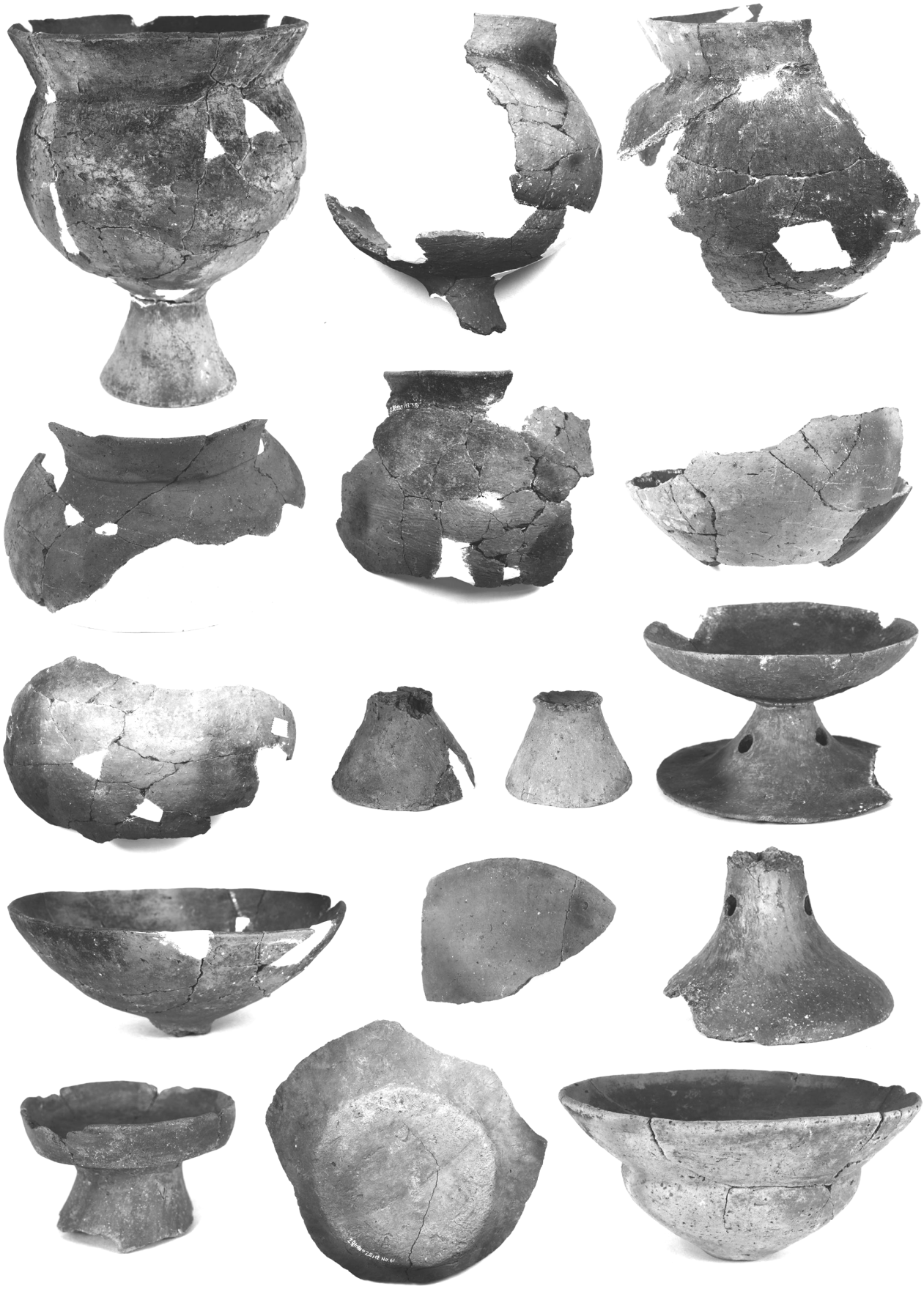
（１）第２号住居跡出土遺物
第 13 図１〜11

（２）土坑・ピット出土遺物
第 15 図１〜５

（３）包含層出土遺物　第 15 図６〜15

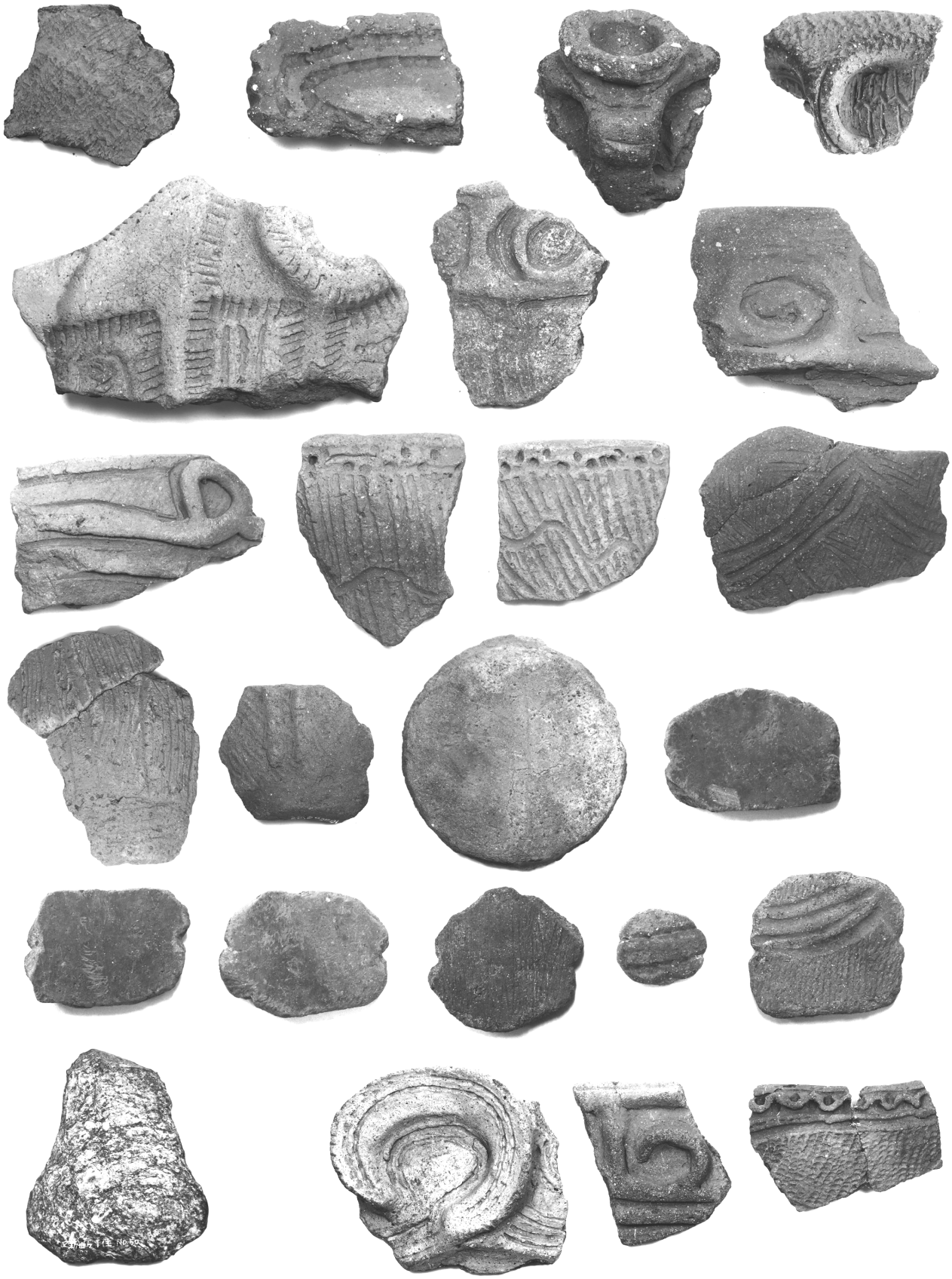
# 図版－６　新曲輪遺跡（第２地点）

(1) 第１号住居跡出土遺物　第 18 図１～７・第 19 図８



(1) 第１号住居跡出土遺物　第 19 図９～15・第 20 図 16～25

# 図版－８　新曲輪遺跡（第２地点）



（1）第１号住居跡出土遺物　第 21 図 26～46

（２）第１号溝出土遺物　第 24 図１～３

（１）調査区全景（東側）

（２）調査区全景（西側）

# 図版-10　根切遺跡（第13次調査）

（１）第 96 号住居跡（西側）

（２）第 97 号住居跡（東側）

（３）第 97 号住居跡内ピット（北東側）

（４）第 27 号溝（北側）

（５）遺物出土状況

（第 29 図 No. １・２）

（６）遺物出土状況

（第 29 図 No. ４・５）

（７）遺物出土状況

（第 29 図 No. ６～９）

（８）遺物出土状況

（第 29 図 No. 10～14）

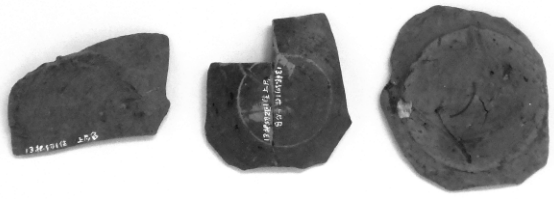
（１）第 96 号住居跡出土遺物（第 30 図１・２）

（２）第 96 号住居跡出土遺物（第 30 図３）

（３）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図５・13・19）

（４）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図１～４）

（５）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図５）



（６）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図６～８）

（７）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図９～12）

# 図版-12　根切遺跡（第13次調査）

（１）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図 13）

（２）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図 14～18）

（３）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図 19）

（４）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図 20・21）

（５）第 97 号住居跡出土遺物（第 31 図 22・23）

（６）第 97 号住居跡出土遺物（第 32 図１）

（７）第 97 号住居跡出土遺物（第 32 図４）

（８）第 97 号住居跡出土遺物
（第 32 図２）

（９）第 97 号住居跡出土遺物
（第 32 図３）

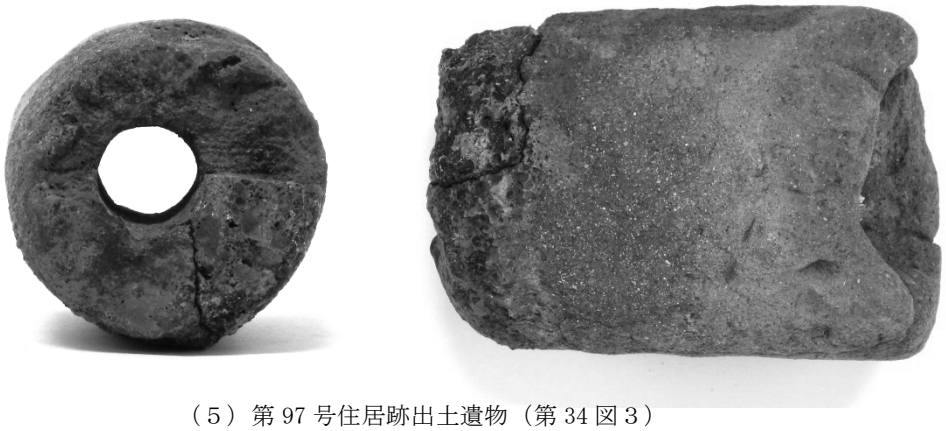
（10）第 97 号住居跡出土遺物（第 32 図５）

（１）第 97 号住居跡出土遺物（第 33 図１）

（２）第 97 号住居跡出土遺物（第 33 図２）

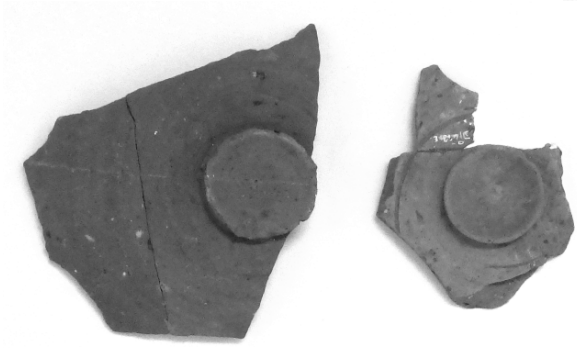
（３）第 97 号住居跡出土遺物
（第 34 図１）

（４）第 97 号住居跡出土遺物（第 34 図２）



（５）第 97 号住居跡出土遺物（第 34 図３）

# 図版-14　根切遺跡（第13次調査）



（1）第 25 号溝出土遺物（第 37 図１・２）

（2）第 25 号溝出土遺物（第 37 図３～６）

（3）第 25 号溝出土遺物（第 37 図７～10）

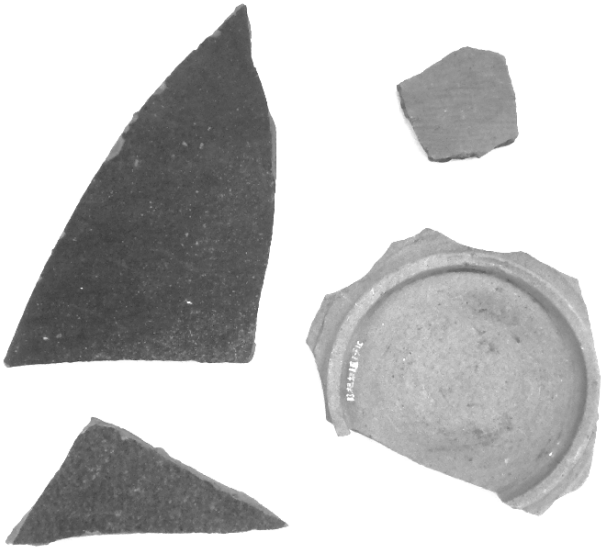
（4）第 25 号溝出土遺物（第 37 図 11～15）

（5）第 25 号溝出土遺物（第 37 図 16～18）

（6）第 25 号溝出土遺物（第 37 図 19・20）

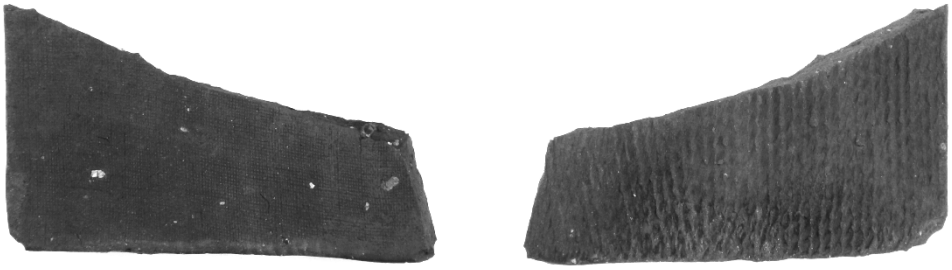
（１）第 25 号溝出土遺物（第 38 図１）

（２）第 25 号溝出土遺物（第 38 図２）



（３）第 25 号溝出土遺物（第 38 図３～６）

（４）第 25 号溝出土遺物（第 38 図７・８）



（５）第 25 号溝出土遺物（第 39 図１）

（６）第 25 号溝出土遺物
（第 39 図２・３）

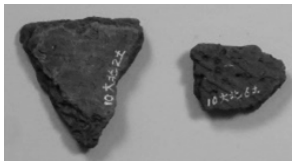
## 図版-16　大北遺跡（第 10 次調査）

（1）調査区１区全景

（2）調査区２区全景

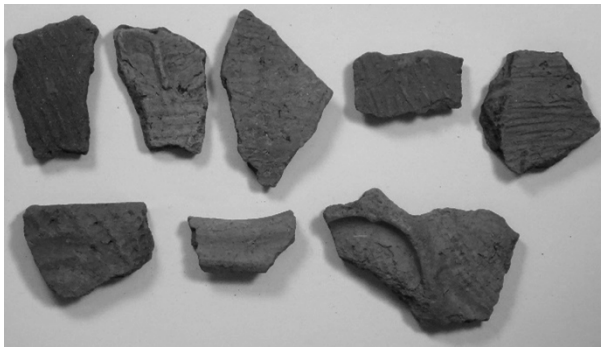
（3）第４号土坑

（4）土坑出土遺物（表）（第 46 図） 1・2



（6）土坑出土遺物（裏）（第 46 図） 1・2

（8）包含層出土遺物（表）（第 48 図） 7～14



(10) 包含層出土遺物（表）（第 48 図）15～22

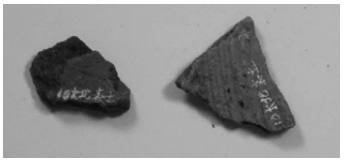
(12) 遺構外出土遺物（表）（第 49 図）23～30

（5）ピット出土遺物（表）（第 47 図） 3～6

（7）ピット出土遺物（裏）（第 47 図） 5

（9）包含層出土遺物（裏）（第 48 図） 7～14

(11) 包含層出土遺物（裏）（第 48 図）15～19



(13) 遺構外出土遺物（裏）（第 49 図）23・24

# 図版-18　大北遺跡（第 11 次調査）

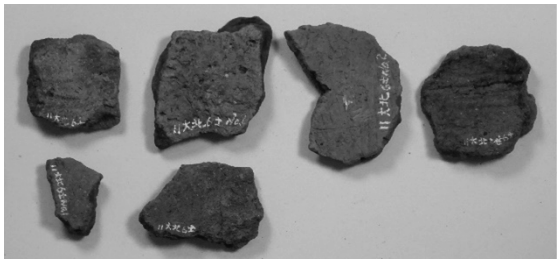
（1）調査区全景

（2）第 1 号住居跡

（3）第 1 号土坑、第 2 号土坑

（4）作業風景

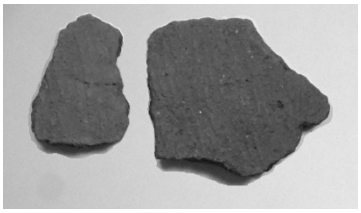
（5）第 1 号住居跡出土遺物（表）（第 53 図）１～８



（6）第 1 号住居跡出土遺物（裏）（第 53 図）１～６

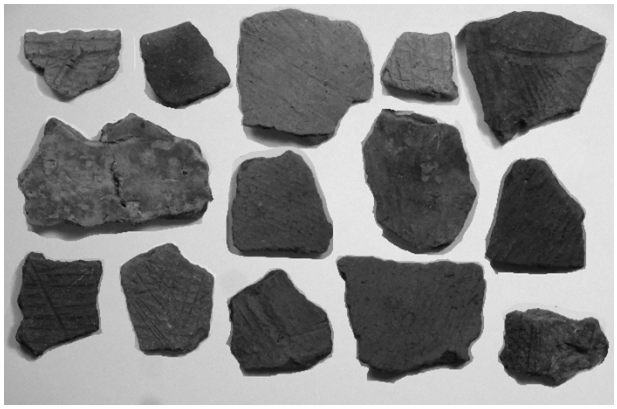
（7）土坑出土遺物（表）（第 54 図）９～15

（8）土坑出土遺物（裏）（第 54 図）９～15



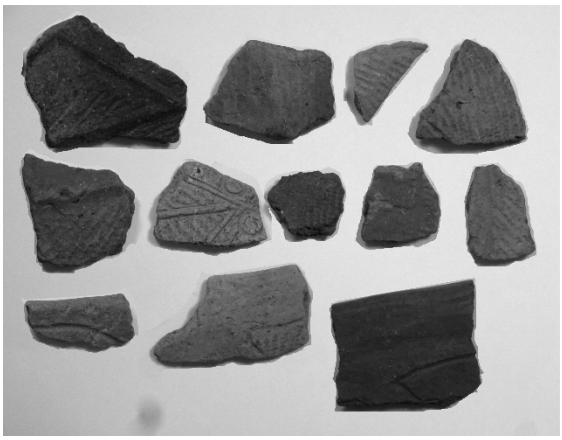
（9）ピット出土遺物（表）（第 55 図）16・17

（10）ピット出土遺物（裏）（第 55 図）16・17



（11）包含層出土遺物（表）（第 56 図）18～31

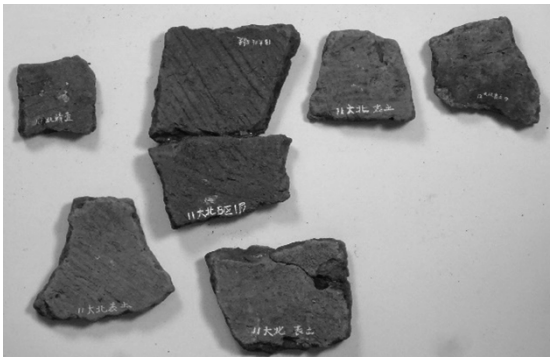
（12）包含層出土遺物（裏）（第 56 図）18～31



（13）包含層出土遺物（表）（第 56 図）32～43

（14）包含層出土遺物（表）（第 56 図）32

（15）遺構外出土遺物（表）（第 57 図）44～50



（16）遺構外出土遺物（裏）（第 57 図）44～50

（17）遺構外出土遺物（第 57 図）51～54

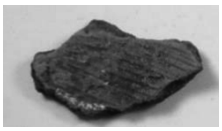
# 図版-20　大北遺跡（第 12 次調査）

（1）調査区全景

（2）第３号土坑及びピット群

（3）黒曜石製の石鏃出土状況

（4）土坑出土遺物（表）（第 60 図） 1



（5）土坑出土遺物（裏）
（第 60 図） 1

（6）ピット出土遺物
（第 60 図） 2

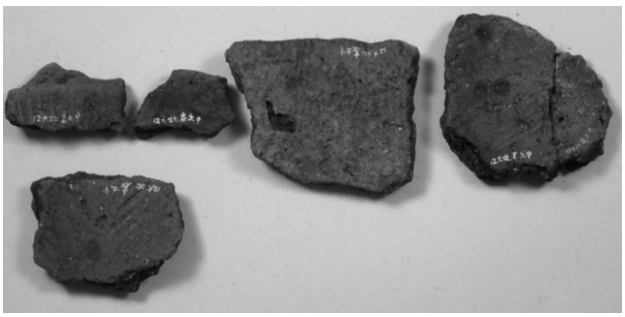
（7）包含層出土遺物（表）（第 61 図） 3～14

（8）包含層出土遺物（裏）（第 61 図） 3～14

（9）包含層出土遺物（表）（第 61 図）15～17

(10) 包含層出土遺物（裏）（第 61 図）15

（11）遺構外出土遺物（表）（第 62 図）18～25

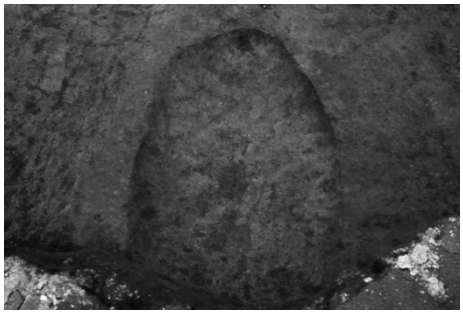


(12) 遺構外出土遺物（裏）（第 62 図）18～25

# 図版-22　大北遺跡（第 13 次調査）

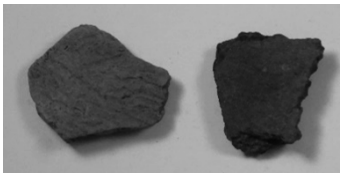
（1）調査区全景

（2）調査区東側

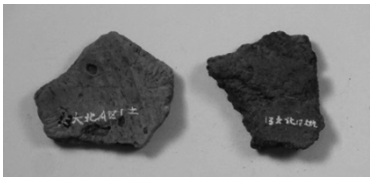


（3）第 1 号土坑

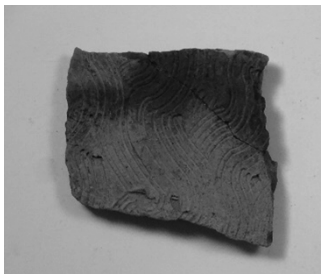
（4）作業風景



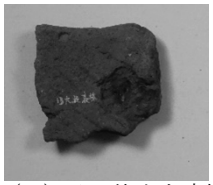
（5）土坑出土遺物（表）（第 64 図） 1・2



（6）土坑出土遺物（裏）（第 64 図） 1・2



（7）包含層出土遺物（第 65 図） 3



（9）その他出土遺物（裏）（第 66 図） 4

（8）遺構外出土遺物（表）（第 66 図） 4～7

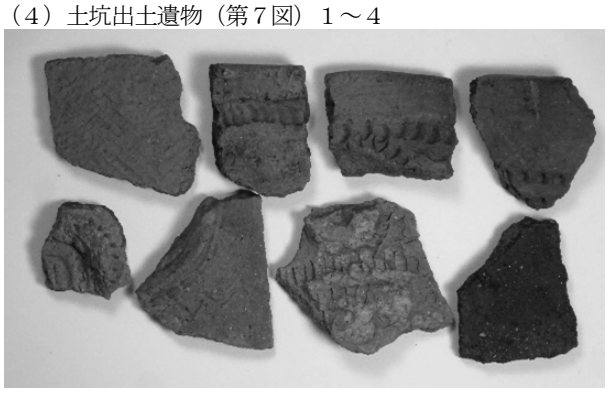
（1）１区全景

（2）２区全景

（3）調査風景

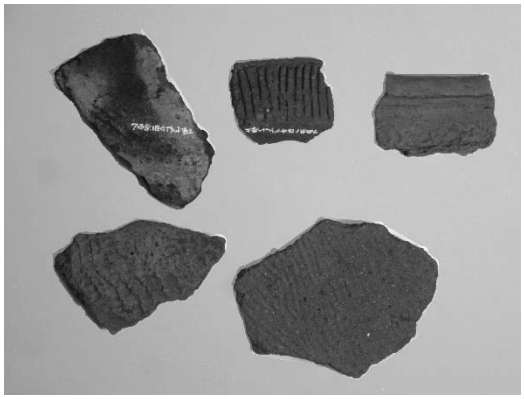
# 図版-24　西原遺跡（第７地点）

（４）土坑出土遺物（第７図）１～４



（７）遺物包含層出土遺物（第９図）11～18

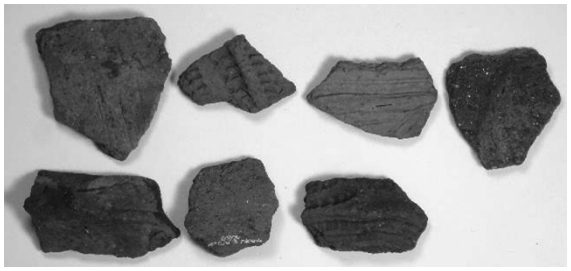
（９）遺物包含層出土遺物（第９図）26～31



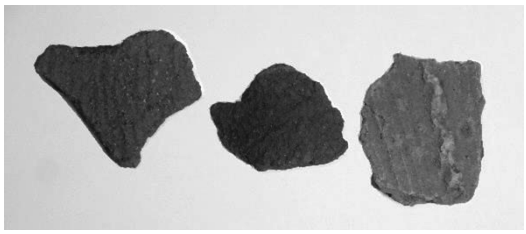
（12）遺構外出土遺物（第 10 図）35～39

（５）第１号溝出土遺物（第８図）５～９

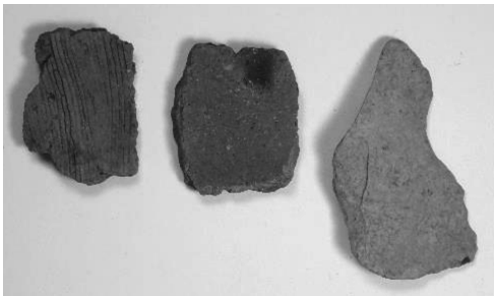
（６）１号溝出土遺物（第８図）10



（８）遺物包含層出土遺物（第９図）19～25



（10）遺物包含層出土遺物（第９図）32～34



（11）遺構外出土遺物（第 10 図）40～42

（13）中世の出土遺物（第 11 図）43・44

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | まるがさきやかたあと、しんぐるわいせき、ねぎりいせき、おおぎたいせき、にしはらいせき |
| 書　　名 | 丸ヶ崎館跡（第１次調査）、新曲輪遺跡（第２地点）、根切遺跡（第13次調査）、大北遺跡（第10～13次調査）、西原遺跡（第７地点） |
| シリーズ名 | さいたま市内遺跡発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第16集 |
| 編 著 者 名 | 青木文彦・関根俊雄・鈴木久雄・山形洋一・橋本玲未・永瀬史人・吉岡卓真 |
| 編 集 機 関 | さいたま市教育委員会 |
| 所 在 地 | 330-9588　埼玉県さいたま市浦和区常盤６丁目４番４号　TEL 048-829-1724 |
| 発行年月日 | 2017年3月28日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| まるがさきやかたあと<br>丸ヶ崎館跡<br>（第１次調査） | さいたま市見沼区<br>大字丸ヶ崎 | 11104 | 12-148 | 35°<br>57′<br>24″ | 139°<br>39′<br>21″ | 2010.12. 9<br>～<br>2010. 12.17 | 25㎡ | 個人専用住宅建設 |
| しんぐるわ<br>新曲輪遺跡<br>（第２地点） | さいたま市岩槻区<br>城町一丁目 | 11110 | 77-062 | 35°<br>56′<br>48″ | 139°<br>42′<br>37″ | 2010. 5.26<br>～<br>2010. 6.30 | 70㎡ | 個人専用住宅建設 |
| ねぎり<br>根切遺跡<br>（第13次調査） | さいたま市西区<br>大字島根 | 11101 | 12-348 | 35°<br>52′<br>55″ | 139°<br>36′<br>01″ | 2010. 8.31<br>～<br>2010. 9.30 | 110㎡ | 個人専用住宅建設 |
| おおぎた<br>大北遺跡<br>（第10次調査） | さいたま市緑区<br>東浦和三丁目 | 11109 | 01-037 | 35°<br>51′<br>56″ | 139°<br>41′<br>51″ | 2011. 2.18<br>～<br>2011. 3.11 | 47㎡ | 個人専用住宅建設 |
| おおぎた<br>大北遺跡<br>（第11次調査） | さいたま市緑区<br>東浦和三丁目 | 11109 | 01-037 | 35°<br>51′<br>56″ | 139°<br>41′<br>52″ | 2011. 4.14<br>～<br>2011. 4.22 | 20㎡ | 個人専用住宅建設 |
| おおぎた<br>大北遺跡<br>（第12次調査） | さいたま市緑区<br>東浦和三丁目 | 11109 | 01-037 | 35°<br>51′<br>56″ | 139°<br>41′<br>51″ | 2011. 4.21<br>～<br>2011. 4.28 | 10㎡ | 個人専用住宅建設 |
| おおぎた<br>大北遺跡<br>（第13次調査） | さいたま市緑区<br>東浦和三丁目 | 11109 | 01-037 | 35°<br>51′<br>56″ | 139°<br>41′<br>52″ | 2012. 4.18<br>～<br>2012. 4.27 | 19.4㎡ | 個人専用住宅建設 |
| にしはら<br>西原遺跡<br>（第７地点） | さいたま市岩槻区<br>西原台二丁目 | 11110 | 77-073 | 35°<br>57′<br>00″ | 139°<br>41′<br>03″ | 2016. 2. 4<br>～<br>2016. 2.24 | 44.32㎡ | 個人専用住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 丸ヶ崎館跡<br>（第１次調査） | 館跡 | 中・近世 | 溝・井戸、土坑 | 陶磁器・土器・茶臼 | 東西方向に伸びる堀を調査した。 |
| 新曲輪遺跡<br>（第２地点） | 集落跡 | 縄文時代<br><br>弥生時代<br>中世 | 住居跡・土坑<br><br>住居跡<br>溝 | 縄文時代中期土器・石器<br>土器 | 縄文時代中期の土坑・ピット群を検出した。弥生時代後期の住居跡を検出し壺、台付甕が出土した。 |
| 根切遺跡<br>（第13次調査） | 集落跡 | 古墳時代後期<br><br>平安時代 | 住居跡<br><br>住居跡・土坑・溝 | 土師器<br><br>須恵器皿・甕<br>須恵器円面硯<br>土製品（羽口） | 平安時代の住居跡とそれを切る溝から遺物が集中出土した。円面硯・羽口なども出土した。 |
| 大北遺跡<br>（第10次～13次調査） | 集落跡 | 縄文時代早期<br>縄文時代中期<br>縄文時代後期 | 住居跡・土坑 | 縄文時代早期、中期後期土器・石器 | 縄文時代早期後葉条痕文系土器が多く出土した。検出した１軒の住居跡も条痕文系期のものと思われる。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 西原遺跡<br>（第７地点） | 集落跡 | 縄文時代中期 | 溝・土坑・遺物包含層 | 縄文時代中期 | 縄文時代中期の土坑及び遺物包含層を調査した。 |
| 要　約 | ８件の発掘調査を収録した。収録した遺跡の立地は、根切遺跡は荒川低地の自然堤防上、他は大宮台地上に立地している。調査結果の主要な時期は、縄文時代から近世にわたる。<br>**縄文時代**　大北遺跡で早期の住居跡、土坑を調査した。新曲輪遺跡で中期の土坑及びピット群、西原遺跡で中期の土坑等を調査した。<br>**弥生時代**　新曲輪遺跡で弥生時代後期の住居跡を調査した。床面壁際からは、伏せて並べた状態で甕や甑が一括出土した。<br>**古墳～平安時代**　根切遺跡で、古墳時代後期と平安時代の住居跡を調査した。平安時代の住居跡からは黒色土器の高台付皿がまとまって出土したほか、須恵器の円面硯や土製品の羽口、平瓦等も出土した。<br>**中・近世**　丸ヶ崎館跡で中世末から近世の堀を調査した。新曲輪遺跡で中世以前の溝を調査した。 | | | | |


さいたま市内遺跡発掘調査報告書　第16集

丸ヶ崎館跡（第１次調査）

新曲輪遺跡（第２地点）

根切遺跡（第13次調査）

大北遺跡（第10次～第13次調査）

西原遺跡（第７地点）

平成29年３月28日　発行

編集　生涯学習部文化財保護課

発行　さいたま市教育委員会

埼玉県さいたま市浦和区常盤６丁目４番４号
TEL　０４８－８２９－１７２４